ドイツ　アカデミック街道を歩く
２０１７年９月８日

絵解き　地図と写真による大学入門

ミュンヘンを歩いてみよう
ドイツ　アカデミック街道を歩く
丹野義彦　（東京大学教養学部心理・教育学部会）

ドイツ　アカデミック街道を歩く

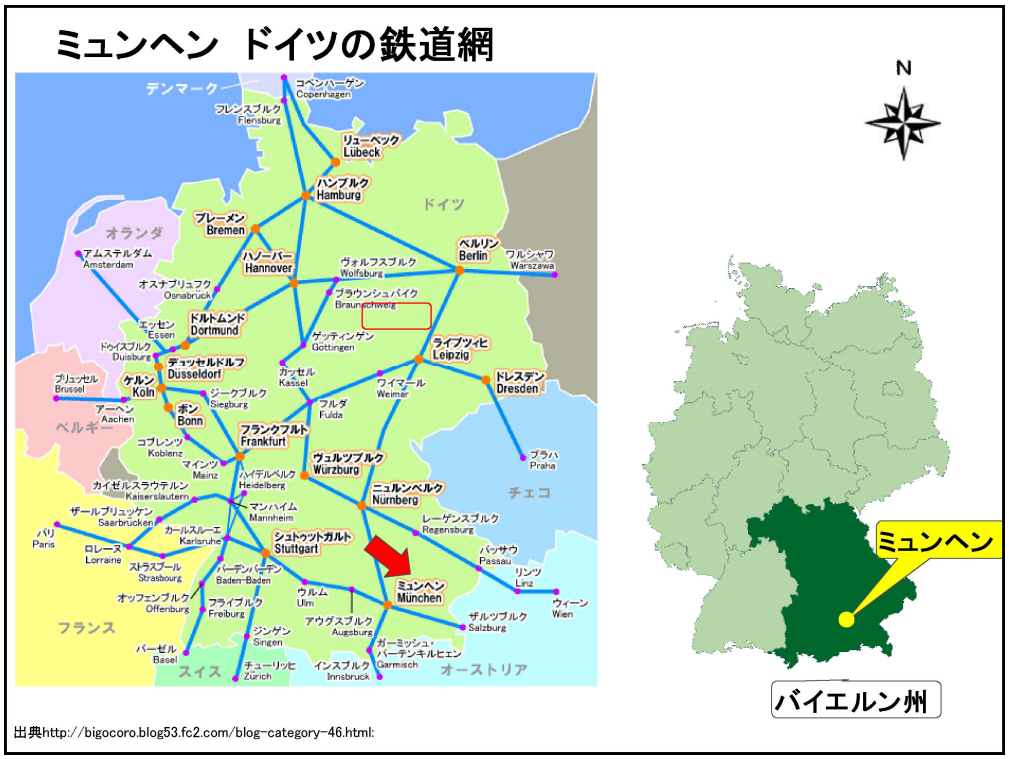
ドイツ各地の大学を訪ね、歴史・学問・社会とのかかわりなどを紹介したい。大学散歩の面白さを伝えるために、私はアカデミックツアーとして、ロンドン編、アメリカ編、イギリス編、イタリア編の４部作を刊行してきた（星和書店および有斐閣）。これからドイツ編をお届けしたい。私はこれを「ドイツ・アカデミック街道」と名前をつけた。ハイデルベルクとライプツィヒの次は、ミュンヘンをとりあげたい。

学問発祥の地

ミュンヘンは、人口140万人の都市で、ドイツではベルリン、ハンブルクに次いで３番目に多い。

ミュンヘンは「イーザル川のアテネ」と呼ばれる芸術・文化の街である。また、ミュンヘン大学はハイデルベルク大学に次いで２番目に古い歴史を持ち、日本からの留学生も多い。ミュンヘンはビール祭りは取り上げられるのに、この町の学問や文化はあまり取り上げられることがない。そこで、ここでは、旅行ガイドブックにはほとんど取り上げられることがないこの町の学問や文化を散歩してみたい。

ミュンヘン　ドイツの鉄道網



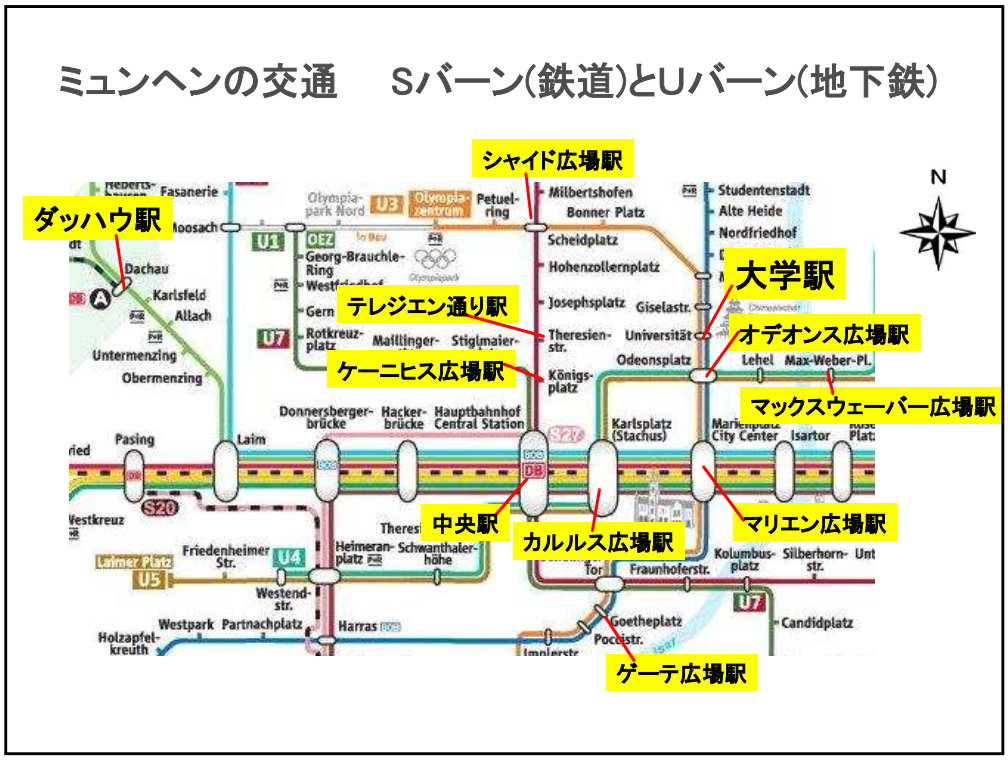
出典http://bigocoro.blog53.fc2.com/blog-category-46.html:

ミュンヘンは、鉄道地図に示すように、ドイツの最も南にある大都市である。

ミュンヘンはバイエルン州の州都である。バイエルン州は、地図に示すように、ドイツの最も南の州であり、オーストリアやチェコと国境を接している。場所的には、ベルリンやフランクフルトなどよりも、オーストリアやスイスのほうがはるかに近い。オーストリアのザルツブルクはすぐ近くである。オーストリアとの国境にはアルプス山脈が走っている。

飛行機を利用する場合、ミュンヘン空港に着く。鉄道のＳバーンで 20 分ほどでミュンヘン中心部に着く。

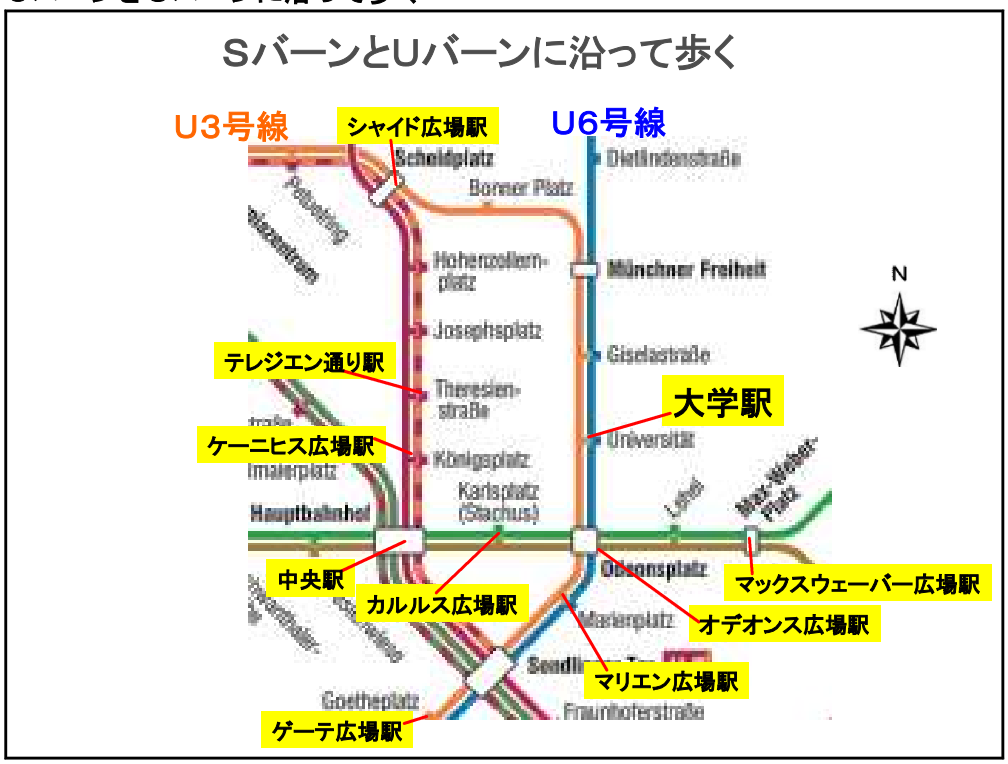
ミュンヘンの交通　Sバーン（鉄道）とＵバーン（地下鉄）



遠距離のＳバーンと、近距離で地下鉄のＵバーンが網の目のように走っている。乗り方はごく簡単なので、すぐに乗りこなすことができる。まず路線番号と駅名を調べればよい。トラムの地図は、ホテルのフロントや観光案内所でもらえる。

一日券を停留所で買うとよい。一日券は、最初に乗った時に時刻を刻印したら、あとは乗り降りするだけ。切符をチェックされることもない(時々検札の人が乗り込んでくるらしいので、切符は買わないといけない)。ちなみに私がミュンヘンに行ったのは 2012 年である。

Ｕバーンと Ｓバーンに沿って歩く



本論では、第１に、Ｕバーンの３号線・６号線に沿って、ミュンヘン大学やミュンヘン大学病院、マックスプランク精神医学研究所などを回ろう。

第２に、Ｕバーン１号線・２号線に沿って、ミュンヘン工科大学や森鴎外留学の地を回る。

第３に、Ｕバーン４号線・５号線に沿って、ミュンヘン工科大学病院を回る。

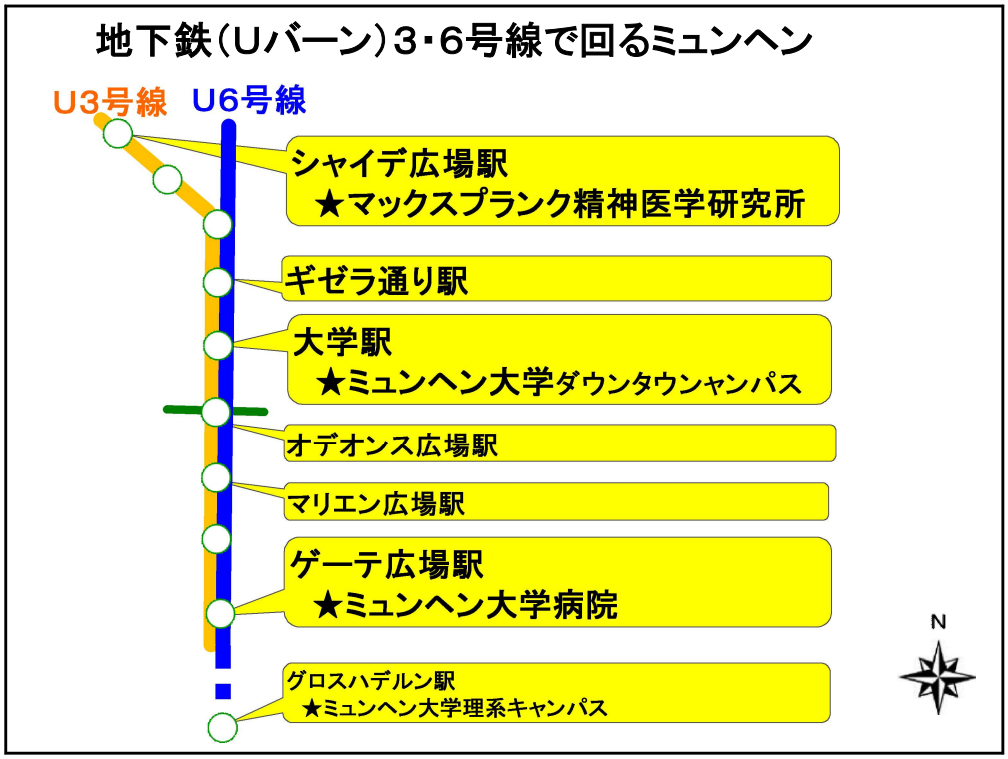
最後に、Ｓバーン２号線に沿って、ダッハウ強制収容所跡を歩く。

＜目次＞

１章	Ｕバーン　３・６号線に沿って
	１－１　大学駅
	１－２　ギゼラ通り駅
	１－３　オデオンス広場駅
	１－４　ゲーテ広場駅
	１－５　シャイデ広場駅
	１－６　グロスハデルン病院駅
	１－７　ガーヒング研究センター駅
２章	Ｕバーン　１・２号線に沿って
	２－１　テレジエン通り駅
	２－２　ケーニヒス広場駅
	２－３　中央駅
３章	Ｕバーン　４・５号線に沿って
	３－１　マックス・ウェーバー駅
４章	Ｓバーン　２号線に沿って
	４－１　ダッハウ強制収容所跡

第１章　Ｕバーン　３・６号線に沿って

地下鉄（Ｕバーン）３・６号線で回るミュンヘン



第１章では、Ｕバーン３・６号線で回ろう。
第１に、大学駅で降りて、ミュンヘン大学ダウンタウンャンパスやミュンヘン美術アカデミーを回る。
第２に、ギゼラ通り駅で、ミュンヘン大学心理学科などを見る。
第３に、オデオンス広場駅とマリエン広場駅を見る。
第４に、ゲーテ広場駅で降りて、ミュンヘン大学病院を歩く。
第５に、北へ行き、シャイデ広場駅で降りて、マックスプランク精神医学研究所を回る。
第６に、南へ行き、Ｕバーン６号線グロスハデルン病院駅でミュンヘン大学理系キャンパスを歩く。
最後に、北へ行き、ガーヒング研究センター駅を訪ねる。

１－１．大学駅

ミュンヘン大学　ダウンタウンキャンパス

最初に、地下鉄Ｕバーン３・６号線の大学（Universität）駅でおりてみよう。すぐ目の前にミュンヘン大学がある。

この地図は、ミュンヘン大学のダウンタウンキャンパスを俯瞰したものである。

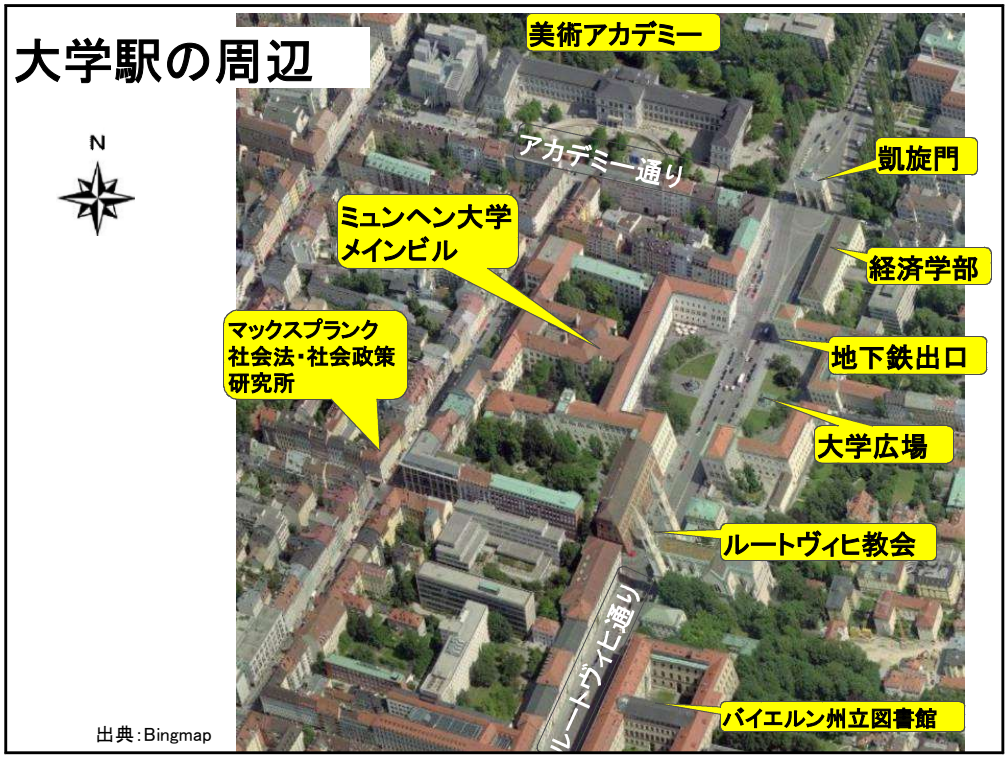
真ん中のルートヴィヒ通りをＵバーンの３・６号線が走っている。ルートヴィヒ通りは前述のように、ルートヴィヒ１世が作った通りである。

真ん中に地下鉄大学駅がある。ここにミュンヘン大学メインビルがある。多くの学部がここにある。

その北に、地下鉄ギゼラ通り駅がある。その前にミュンヘン大学心理学部（正確には心理学・教育学部）がある。ギゼラ通り駅周辺については、１－２で述べる。

メインビルの東側には「英国庭園」があり、その間にミュンヘン大学獣医学部がある。

大学駅の周辺



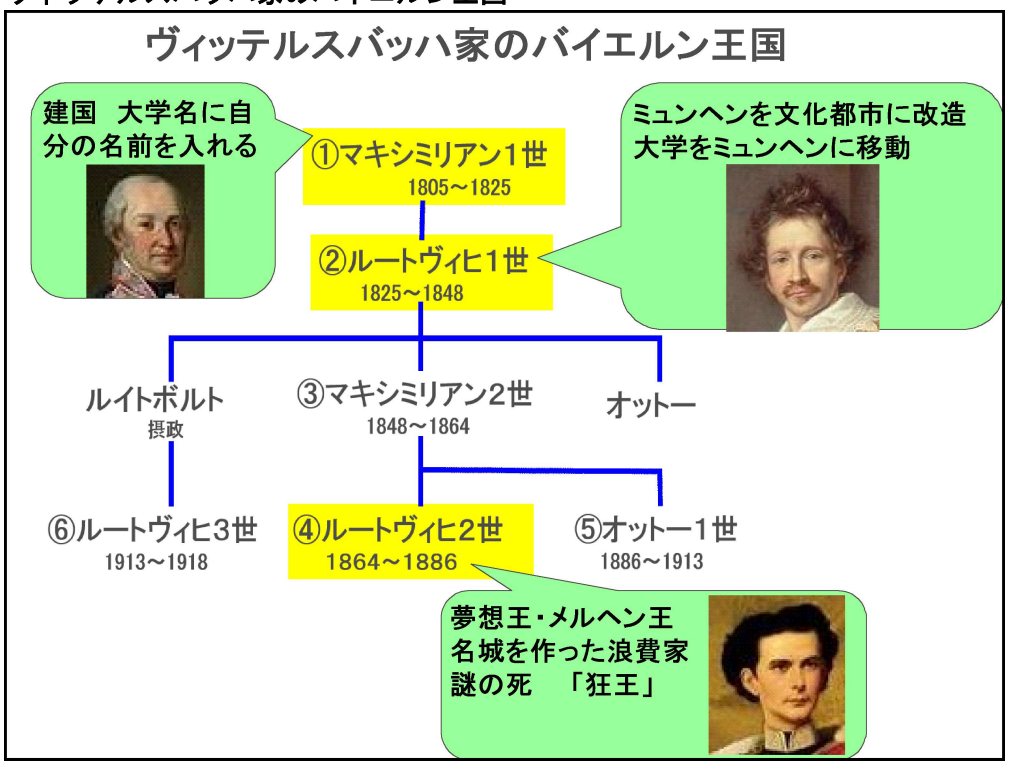
この写真は、大学駅周辺を俯瞰したものである。

地下鉄出口を出ると、前には大学広場が広がっている。広場といっても、真ん中をルートヴィヒ通りが走っていて、車の通りが多いので、広場というイメージからは遠い。道の両側に細い広場があるという感じ。
広場の東側はショル兄妹広場、西側はフーバー教授広場という名前である。ショル兄妹もフーバー教授もナチスの犠牲になった人たちであり、それを忘れないように名前を付けている。これについては後述。
広場を囲むようにして、ミュンヘン大学のビルが並ぶ。西側はミュンヘン大学メインビルである。その西側にマックスプランク社会法・社会政策研究所がある。
東側には、経済学と経営学部の建物がある。
その北には、ルートヴィヒ通りをまたぐようにして、凱旋門が建っている。
その西側にはアカデミー通りがあり、西へ行くと巨大な美術アカデミーの建物がある。
大学広場の南側には、ルートヴィヒ教会があり、２本の尖塔が立っている。その南には、バイエルン州立図書館がある。

ミュンヘン大学の歴史

ミュンヘン大学は、正式名称はルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン（Ludwig-Maximilians-Universität München）という。略してＬＭＵとか、ミュンヘン大学と呼ばれる。
ミュンヘン大学の歴史を知るためには、バイエルン王国の知識があると理解しやすい。

ヴィッテルスバッハ家のバイエルン王国



バイエルン地方は、12 世紀からヴィッテルスバッハ家が支配し、昔から独立国として扱われてきた。

マクシミリアン１世（1805～1825年）

1806 年、ナポレオンの力を借りて、王国として昇格し、マクシミリアン１世が国王となった。その後、ナポレオンが退却し、1814 年にウィーン体制ができても、王国を存続させた。彼は啓蒙専制君主であり、上からの力でバイエルン王国を近代国家として作り変えるために、いろいろな改革をおこなった。次に述べるように、インゴルシュタット大学をランツフートに移動させ、自分の名前を大学名に入れて、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学とした。また、ミュンヘン美術アカデミーを作った。

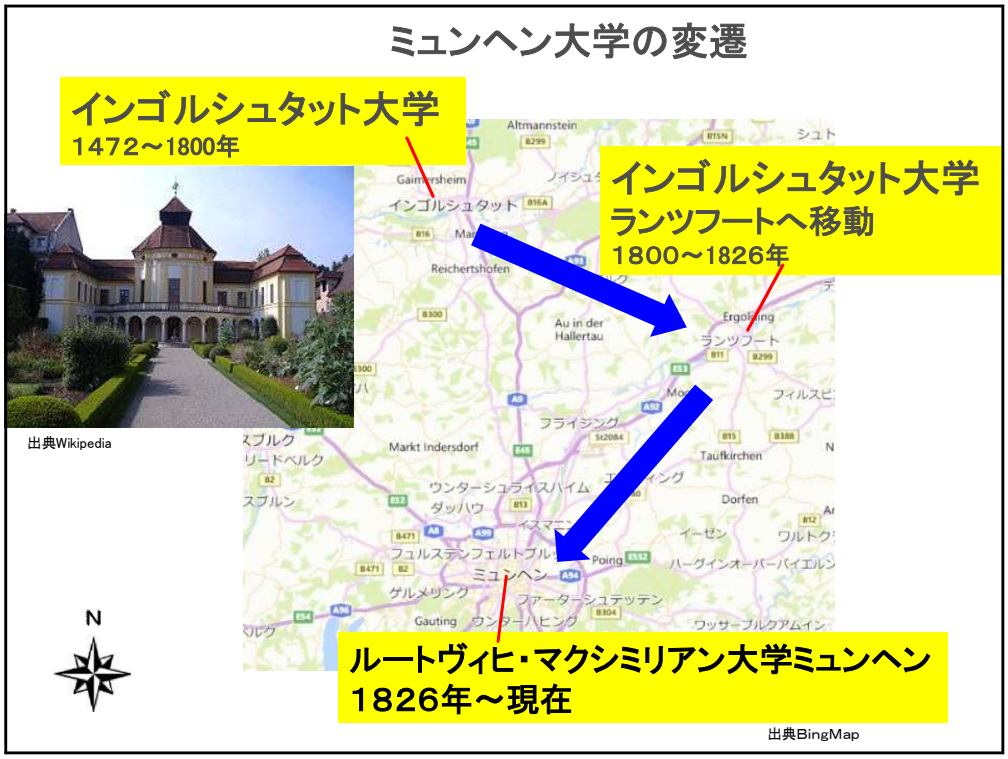
ルードヴィヒ１世（1825～1848年）

1825 年にあとを継いだ息子のルードヴィヒ１世も、啓蒙専制君主として、いろいろな改革をおこなった。ルートヴィヒ１世は、ミュンヘンを「文化都市」「芸術の都」とすべく大改造をおこなった。後述のケーニヒス広場（王の広場）を作り、その周りにギリシャ風神殿を建て、「イーザル川のアテネ」をめざした。彼はギリシャ・ローマの文化に憧れて、それをミュンヘンに持ち込もうとした。アルテピナコテークとノイエピナコテーク（絵画館）を作るなど、芸術政策に力を入れた。ミュンヘンの学問・文化・芸術の基本的なインフラストラクチャーを作ったのはルートヴィヒ１世である。
また、彼はランツフートにあったインゴルシュタット大学をミュンヘンに移動させた。現在のミュンヘン大学の建物はルードヴィヒ１世によって作られた。大学の前のルートヴィヒ通りは、田舎道を彼が整備させたものである。ここに凱旋門を作ったり、ルートヴィヒ教会や州立図書館を建てたのもルートヴィヒ１世で

ある。
　しかし、ルードヴィヒ１世は、1848 年にフランスでおこった３月革命がヨーロッパ中に波及した 1848 年革命の影響で退位した。愛人ローラ・モンテスとのスキャンダルも退位の原因である。

ルードヴィヒ２世（1864～1886年）
　ルードヴィヒ１世を継いだマキシミリアン２世も、科学を奨励し、バイエルン州立博物館を作った。
　その跡を継いだルードヴィヒ２世は、ルードヴィヒ１世の孫にあたる。18 歳で国王となったが、政治には興味がなく、趣味に生きた。彼はワーグナーの音楽に傾倒したり、ノイシュバンシュタイン城やヘレンキームゼー城など、ミュンヘンのまわりにたくさんの名城を作った。そのため夢想王とかメルヘン王と呼ばれる。しかし、城を作って莫大な浪費をしたために、国家財政が傾いた。このため侍医団によって精神病であると診断され、国王を退位させられた。このためルードヴィヒ２世は、狂王とも呼ばれる。
　退位の直後、ルードヴィヒ１世は、侍医の精神科医グッデンとともに、湖で水死体で見つかった。事故死とされているが、死の経緯は不明である。これによりルードヴィヒ１世をモデルにした多くの小説（森鴎外『うたかたの記』、久生十蘭『泡沫の記』など）や、映画（ルキノ・ヴィスコンティ『ルートヴィヒ／神々の黄昏』など）があらわれた。
　その後、バイエルン王国は、1871 年のビスマルクのドイツ統一後も、ドイツ帝国の中の一王国として生き延びた。しかし、第一次大戦でドイツが敗北し、ドイツ帝国が解体したために、バイエルン王国も終わった。その後、ドイツは共和制のワイマール共和国となり、バイエルンはその中のひとつの州となった。

ミュンヘン大学の変遷



　この大学は、過去に２回引っ越している。

インゴルシュタット時代
　この大学は、1472 年に、インゴルシュタット Ingolstadt の地に創設された。創設したのは、バイエルン公のルートヴィヒ 9 世 Duke Ludwig IX である。
　ちなみに、メアリ・シェリーが 1818 年に発表した名作『フランケンシュタイン』の主人公フランケンシュタインは、インゴルシュタット大学の学生である。スイス生まれのヴィクトール・フランケンシュタインは、インゴルシュタット大学の化学の教授ヴァルトマンのもとで学び、インゴルシュタットの地で人造人間を作り出す。その人造人間は、容貌こそ怪異だが、強靭な肉体と、人間と同じ知性を持ち、雄弁である。人造人間によってフランケンシュタインは破滅させられる。よくできたゴシックロマンで、長い間読まれ映画にもなったのもうなづける。自らが創造した人造人間によって破滅させられるフランケンシュタインの物語は、「科学」そのものの寓話としても読める。この小説の原題は『フランケンシュタイン：あるいは現代のプロメテウス』なのである。あるいは、「無意識」の怪物によって「意識」が破滅させられる精神分析学的な寓話という読み方もできる。資本家と労働者という経済学的な寓話とも読める。この小説は、読者の関心のある構造を自由に投影できる柔構造を持っている。
　フランケンシュタインは、後の映画に出てくるような博士でも教授でも科学の専門家でもなく、一介の学生にすぎない。また、人造人間は、映画に出てくる知性のない怪物ではなく、人間と同じ繊細な心を持つ。しかも、いつのまにかフランケンシュタインは、創造した人の名前ではなく、創造された人造人間の名前になってしまっている（行き着いたユルキャラが『怪物くん』のフランケン）。

シェリー夫人がこの作品を発表した 1818 年には、インゴルシュタット大学はランツラートへと移転してしまい、すでにインゴルシュタット大学という名前ではなくなっていた。このことを彼女は知っていたのだろうか。

ランツラート時代

インゴルシュタット大学は、1800 年、バイエルン国王マキシミリアン１世によって、ランツラート Landshut に移転した。移転の理由は、インゴルシュタットの街がフランス軍に侵略されそうになったからである。

1802 年には、以上の二人の国王の名前をとって、この大学をルートヴィヒ・マクシミリアン大学と正式に呼ぶことが決まった。この名前が現在まで続いている。

ミュンヘン移転

1825 年に、バイエルン国王としてルートヴィヒ１世が即位し、彼は 1826 年に、インゴルシュタット大学をミュンヘンに移動させた。このため、大学名にある「ルートヴィヒ」とは、このルートヴィヒ１世のことだと誤解されがちであるが、そうではなく、前述のように、1472 年に創設したルートヴィヒ９世のことをさす。

大学の建物が今の地に作られ、大学の前のルートヴィヒ通りは、それまで田舎道だったものを彼が整備したものである。ここに凱旋門を作ったり、ルートヴィヒ教会や州立図書館を作った。

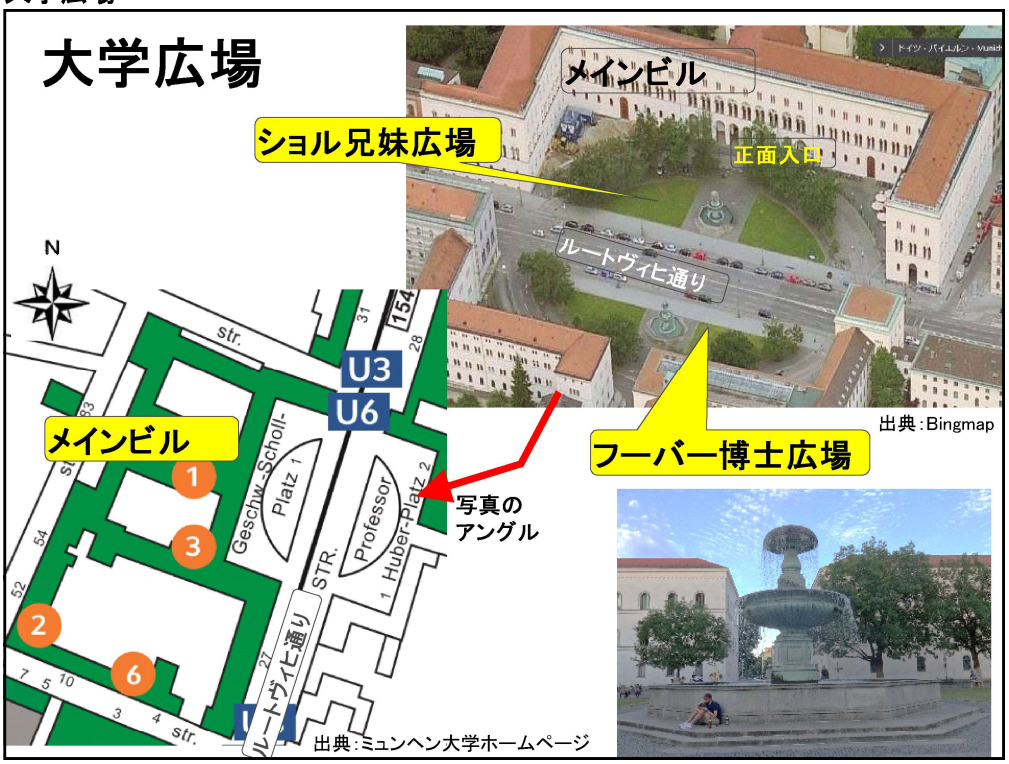
現代のミュンヘン大学

現在は１８の学部をもち、学生数約５万人の大きな大学である。

この大学で教員をした人には、物理学者のマックス・プランク、レントゲン、ハイゼンベルク、オットー・ハーン、社会学者のマックス・ウェーバーなどがいる。森鴎外など日本人留学生も多い。

この大学に関係したノーベル賞受賞者は 36 人に上る。

大学広場



ルートヴィヒ通りをはさんで、両側は広場になっている。西側は「ショル兄妹広場」（Geschwister-Scholl-Platz）、東側は「フーバー教授広場」（Professor-Huber-Platz）である。

ショル兄妹とは、ナチスに反対する白バラ抵抗運動（後述）をおこなって、ナチスに処刑されたミュンヘン大学の学生である。また、フーバー教授は、この白バラ抵抗運動を助けて、ナチスに処刑されたミュンヘン大学の教授である。戦後、ナチスに対する反省をこめて、３人の名前が広場につけられている。

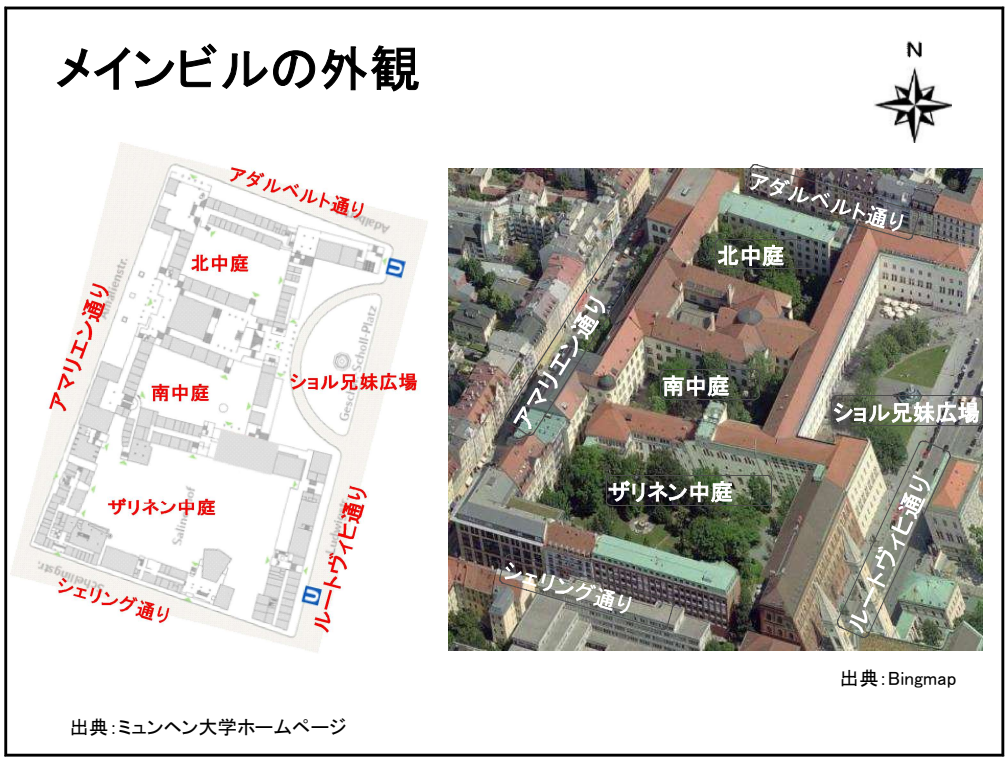
２つの広場には噴水がある（写真右下）。芝生がはえていて、学生が座っている。しかし、自動車の往来が激しいので、あまり居心地はよくない。

広場の北側が大学のメインビルであり、正面入口がある。メインビルは、３階建てだが、巨大な建物である。

フーバー博士広場の北東の側の建物が法学部・経済学部の建物である。

メインビルの外観

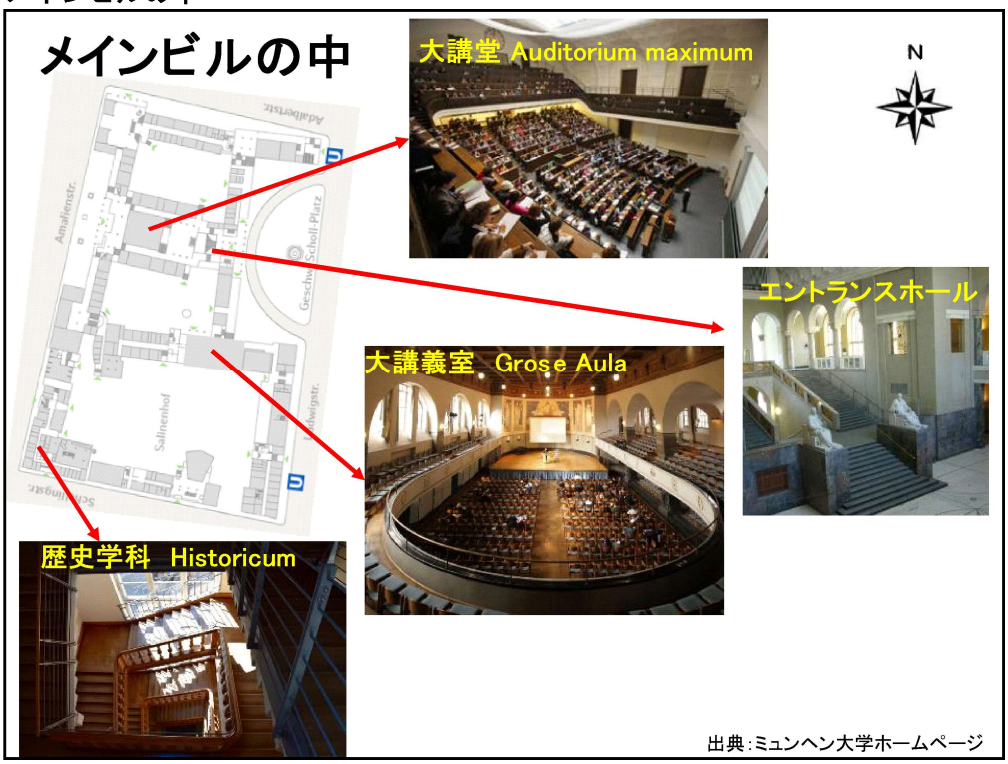
メインビルは、４つの通りに囲まれている。東はルートヴィヒ通り、北はアダルベルト通り、西はアマリ



エン通り、南はシェリング通りである。

メインビルは、いくつかの棟が複雑に組み合わされた複合ビルである。３つの中庭がある。北中庭、南中庭、ザリネン中庭である。ザリネン中庭は公園のようになっていて、自由に入れる。

メインビルの中

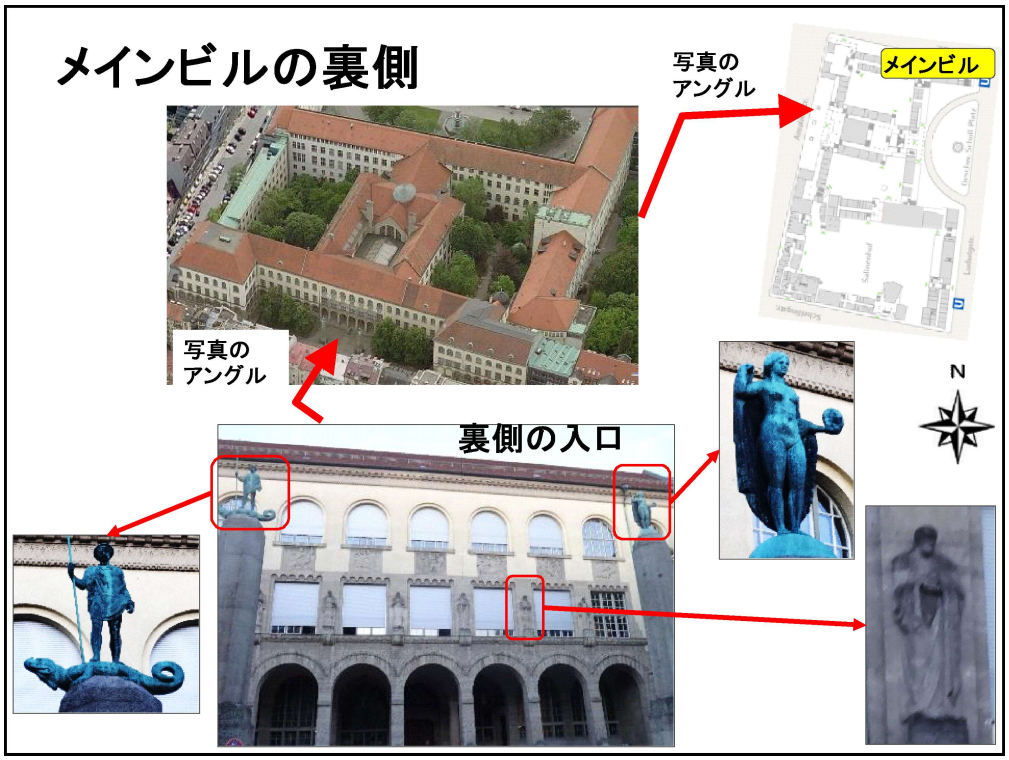


メインビルの内部には自由に入れる。

東側のエントランスホールを入ると、白バラ抵抗運動記念館がある（後述）。その奥に、大講堂 Auditorium Maximum がある。他にも、大講義室 Grose Aula や、図書館がある。

メインビルの西南の隅は歴史学科 Historicum がある。

メインビルの裏側

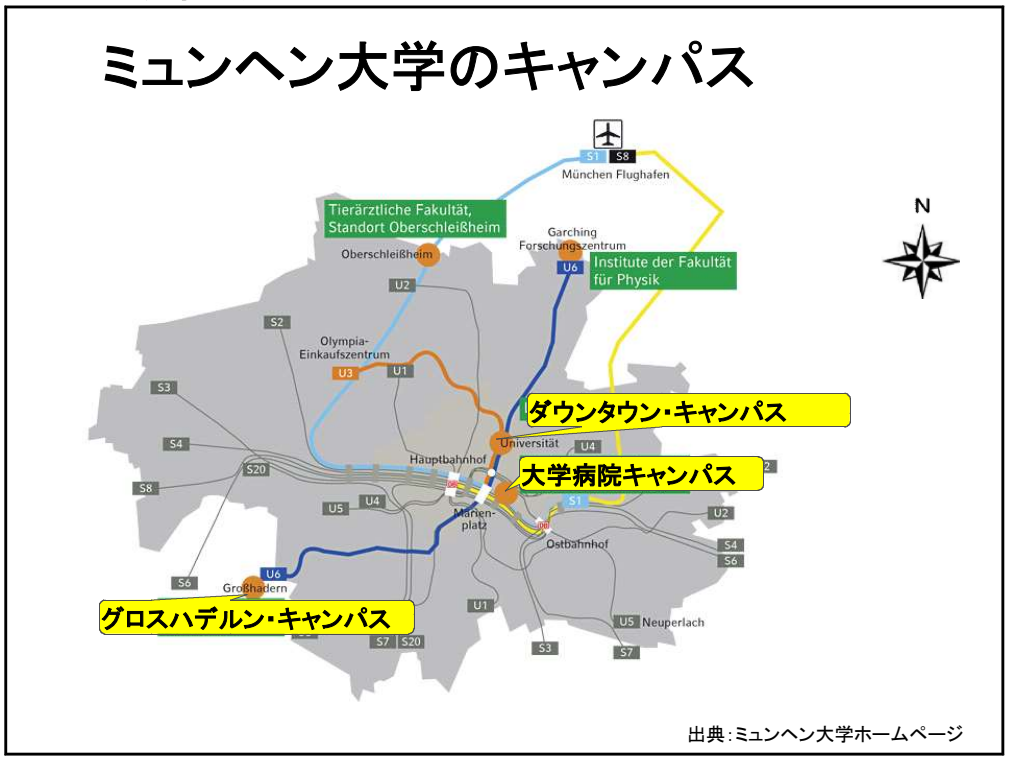


メインビルの裏側はアメリエン通りに面している。メインビルの裏側を見てみるのは面白い。表側の優美な姿とは逆に、武骨な石が使われていて驚く。

正面は６つのアーチ型の門がある。その上に、６体の像が飾られている。

前には、高い塔が２本あって、その上にも像が立つ。左はワニを退治する英雄で、右はミネルヴァである。

ミュンヘン大学のキャンパス



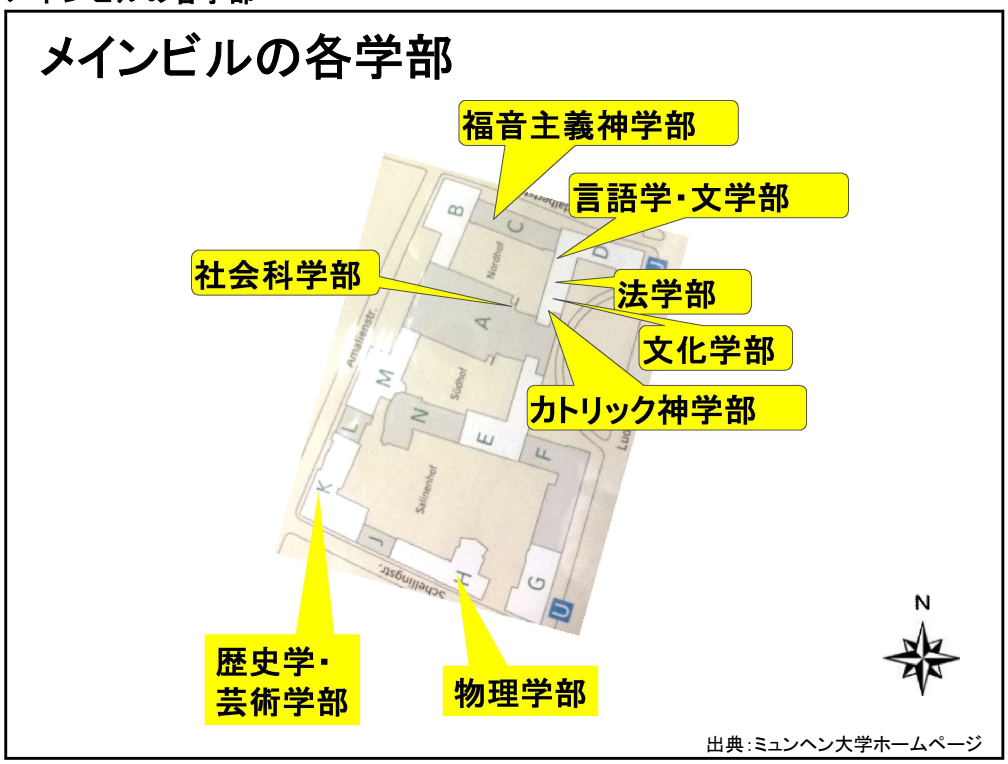
ミュンヘン大学には、１８の学部がある。そのリストを以下に示す。工学部がないのは、ミュンヘン工科大学があるからである。

１８の学部のうち、半分の９学部は、このメインキャンパスにある。他の６学部は、ダウンタウンキャンパス内にある。

残りの３学部はダウンタウンキャンパスの外にある。医学部は大学病院キャンパス、化学・薬学部と生物学部はグロスハデルンキャンパスにある。地図に示すように、これらは市内に分散している。

本論ではこれらのすべてに触れる。

メインビルの各学部



メインビルは、いろいろな学部が入っている。

●メインビルにある学部

学部	部屋
カトリック神学部（Katholisch-Theologische Fakultät）	D 101
福音主義神学部（Evangelisch-Theologische Fakultät）	C 019
法学部（Juristische Fakultät）	D 109
哲学・科学哲学・宗教学部 （Fakultät für Philosophie, Wissenschaftstheorie und Religionswissenschaft）	
文化学部（Fakultät für Kulturwissenschaften）	D107
言語学・文学部（Fakultät für Sprach- und Literaturwissenschaften）	D 117
社会科学部（Sozialwissenschaftliche Fakultät）	A 114
歴史学・芸術学部（Fakultät für Geschichts- und Kunstwissenschaften）	Amalienstrasse 52, 007
物理学部（Fakultät für Physik）	Schellingstraße 4 /IV, 13

ドイツや東欧の大学では、神学部が複数あることは珍しくない。ミュンヘン大学でも、福音主義神学部とカトリック神学部の２つがある。

●ダウンタウンキャンパス内にある学部

学部	住所	取りあげる章
経済学部（Volkswirtschaftlichen Fakultät）	Schackstraße 4	１－１
経営学部（Fakultät für Betriebswirtschaft）	Ludwigstrasse 28	１－１
心理学・教育学部（Fakultät für Psychologie und Pädagogik）	Leopoldstrasse 13	１－２
獣医学部（Tierärztliche Fakultät）	Veterinärstrasse 13	１－１
数学・情報学・統計学部 （Fakultät für Mathematik, Informatik und Statistik）	Theresienstrasse 39	２－２
地球科学部（Fakultät für Geowissenschaften）	Luisenstraße 37	２－２

●ダウンタウンキャンパス以外にある学部

学部	住所	取りあげる章
医学部（Medizinische Fakultät）	大学病院キャンパス	１－４
化学・薬学部（Fakultät für Chemie und Pharmazie）	グロスハデルンキャンパス	１－６

さらに、物理学部の物理学研究所は、北のガーヒング研究センターにある（１－７参照）。

白バラ抵抗運動

メインビルの周辺には、白バラ抵抗運動にまつわる場所が多い。

前述のように、ミュンヘン大学の学生だったゾフィー・ショル（21 歳）と兄のハンス・ショル（24 歳）は、ナチスに反対する白バラ抵抗運動をおこなった。しかし、1943 年 2 月 18 日にビラをまいて、逮捕され、斬首刑となった。

また、ミュンヘン大学の音楽・心理学の教授だったクルト・フーバー博士（49 歳）は、この白バラ抵抗運動を助けて、逮捕されて、処刑された。

ナチスに対する反省をこめて、３人の名前が大学前の広場につけられた。ショル兄妹広場とフーバー博士広場である。

白バラ抵抗運動については、これまでたくさんの本が出され、何回か映画化されている。

参考文献：山下公子 『ミュンヒェンの白いバラ ：ヒトラーに抗した若者たち』 筑摩書房、1988 年

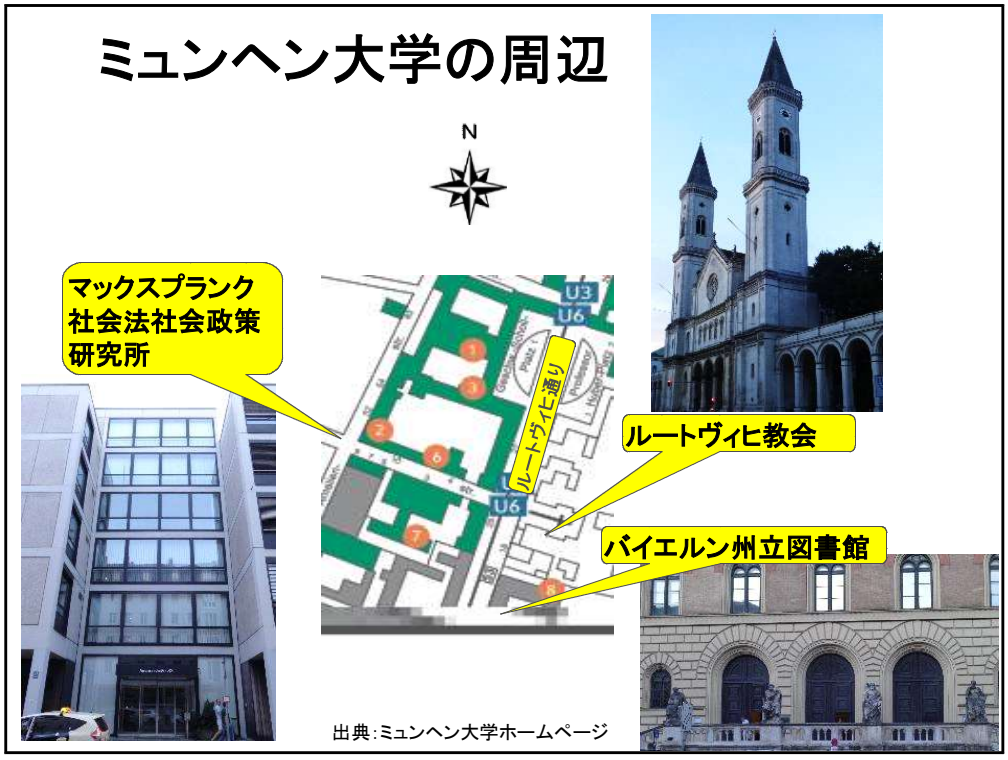
インゲ・ショル 『白バラは散らず ：ドイツの良心ショル兄妹』 内垣啓一訳、未來社、1964 年

白バラ記念館

メインビルの正面玄関を入って右側に進むと、au160 の部屋に、白バラ抵抗運動記念館（denkstaette weisse

rose）がある。入場無料。
　ショル兄妹が最後のビラを撒き、逮捕された場所（噴水と玄関の間）にはビラの形をした記念碑が埋められている（左下の写真）。
　右の写真は、ショル兄妹がビラをまいて逮捕されたメインビルのアトリウムである。

ミュンヘン大学の周辺



ルートヴィヒ教会
　通りをはさんでメインビルの東向かいに２本の尖塔が立っている。これはルードヴィヒ教会である。1844年、ルートヴィヒ１世が建てたもので、ゲルトナーの設計である。内部はロマネスク様式でフレスコ画で覆われている。

バイエルン州立図書館
　ルードヴィヒ教会の南側には、バイエルン州立図書館がある。こちらもルートヴィヒ１世がゲルトナーの設計で建てた図書館である。
　正面には４体の像がある。ツキディデス、ホメロス、アリストテレス、ヒポクラテスの像という。

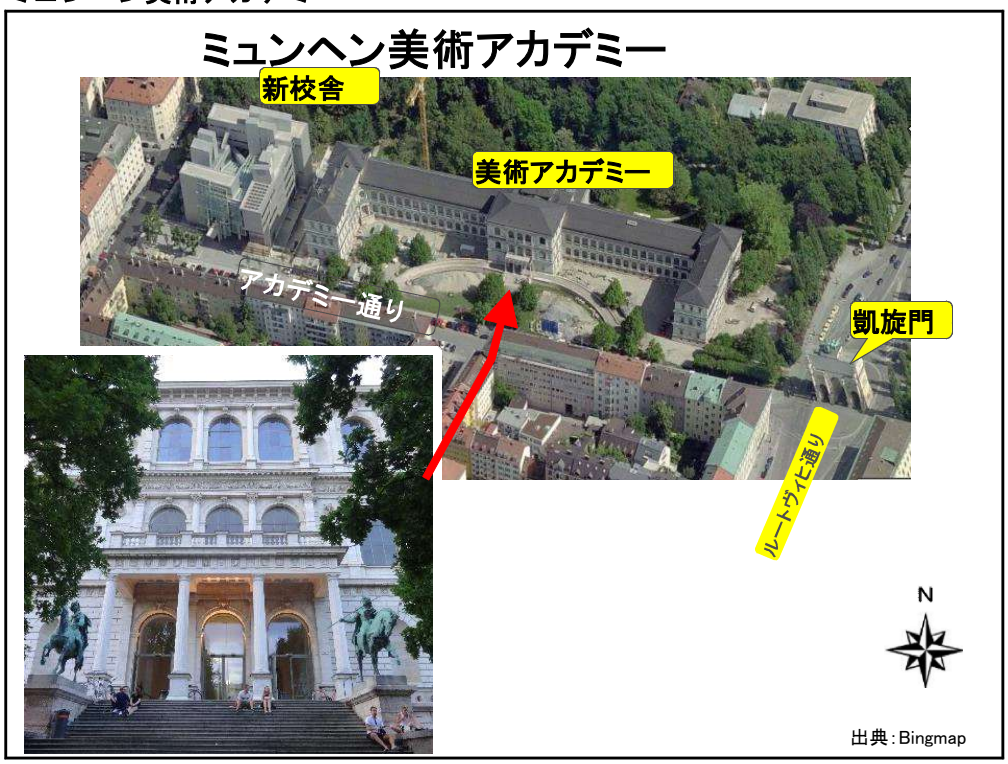
マックスプランク社会法社会政策研究所
　メインビルの西側のアマリエン通り 33 のビルには、マックスプランク社会法社会政策研究所がある。
　下の表に示すように、ミュンヘンにはマックスプランク研究所が６つあり、近郊にも４つある。そのうち９つを今回紹介する。
　マックスプランク研究所の歴史や詳細については、精神医学研究所（１－５参照）のところで詳しく述べる。

●ミュンヘンと近郊にある１０のマックスプランク研究所

研究所名　　ウェブページ	Ｕバーン駅	住所	取り上げる章
社会法・社会政策研究所 Max Planck Institute for Social Law and Social Policy Webpage: www.mpisoc.mpg.de	Ｕバーン３・６ 大学駅	Amalienstr. 33	１－１
税法・国家財政研究所 Max Planck Institute for Tax Law and Public Finance Webpage: www.tax.mpg.de	Ｕバーン３・６ オデオン広場駅	Marstallplatz 1	１－３
技術革新・競争研究所 Max Planck Institute for Innovation and Competition Webpage: www.ip.mpg.de	Ｕバーン３・６ オデオン広場駅	Marstallplatz 1	１－３
精神医学研究所	Ｕバーン３	Kraepelinstr. 2 - 10	１－５

Max Planck Institute of Psychiatry Webpage:www.psych.mpg.de/	シャイド広場駅		
生化学研究所 Max Planck Institute of Biochemistry Webpage:www.biochem.mpg.de	Ｕバーン６ グロスハデルン駅	Am Klopferspitz 18 Martinsried	１－６
物理学研究所 Max Planck Institute for Physics Webpage: www.mpp.mpg.de	Ｕバーン６号線 Studentenstadt 駅	Föhringer Ring 6	
プラズマ物理学(IPP)、地球外物理学(MPE)、 宇宙物理学(MPA)、量子工学(MPQ)	Ｕバーン６号線 ガーヒング研究センター駅	ガーヒング市	１－７

ミュンヘン美術アカデミー



ミュンヘン大学の北側に、アカデミー通りがある。凱旋門から西に延びる道である。

この凱旋門は、1814 年のバイエルン解放戦争での勝利を記念して、ルードヴィヒ 1 世が作らせたもので、1852 年に完成した。門の上には、バヴァリア女神像が立っていて、ライオンが引く車に乗っている。この像は、後述のように、森鴎外の『うたかたの記』の冒頭に紹介されている。

アカデミー通りを西に歩くと、ミュンヘン美術アカデミー（Akademie der Bildenden Künste München）の壮大な建物が見えてくる。ミュンヘン美術院と訳されることもある。

設立されたのは、1770 年頃に絵画学校として作られた。1808 年にバイエルン国王のマクシミリアン 1 世によって、王立美術アカデミーへと格上げされた。マクシミリアン 1 世は、ミュンヘン大学でも中興の祖であった。1850 年～ 1918 年までカウルバッハとピロティが校長をつとめ、ミュンヘン派という画風を作り出し、ヨーロッパ中に知られた。1946 年に芸術工芸学校と絵画学校がアカデミーに統合された。美術大学でもあり、多くの学生が学んでいる。

アカデミーの建物は、1886 年に完成したルネサンス・リバイバル様式の建物である。前に騎馬像が立っていて印象的である。西側には 2005 年に建てられた新しいビルがある。

森鴎外の『うたかたの記』の舞台

このミュンヘン美術アカデミーは、森鴎外の『うたかたの記』（1890 年、明治 23 年発表）の舞台として有名である。

その冒頭は次のようである。

幾頭の獅子の挽ける車の上に、勢よく突立ちたる、女神バワリアの像は、先王ルウドヰヒ第一世がこの凱旋門に据ゑさせしなりといふ。その下よりルウドヰヒ町を左に折れたる処に、トリエント産の大理石にて築きおこしたるおほいへあり。これバワリアの首府に名高き見ものなる美術学校なり。校長ピロッチイが名は、をちこちに鳴りひびきて、独逸の国々はいふもさらなり、新希臘、伊太利、デンマークなどよりも、ここに来りつどへる彫工、画工数を知らず。日課を畢へて後は、学校の向ひなる、「カッフェエ・ミネルワ」といふ店に入りて、珈琲のみ、酒くみかはしなどして、おもひおもひの戯す。こよひも瓦斯燈の光、半ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさざめく声聞ゆるをり、かどにきかかりたる二人あり。

出典：森鴎外　うたかたの記 - 青空文庫　　http://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/694_23250.html

この文章は古語なので難しいが、現代語訳しているサイトを見つけたので、引用する。

ライオンが引く車の上で、勢いよく立つバヴァリア女神像は、ルードウィヒ一世がこの凱旋門に建てたもので、 ここから下ってルードウィヒの町を左に折れたところにトリエント産の大理石で築かれた荘厳な建物がある。ここはバイエルンにある有名な美術学校である。

校長のピロッティの名は諸外国にも鳴り響き、ドイツだけではなく、 ギリシャ、イタリア、デンマークなどからも彫刻家や画家をめざす学生が大勢集まっていた。

学生たちは授業が終わると学校の向かいにある「カフェ・ミネルバ」という店で、 コーヒーや酒を飲み交わしながらくつろいでいる。
今夜もガス灯のあかりが半分開いた窓に映り、そこから外にこぼれた笑い声が一段と大きくなったころ、店のかどまで来た二人づれがいた。
出典：鴎外作品(現代語訳) 『うたかたの記』 http://www15.plala.or.jp/joe2622cool/utakata_jo.htm

ここに出てくる「バイエルンにある有名な美術学校」こそがミュンヘン美術アカデミーである。
「ルードウィヒ一世がこの凱旋門に建てた」「バヴァリア女神像」については、前述のとおりである。
「学校の向かいにある「カフェ・ミネルバ」という店」は、実在した（後述）。
最後に出てくる「２人づれ」とは、エキステルというドイツ人画学生と、巨勢という日本人画学生である。
『うたかたの記』は、巨勢と恋人マリーの悲劇であるが、ここに国王ルードヴィヒ２世が登場して、物語は、ルードヴィヒ２世の非業の死の謎を解く歴史ミステリーとして進んでいく。
基本は、狂王ルートヴィヒ２世 （1845 ～ 1886 年）が、1886 年に水死した謎を解くという歴史ミステリーである。ルートヴィヒ２世は、恋をした女の娘を見て、近づこうとして水死したのだという謎解きである。
しかし、娘が日本人と知り合って、湖に行き、そこでたまたまルートヴィヒ２世と出会って事件がおこり、王も娘も死んでしまうというストーリーである。国も民族も時空も超えた荒唐無稽のファンタジーである。こんなぶっとんだ話を鴎外が書いていたのはびっくり。
この巨勢のモデルとなったのが、画家の原田直次郎である。

原田直次郎の波乱の生涯

この原田直次郎という人は波乱の人生を送った人であった。
原田直次郎（1863 ～ 1899 年）は、大阪開成学校、東京外国語学校でフランス語を学んだ。小さい頃から絵も学び、1884 年、21 歳で絵の勉強のために留学することにした。
留学先としてイタリアでもフランスでもなく、ドイツのミュンヘンを選んだのは、ドイツに留学した兄の豊吉の影響である。
原田豊吉（1861 ～ 1894 年）はドイツで地質学を学び、ミュンヘン大学で古生物学を学んだ。彼はベルリン大学から博士号を取得し、東京帝国大学理科大学の地質学教授となった。日本人初の地質学教授で、ナウマンとの間に原田・ナウマン論争をおこしたことでも知られるが、33 歳で病死した。豊吉は、弟直次郎の留学先として、ミュンヘンを勧め、豊吉の友人だったミュンヘン芸術アカデミー教授だったガブリエル･マックスに弟の指導を頼んだ。豊吉がいた当時のミュンヘンは、後述のように、画家が 5000 人もいた芸術の都であり、ミュンヘン派の最盛期であった。その中心のミュンヘン芸術アカデミーの教授に弟を託したことは、まことに賢明な判断だったといえる。ところが、直次郎のミュンヘン生活をみると、兄の期待に応えたどうかは疑問である。
原田は、ミュンヘンでは、ミュンヘン美術アカデミーの聴講生となり、教授のマックスに師事し、ミュンヘン派のアカデミー流の写実を身につけた。
原田は、アカデミーで同期の画学生ユリウス･エクステルと交友を結ぶ。このエクルテルによって、象徴

主義や世紀末趣味にも影響を受けた。エクルテルは、その後 1892 年のミュンヘン分離派にも加わる前衛画家であった。
（なお、エクステルは「ある日本人の肖像」と題して、原田の等身大の肖像画を描いた。この絵は、キーム湖の美術館にあり、それを発見したのは、ハイデルベルク大学教授のシャモニであり、その経過が YouTube で公開されている。）

原田とマリイ

1886 年夏、原田は、下宿先の 1 階にあるカフェ・ミネルヴァで働く女給のマリイと恋仲になった。ふたりは写生旅行に出かけた。のちにマリイは子も宿してしまう。ところが、原田は、1881 年に結婚しており、日本には妻も子もいた。

この頃、原田は、ミュンヘンに留学していた森鴎外と知り合った。鴎外は、原田の話を聞いて、『うたかたの記』を構想した。『うたかたの記』に出てくるヒロインのマリーのモデルは、原田の愛人のマリイだという。

1886 年には、原田は、妊婦のマリイを残して帰国してしまう。マリイも原田を見送った。

帰国後の原田

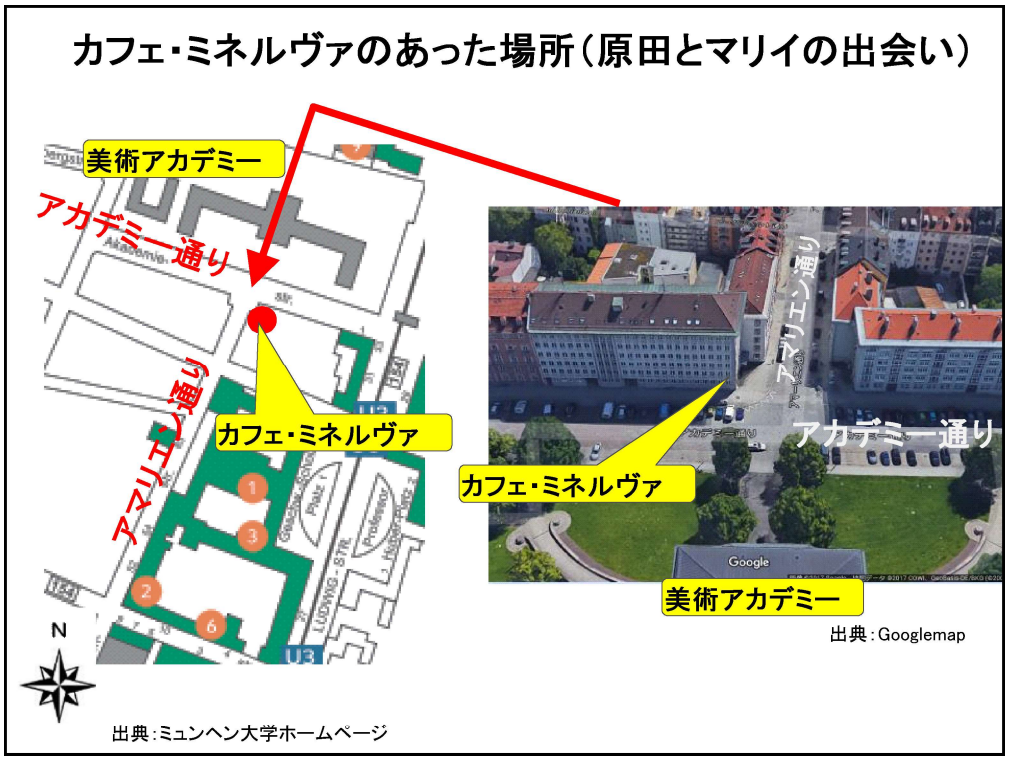
原田が帰国すると、日本は洋画排斥の嵐が吹いていた。岡倉天心とフェノロサは東京美術学校を作ったが、洋画科を置かないものであった。原田はフェノロサを批判した。その後、天心とフェノロサの支持母体で国粋主義的な龍池会に入会し、東京美術学校に洋画科を開設するよう運動した。

しかし、原田は病気となり、身体が不自由となった。そのうちに、洋画の画壇は黒田清輝らの外光派が注目をあびるようになり、原田の暗い画風は取り残されてしまった。そうした失意の中、1899 年に原田は 36 歳で亡くなった。

原田直次郎と関係した人　ピロティ・マックス・エクステル

原田直次郎がミュンヘン美術アカデミーに留学したとき、校長をつとめていたのがピロティである。
また、原田を指導したのは、アカデミー教授のマックスだった。
さらに、エクステルは原田の学生仲間であった。

カフェ・ミネルヴァのあった場所

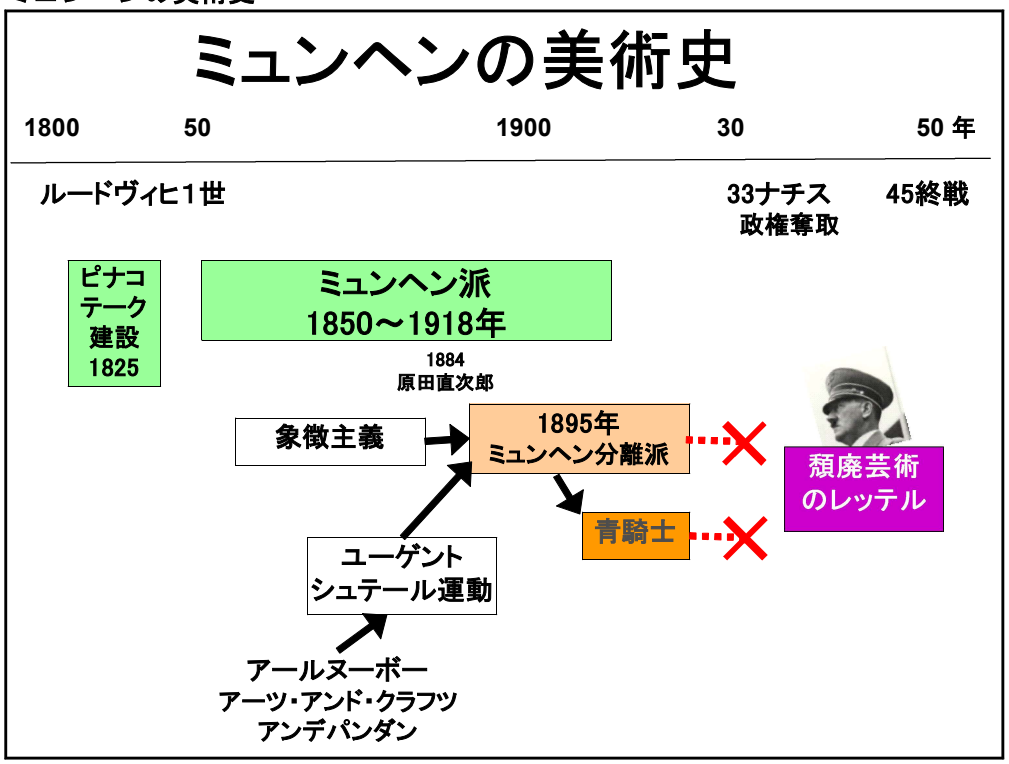


『うたかたの記』に出てくる「カフェ・ミネルヴァ」は、アカデミー通りとアマリエン通りの東側の角にあった。今から 130 年前のことであるが、今でもその場所はわかる。

右側の写真は、アカデミーから南のアマリエン通りを見たものである。左側の角にミネルヴァがあった。現在は別の建物が建っている。

このカフェの２階に原田が下宿していた。原田は、妻子あるにもかかわらず、このカフェに勤めていたマリイに手をつけたのである。

ミュンヘンの美術史



原田直次郎や鴎外『うたかたの記』とを理解するためには、当時のミュンヘンの美術史を知っておく必要がある。ミュンヘンは 19 ～ 20 世紀初頭はヨーロッパの美術の中心であった。

この年表に示されるように、ミュンヘン派、象徴主義、ミュンヘン分離派、「青騎士」などが有名である。しかし、1930 年代になると、ミュンヘン分離派や「青騎士」の動きは、ヒトラーによって「頽廃芸術」と

レッテルを貼られて弾圧を受けた。戦後になっても、以前のような美術界の活気は戻らなかった。

アルテ・ピナコテークとノイエ・ピナコテークの建設

ミュンヘンの美術館といえば、アルテ・ピナコテークとノイエ・ピナコテークであるが、これは 1825 年に王位についたヴィルヘルム１世が建てたものである。

ミュンヘン派（Münchner Schule）

ミュンヘンの絵画の中心はミュンヘン美術アカデミーである。その学長として、カウルバッハとピロティが有名である。この２人が学長をつとめた 1850 ～ 1918 年の約 70 年間は、「ミュンヘン派（Münchner Schule）」と呼ばれて、一世を風靡した。その特徴はリアリズム絵画である。当時の美術は、イタリアのローマが中心であり、1890 年頃からは印象派のパリが中心となったが、その間、ミュンヘンはヨーロッパ美術の中心であった。

当時の日本人の画家が留学する場合は、ほとんどローマかパリだったので、日本人にはミュンヘン派はあまりなじみがない。当時のミュンヘンに留学した原田直次郎は数少ない日本人のひとりである。原田がミュンヘンに留学した 1884 ～ 1886 年はミュンヘン派の最盛期であった。

当時のミュンヘンには、5000 人の画家が集まっていたという。

ミュンヘン分離派

パリでは 1860 年代から印象派がおこり、次いでポスト印象派や象徴主義（モロー）など、リアリズムを否定する多くの絵画があらわれた。ミュンヘンでは、印象派よりも象徴主義の影響が強かった。スイス生まれで象徴主義の代表者ベックリンはしばらくミュンヘンに滞在したが、そのときにフランツ・フォン・シュトゥックに大きな影響を与えた。

そして、シュトゥックは 1892 年に「ミュンヘン分離派」の運動をおこした。「分離派」とは、保守化して閉鎖的になった芸術家組合から「分離」して、自由な発表の場を持つという運動である。「分離派」といえば、1897 年のクリムトらの「ウィーン分離派」が有名だし、1899 年には「ベルリン分離派」も作られた。このように分離派の運動は、ドイツ語圏でだいたい同時期におこったのであるが、時期的にはミュンヘン分離派が最も早かった。

分離派とは、ヨーロッパでいっせいにおこった「アンデパンダン」や「アールヌーボー」といった運動のひとつの現れである。イギリスのモリスやラスキンによる「アーツ・アンド・クラフツ運動」に始まり、フランスやベルギーでは「アールヌーボー」と呼ばれ、スペインではガウディの建築などの「モデルニスモ」と呼ばれた。ドイツでは「ユーゲントシュテール」運動と呼ばれ、これが分離派の原点となった。「ユーゲントシュテール」とは、当時の雑誌の名前で、直訳すると「青春の様式」である。

分離派の先頭に立ったのはシュトゥックである。彼は 1895 年にはミュンヘン美術アカデミーの教授となった。そこでカンディンスキーやマルク、マッケを育てて、彼らが「青騎士」グループを結成する。

ミュンヘン分離派として知られているのは、リーバーマン、ヴァイス、ゲルバンなどがいる。

前述の『うたかたの記』に実名で登場するエクステルも、分離派のひとりである。原田直次郎は、ミュンヘン派アカデミズムでリアリズムを学びながら、一方で、エクステルの反アカデミズム（後の分離派）にも共鳴していたようだ。

青騎士グループ

ミュンヘン美術アカデミーの教授だったシュトゥックのもとに集まったカンディンスキーやマルク、マッケが結成した抽象絵画のグループである。のちに、クレーやミュンターらが加わった。青騎士グループや、ドレスデンのブリュッケグループは、「表現主義」と括られることがある。

カンディンスキーは「抽象絵画の父」などと呼ばれて、絵画史を書き換えるような革新的な絵画を作った。抽象絵画の理論的先駆だった青騎士がミュンヘンで生まれたことは画期的であった。しかし、第一次世界大戦で、マルクとマッケが戦死し、カンディンスキーはロシアに帰ってしまい、青騎士の運動は消滅した。

ナチスによる弾圧：「頽廃芸術」というレッテル

1933 年に、ヒトラーが政権を取ると、分離派や「青騎士」など表現主義は弾圧されてしまう。ヒトラーは「頽廃芸術」とレッテルを貼って弾圧した。ナチスはリアリズム絵画こそが「大ドイツ絵画」としてふさわしく、それ以外のものは「頽廃芸術」であるとした。弾圧の理由は、ひとつは彼らがユダヤ人であることが多かったからであるが、もうひとつ、ヒトラーも実はミュンヘンで画家をめざしたひとりであり、「青騎士」グループのおかげで日の目を見られなかったという個人的恨みがあったという。

戦後になって、ミュンヘン分離派は復活した。

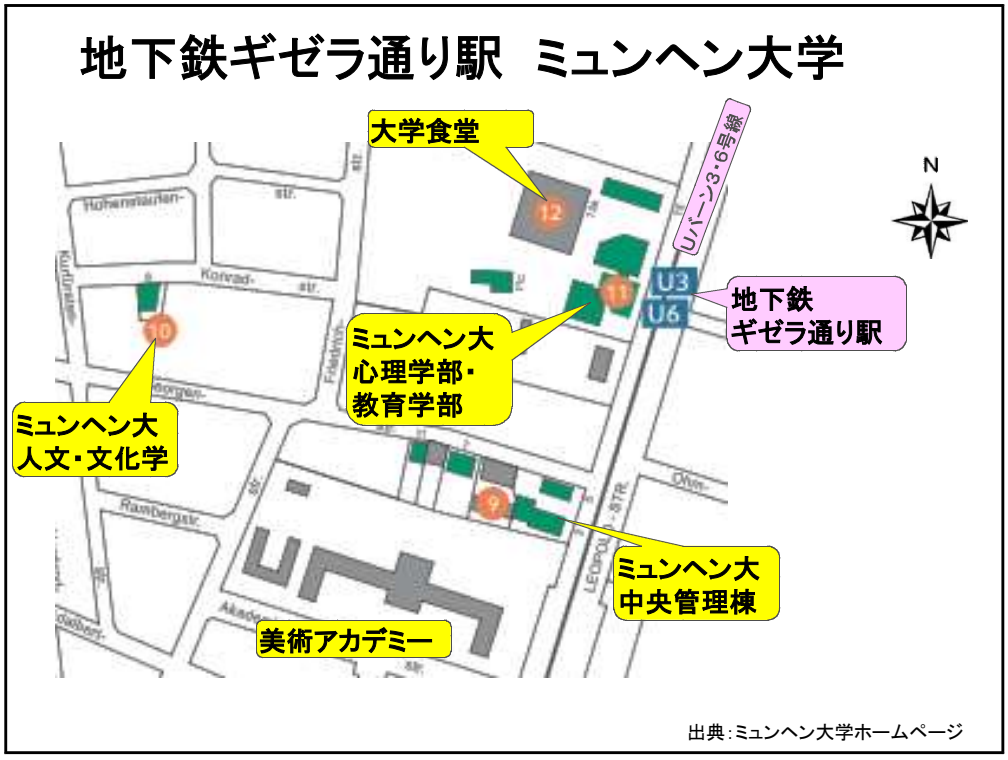
地下室から出てきたカンディンスキーや「青騎士」の絵

弾圧により、カンディンスキーや「青騎士」の絵は破棄されてしまったが、カンディンスキーの愛人だった画家のミュンターが、別荘の地下に大量の「青騎士」の絵を保管していた（カンディンスキーはミュンターを捨てて故郷のロシアに帰り、そこで別の女性と結婚し、ミュンヘンに戻ってくることはなかった）。このために、戦後になってそれらが日の目を見ることになった。それらの絵はレンバッハ美術館（後述）に寄

贈され、われわれはそれを見ることができる。

１－２．ギゼラ通り駅

地下鉄ギゼラ通り駅の周辺のミュンヘン大学



Ｕバーン３・６号線のギゼラ通り駅には、ミュンヘン大学のいくつかの学部がある。
駅の東側には、ミュンヘン大学心理学・教育学部のビルがある。
その奥には大学食堂のビル、南のほうには、大学の中央管理棟がある（その南がミュンヘン美術アカデミーである）。
西のほうに、ミュンヘン大学の人文・文化学の建物がある。

１－３．オデオンス広場駅とマリエン広場駅

オデオンス広場駅

Ｕバーン３・６号線のオデオンス広場駅は、ミュンヘンの中心であり、レジデンツなどの観光名所が並んでいる。
レジデンツの東側にマールシュタル広場がある。ここに２つのマックスプランク研究所がある。
マックスプランク税法・国家財政研究所とマックスプランク技術革新・競争研究所である。
マックスプランク研究所の歴史や詳細については、精神医学研究所（１－５参照）で詳しく述べる。

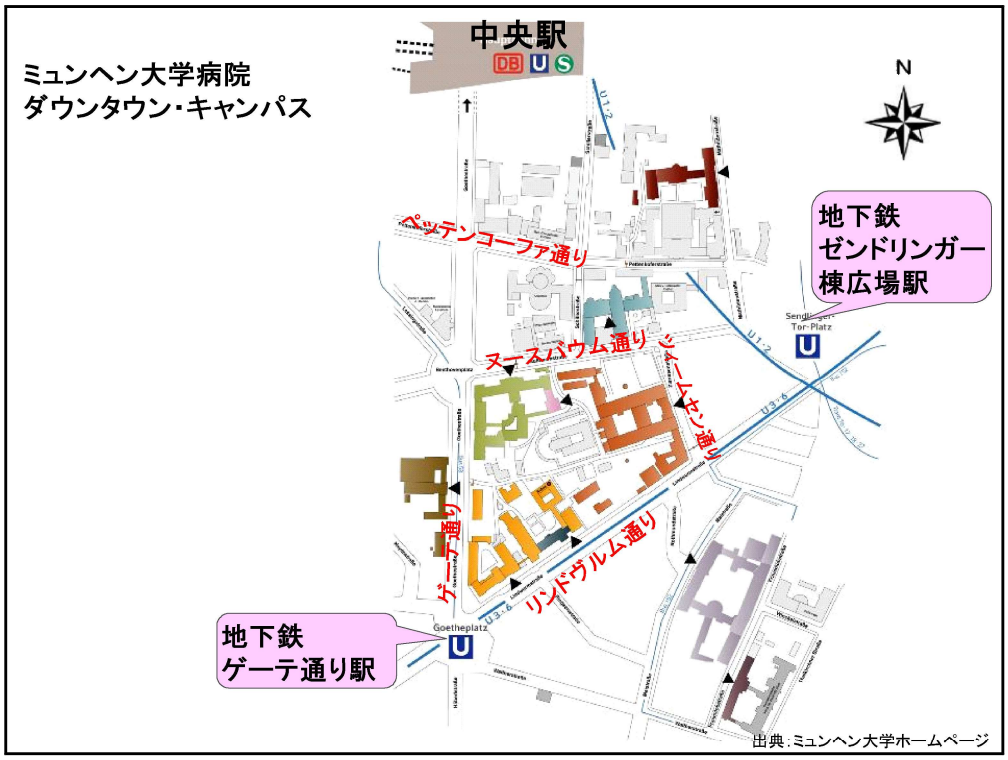
マリエン広場駅

Ｕバーン３・６号線のマリエン広場駅は、ミュンヘン観光の中心である。新市庁舎、旧市庁舎、フラウエン教会、ペーター教会などの観光名所が並んでいる。

１－４．ゲーテ広場駅

ゲーテ広場駅（U3、U6）

ミュンヘン大学病院　ダウンタウン・キャンパス



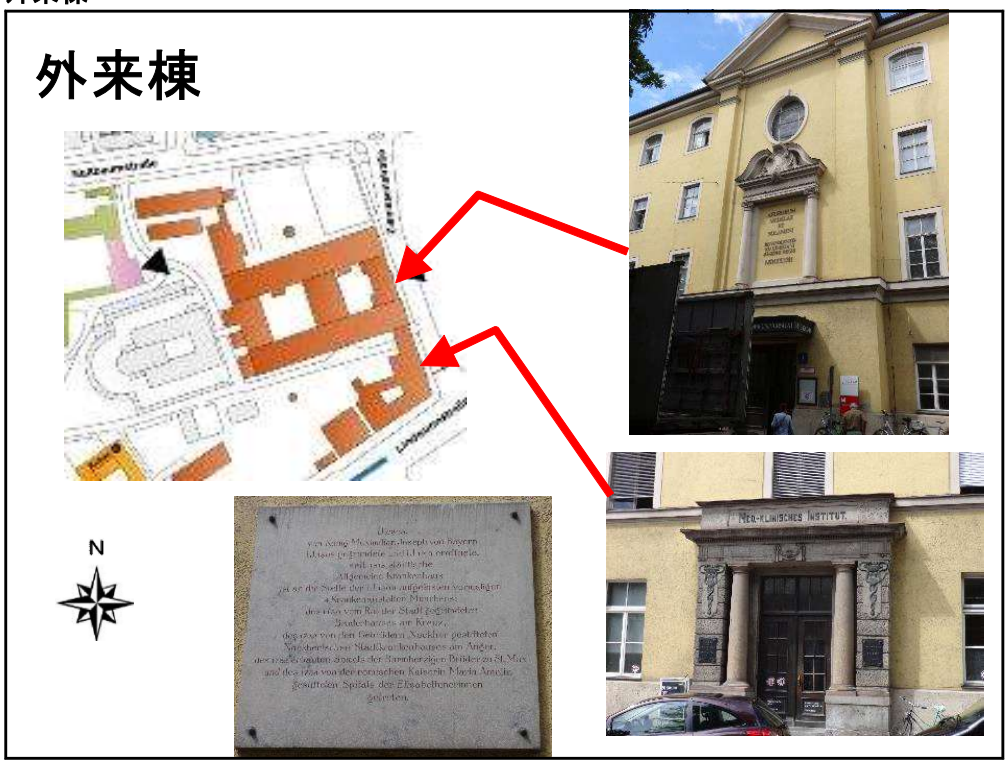
Ｕバーン３・６号線のゲーテ広場駅には、ミュンヘン大学病院のダウンタウンキャンパスがある。
ミュンヘン大学病院には、このダウンタウンキャンパスと、新しいグロスハデルンキャンパス（１－６参照）の２つがある。
この地図で、色のついた建物が大学病院のものである。
北側のペッテンコーファー通り、西側のゲーテ通り、南側のリンドヴルム通り、東側のツィームセン通りに囲まれた地区である。北側のペッテンコーファー通りは、ミュンヘン大学の衛生学教授で森鴎外が師事したペッテンコーファー（後述）にちなんだものである。

ミュンヘン大学病院　ダウンタウン・キャンパス

この地区には、各科が独立した建物を持っている。
ゲーテ広場駅で降りると、すぐ北側は小児科である。
その西側に歯科がある。

その北にはベートーベン広場があり、ここを東西に走るのはヌスバウム通りである。この通りの南側に精神科がある。
ヌスバウム通りの北側に外科がある。
東側のツィームセン通りには、外来棟がある。その向かいはヌスバウム公園である。
南のほうに少し離れて、婦人科がある。

外来棟



敷地の東側に外来棟・ポリクリ棟がある。
その南側に生理学研究所がある。

小児科

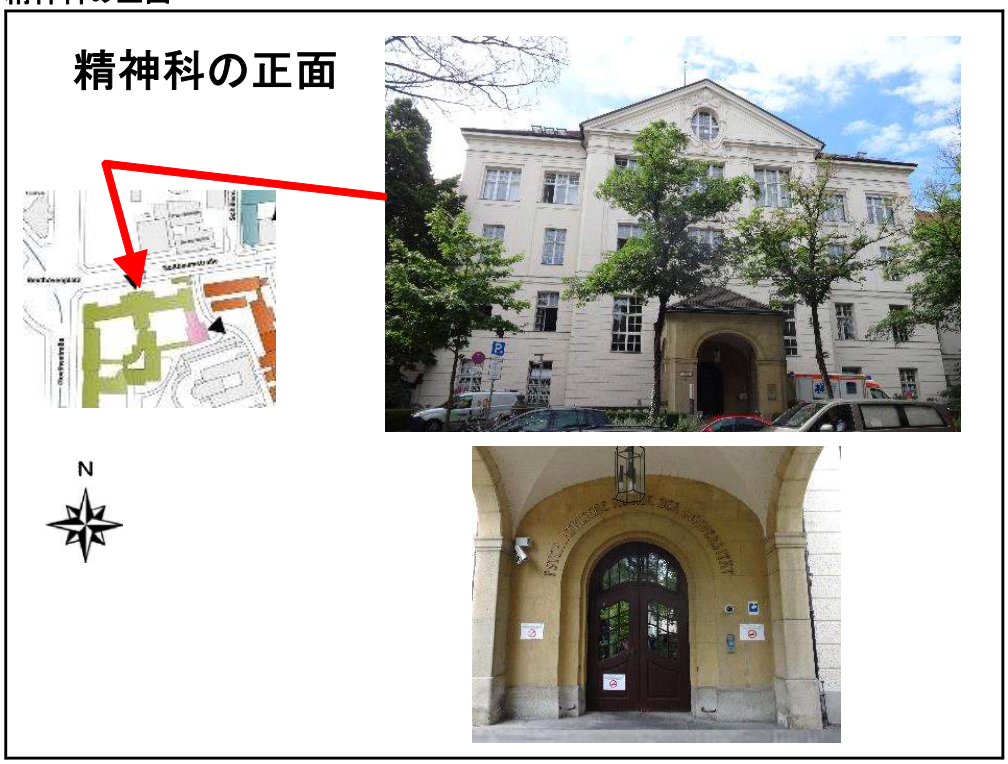
敷地の南側は小児科である。いくつかのビルがある。最も西側の建物は、歴史のある作りになっている。

入り口の階段の両脇に少女の座像がある。

精神科

ミュンヘン大学の精神科は、1904 年にクレペリンが創設した。
この写真は、南側から俯瞰したもので、いくつかの建物が複合している。北側の赤い屋根の建物と、南側の黒い屋根の建物からなっていることがわかる。その間の中庭には、木が茂っている。

精神科の正面



精神科の正面は、４階建ての白い建物である。真ん中に白い屋根がついている。
屋根つきの入口の周りには、「大学の精神科クリニック」という金色の浮き彫りがある。

小児思春期精神科

精神科の建物の東側には、小さな門がある。
門を入ると、オレンジ色のきれいな飾りがあり、小児思春期精神科と書いてある。

精神科の裏側

精神科の裏に回ると中庭が見えた。バスケットボールのコートもある。
中庭の南側はセラピー庭園（小児思春期精神科）となっている。

ミュンヘン大学精神科の歴史

ミュンヘン大学の精神科は、1904 年にクレペリンが創設した。これはドイツの精神医学の講座としては遅い方である。ほとんどの大学では、19 世紀のうちに精神医学講座ができていたからである。

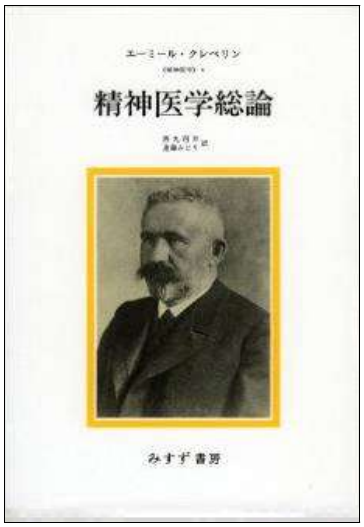
多くの有名な精神医学者がここで活躍した。ミュンヘンにあったマックスプランク精神医学研究所とも連携したので、そちらで活躍した学者も多い（１－５参照）。

●ミュンヘン大学精神科の主任教授

在任期間	主任教授
1904 ～ 1922	クレペリン　Emil Kraepelin
1924 ～ 1946	ブムケ　Oswald Bumke
1946 ～ 1952	シュテルツ　Georg Stertz
1952 ～ 1966	コッレ　Kurt Kolle
1956 ～ 1965	マトゥーセック　Paul Matussek

クレペリンの時代

クレペリン



出典：wikipedia

ミュンヘン大学精神科を創設したのはクレペリンである。

エミール・クレペリン（1856 ～ 1926）は、精神医学に最も大きな影響を与えた学者であるといっても過言ではない。現代の精神医学に影響を与えた学者をひとりだけあげろ、と言われたら、クレペリンの名前をあげる精神医学者が多いだろう。

27 歳のクレペリンは、結婚を控えていたために、金のために、1883 年に『精神医学摘要』を書いた。彼は、その後もこのテキストを何回も改訂し、第８版（1909 ～ 1915 年）を発表した。そして、第 9 版の途中まで出版したところで終わった。これが今日の精神医学の診断体系のもとになったのである。

クレペリンの考え方は、精神疾患も、一般の身体疾患の場合と同じように、原因、症状、転帰、組織病理といった情報を総合して、「疾患単位」を確立しようとした。それによって精神疾患を分類しようとした。クレペリンの時代は、生物学的精神医学がさかんになり、脳や身体の「原因」を追求する手段が発見され、生物学的原因をもとにして精神疾患を分類・診断する方法が脚光をあびた。しかし、クレペリンは、こうした生物学的な「原因論」を無視はしなかったが、むしろ、精神疾患の経過や予後、統計といった「現象論」からの分類を重視した。

そこから、早発性痴呆（現在の統合失調症）と躁鬱病という二大精神病の枠組みを作ったのである。「早発性痴呆」という用語で、統合失調症をひとつの疾患単位と初めて認めたのがクレペリンである。彼は、それまでバラバラに考えられていた破爪病・緊張病・妄想病をひとつの疾患単位としてまとめたのである。のちにこれを「統合失調症 Schizophrenia」（以前は精神分裂病と訳されていた）と命名したのがブロイラーである。

疾患単位を確立しようとした試みが、クレペリンの時代に完全に成功したというわけではない。とはいえ、「原因論」には踏み込まず、「現象論」から総合して分類・診断するという方法は、現代の「操作的診断基準」に受け継がれている。その代表はアメリカ精神医学会の『精神障害の診断と統計マニュアル（ＤＳＭ）』や世界保健機関の『国際疾病分類（ＩＣＤ）』であり、その考え方は「新クレペリン主義」と呼ばれるのである。

クレペリンとミュンヘン

精神科を創設したクレペリンは、下の表に示すように、ミュンヘンと縁が深い。

●クレペリンの仕事の場所

年	年齢		都市
1856 年		ドイツ北部のノイシュトレリッツに生まれる	
1874 年	18 歳	ライプツィヒ大学で医学を学ぶ	ライプツィヒ
1878 年	22 歳	ヴュルツブルク大学で学位	ヴュルツブルク
1878 年	22 歳	ミュンヘンで研修医	ミュンヘン
1882 年	26 歳	ライプツィヒ大学 神経学クリニックとヴントのもとで仕事	ライプツィヒ
1886 年	30 歳	ドルパト大学（現在はエストニア領）教授	ドルパト
1890 年	34 歳	ハイデルベルク大学精神医学教授	ハイデルベルク
1903 年	47 歳	ミュンヘン大学精神医学教授	ミュンヘン
1917 年	61 歳	ドイツ精神医学研究所を創設し兼務	ミュンヘン

クレペリンはドイツ北部のノイシュトレリッツに生まれた。フロイト（1856 ～ 1939 年）と同じ年の生まれである。

クレペリンは、ライプツィヒ大学で医学を学び、学位を取ったのはヴュルツブルク大学である。

その後、ミュンヘンで研修をした。

1882 年からライプツィヒに戻って、神経学クリニックのヴィルヘルム・アーブと、心理学のヴントのもとで研究した。

クレペリンはその後、いくつかの病院で精神医学の臨床経験を積み、ドルパト大学（現在はエストニア領）の教授をへて、1891 年に 35 歳でハイデルベルク大学の精神科の教授となった。そこで 12 年すごし、多くの弟子を育てた。ハイデルベルグでの活躍や弟子については、私の「ハイデルベルクを歩いてみよう」を参照いただきたい。　http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/

ミュンヘン移動後のクレペリン

その後、ミュンヘン大学から誘われて、1903 年に移った。

クレペリンは、後述のように、1917 年に、大学とは別に、ドイツ精神医学研究所を作った（現在のマックス・プランク精神医学研究所）。

世界中の精神医学者は彼の名声を慕ってここを訪ねたので、ミュンヘンはドイツ精神医学のメッカとなった。

ビールとクレペリン

クレペリンは禁酒主義者であり、ビールの本場ミュンヘンで禁酒運動をして、ビール会社や地元の人とトラブルをおこした。人々は彼を「実に偉い精神科の主任様」とおだてる一方で」、「飲まず屋の先生」とか「ラムネ党」などとからかった、とミュンヘンに留学した斎藤茂吉は書いている（後述のように茂吉は彼を恨んでいたらしい）。

また、クレペリンはノーベル賞の候補にのぼったことがあるが、彼はその際に「もし私にノーベル賞が与えられるとしたら、私のアルコールについての業績のほうが、（精神医学の業績よりも）それにふさわしいと思う」と言ったという。

確かにミュンヘンの人はビールを飲みすぎる。森鴎外もミュンヘン留学中にビールの利尿作用の研究をした。

クレペリンの弟子

●クレペリンの弟子

ハイデルベルク大学時代	アルツハイマー、ガウプ、ニッスル、ワイガント、ヴィルマンスなど ⇒ハイデルベルク学派
ミュンヘン時代	アルツハイマー、ガウプ、ニッスル

クレペリンのミュンヘンでの弟子ーハイデルベルク時代からの弟子

クレペリンのミュンヘンでの弟子：
ハイデルベルク時代からの弟子

アルツハイマー

ガウプ

ニッスル

出典：wikipedia

1891 ～ 1903 年のハイデルベルクのクレペリンは、多くの有能な精神医学者を集め、後に精神医学で名をなした研究者が育った。アルツハイマー、ガウプ、ニッスル、ワイガント、ヴィルマンスなどである。このクレペリン人脈が基礎となって、後にヤスパースをはじめとするハイデルベルク学派が作られていく。

クレペリンがミュンヘンに移った時に、アルツハイマーとガウプが彼についてきた。のちに、ニッスルもミュンヘンの精神医学研究所に呼ばれることになった。

●アルツハイマー

アルツハイマー型認知症の命名者として知られるアルツハイマーもそのひとりである。アロイス・アルツハイマー（1864 ～ 1915 年）は、ヴュルツブルク大学で医学を学び、フランクフルトの病院で臨床経験を積んだ。1902 年に、アルツハイマーはハイデルベルク大学のクレペリンのもとで助手をつとめた。1903 年に、クレペリンがミュンヘンに移ったときに、アルツハイマーもいっしょにミュンヘンに移った。1912 年に、ブレスラウ大学（現在はポーランド領のヴロツワフ大学）の精神科教授となった（前任者はボネファー）。その地で病死した。

アルツハイマーは、1901 年に診療した女性の症例を 1906 年に発表し、この症例が後に「アルツハイマー病」と呼ばれるようになった。アルツハイマー病は、クレペリンの教科書で大きく取り上げられた。現在のアルツハイマー型認知症である。

●ガウプ

後にチュービンゲン学派を率いるようになるガウプも、クレペリンの弟子であった。ロベルト・ガウプ（1870 ～ 1953 年）は、ブレスラウ大学でウェルニッケとボネファーについて学び、1901 年に、ハイデルベルク大学のクレペリンのもとで研究した。1903 年に、クレペリンがミュンヘンに移ったときに、ガウプもいっしょにミュンヘンに移った。1908 年に、チュービンゲン大学の精神科教授となり、1936 年までつとめた。

ガウプはパラノイアについて長年研究した。とくに「教頭ワーグナー」と呼ばれる症例報告は有名である。1913 年に、教員がみずからの家族５名を含む９名を殺し、12 名に重傷を負わせた大量殺人事件である。この犯人の精神鑑定をおこなったのがガウプである。それにより、精神病のため責任能力がないと判定されて無罪となり、精神科病院に収容され、そこで 25 年後に一生を終えた。彼は獄中で戯曲を発表するなど、人格の崩壊の兆候は全く見せず、自分の妄想についての病識も持たなかったという。彼の死に至るまで、ガウプは観察し、それを報告した。精神病の妄想というものは、精神医学では了解不能とされるが、ガウプは、このような極端な症例でも、妄想が発展する過程は心理的に了解できると主張した。人格反応としてのパラノイア（妄想）という考え方であり、これがクレッチマーの妄想論にも引き継がれた。

ガウプのもとには、多くの研究者が集まり、「チュービンゲン学派」と呼ばれる学風ができた。「シュワーベン詩人学派」などと呼ばれるように、科学的というよりは、文学的な学問的雰囲気だった。有名なのは、クレッチマー、ランゲ･アイヒバウム、ホフマンといった精神医学者である。

●ニッスル

フランツ・ニッスル（1860 ～ 1919 年）は、ミュンヘン大学で精神医学を学び、フランクフルトで神経学の研究をおこなった。彼は「ニッスル染色法」と呼ばれる染色法を開発し、彼の名前は「ニッスル小体」という部位に今でも残っている。フランクフルトで、前述のアルツハイマーと知り合い、新しい神経染色法を応用した。1895 年に、クレペリンに呼ばれて、ハイデルベルク大学の助手となった。クレペリンがミュンヘンに移ると、短期間のボネファーをはさんで、ニッスルが後任の教授となった。

後述のように、1908 年にヤスパースがハイデルベルクの精神科に入った時は、ニッスルが主任教授をつとめていた。ヤスパースの『精神医学総論』を読み、進路についていろいろアドバイスをしたのがニッスルであった。

ニッスルは、精神科教授としての教育と運営の仕事が多く、腎臓病も患ったため、神経学の研究はあまり進まなかった。第一次大戦が始まると、大学をやめて軍の病院の院長をつとめた。1918 年に、再びクレペリンから誘われて、ミュンヘンのドイツ精神医学研究所に移り、そこでブロードマンやシュピールマイヤーとともに仕事をしたが、１年後に腎臓病で亡くなった。

クレペリンと日本

日本の精神医学と精神医療を建設したのは、東京帝国大学医科大学の教授だった呉秀三（1865 ～ 1932 年）であるが、呉がドイツとオーストリアに留学したのは 1897 年から 1901 年の間であり、その後半はハイデルベルクのクレペリンのところにいた。クレペリンの教科書の第６版から７版にかけての時期であったので、日本には当時のクレペリンの最新学説を持ち込んだことになり、クレペリンが日本の精神医学界のスタンダードとなった。

また、クレペリンとヴントの作業曲線の実験をもとに、日本の心理学者内田勇三郎（1894 ～ 1966 年）が開発したのが「内田クレペリンテスト」である。

日本人のクレペリン詣で

クレペリンはミュンヘン大学やこの研究所で精力的に研究を進めた。世界中の精神医学者は彼の名声を慕ってミュンヘンを訪ねたので、精神医学のメッカとなった。日本からも呉秀三（東京帝国大学医科大学教授）、斎藤茂吉、内村祐之（のちの東京大学医学部教授）など多くの精神医学者が留学した。

この時期に日本人留学生が増えたのは、明治末期から大正デモクラシーの時代が、日本の大学アカデミア形成期であり、西洋の学問をモデルにしようとする機運が高まったからである。さらに、1914 年から 1923 年のドイツのハイパーインフレも大きな要因である。第一次大戦後に、ドイツの貨幣価値が下がったため、ドイツ人は貧しい生活を強いられ、地獄の時代を迎えた。その一方で、外国人にとっては天国の時代であった。日本の貨幣価値が上がったため、日本人はドイツで裕福に暮らすことができた。多くのドイツの大学教師は、日本からの留学生に対して、個人教授をしてお金をかせいだりしていた。

斎藤茂吉のクレペリン握手拒絶事件

また、歌人の斎藤茂吉は、クレペリンに握手を求めて拒絶され、それを一生恨んでいた。

斎藤茂吉（1882 ～ 1953 年）は、アララギ派の歌人として有名だが、彼は長崎大学医学部（当時の長崎医

学専門学校）の精神科の教授をつとめた精神科医である。実家は貧しかったが、親戚の斎藤紀一の勧めで医者を志し、一高・東京帝国大学医科大学を出て医師となった。斎藤家の長女と結婚して、婿養子となった。35歳で長崎医学専門学校（現在の長崎大学医学部）教授となった。前任教授の石田昇がアメリカの大学に留学するために、その間の代理教授をつとめたものである。ところが、石田は留学先で精神病を発症し、妄想から殺人事件をおこしてしまい、終身刑となってしまった（この事件については丹野義彦『アメリカこころの臨床ツアー』のボルチモアの項を参照）。このため、茂吉は正式の教授となった。しかし、その激務からか、38歳で喀血して入院し、教授職を退いた。病気から回復して、39 歳でヨーロッパに留学し、はじめウィーン大学で、次にミュンヘン大学で研究した。43 歳で帰国し、義父が経営していた青山脳病院（精神科）の院長を継いだ。病院長としての激務（例えば、病院が火事になったり空襲で焼けて再建が茂吉に任されたり、茂吉が処方した睡眠薬で芥川龍之介が自殺したという）のかたわら、歌人としても活躍し、２人分の人生を送った。

さて、1923 年、41 歳の茂吉は留学中のミュンヘンで、クレペリンと会う機会があった。茂吉はクレペリンを尊敬していた。

エミール・クレペリン。その名に学生時代から徹吉は親しみ、畏敬と憧憬の念を抱きつづけてきた。クレペリンは近代精神病学建立の巨匠である。徹吉は以前から彼の『精神病学』の後の版、そして初版本すらも手に入れて大切にしていた。初版本は小形で三百八十頁を越えぬ書物にすぎない。その各論で述べられている疾病には、のちのクレペリンの分類の特色を見ることはできない。しかしこの学者は、版ごとに目を見はる新しい概念を増補してゆき、ずっと後世になってもゆるがしがたいゴチック大寺院にも似た分類法を確立したのであった。徹吉がミュンヘンに来た理由にしても、この一代の碩学の顔容に一目接したいという、ひそかな、しかし切実な念願を無視することはできなかった。
出典：北杜夫『楡家の人びと』

この文章の「徹吉」は茂吉のことである。彼がクレペリンに会った時、次のような歌を詠んだほどである。

愛敬の相のとぼしき老碩学 Emil Kraepelin をわれは今日見つ
われ専門に入りてよりこの老学者に憧憬持ちしことがありにき

ところが、これほど尊敬していたクレペリンに対して、茂吉が握手を求めて手を出しても、クレペリンに拒絶されてしまったのである。茂吉は『エミール・クレペリン』という随筆に以下のように書いている。

私は立ってクレペリンの前に礼を述べた。クレペリンはそれに向って一語も応へない。・・・私もクレペリンと握手しようと決心した。そしてまさに私が手を出しかけたその一瞬にクレペリンは・・・手をばひょいと引込めて降りて行った。これも私の予期せざることであったから、やはり意外と謂はうとおもふ。私は一瞬と書いたが、実にそのとほりであって、クレペリンの行動は私にそれ以上事を為す余裕は毫末も與へなかったのである。見てゐるとクレペリンは二人のジャワ国の医者とも銘々握手して、講堂を出て行ってしまった。

私は講堂を出ようとして階段をのぼりながらひとり苦笑してゐた。・・・南満医学堂の教授M君が同じ年の春わざわざクレペリンを訪ね、かへりに握手しようとして手を引っ込められたのださうである。・・・ミュンヘン大学医学部の老教授等は、大戦後そこを訪ねる日本の留学生に対して如何に幼稚で露骨な行為をなしたかといふ、その実例を私は幾つも聞いてゐた。ミュンヘンを経由してウィーンに来る日本の医者は幾つも憤怒に耐へたる体験談を話した。・・・クレペリンは無邪気である。さう私は思った。
出典：「エミール・クレペリン」斎藤茂吉全集、第 5 巻、岩波書店

クレペリンは、ジャワ国の医師には握手したのに、茂吉にはしてくれなかった。茂吉はこのことを恨んだ。

とはいえ、この文章の後半部分を読むと、茂吉は、ドイツと日本の歴史的状況を冷静に理解していた。つまり、日本の医学者は、ドイツ医学を学びに来たのに、第一次世界大戦では、日本はドイツと戦った（日独戦争）。1914 年に日本軍はドイツの植民地の青島を占領した（青島のドイツ兵は日本で捕虜生活をおくった。徳島県の板東俘虜収容所におけるベートーヴェンの交響曲第 9 番の日本初演については、映画『バルトの楽園』として描かれた）。その後、1936 年になると、日独防共協定が結ばれて、日本とドイツは復縁することになる。1914 年から 1936 年の間は、恩師に対して弟子が裏切ったと感じたドイツ医学者も多かった。医学部の老教授が日本の留学生に露骨な行為をしたのはそのためである。

頭では冷静にこうした状況をわかっていても、しかし、茂吉はクレペリンを一生恨んでいたようだ。長男の北杜夫に何回も言っていたという。

この些少な事件は茂吉を憤怒させたのだ。留学中のことなどほとんど語らなかった父が、クレペリンの「無礼さ」について昂奮した口調でしゃべるのを、中学時代から晩年の箱根の勉強小屋の二人暮しのときまで、私は幾度聞かされたことか。とにかく父は、「うぬれ、この毛唐め！」と心の中で歯ぎしりしたのである。「毛唐」という言葉は随筆にも出てこない。しかし、私は幾度となくそれを聞かされたから、「楡家」の中では、教室を去りゆくクレペリンの後ろ姿を凝視しながら立ちつくす徹吉に、「毛唐め。この毛唐め！」と、田夫

のような罵詈を幾遍となく繰返させたわけである。
　とにかくクレペリンの握手拒否は、ヒネーゼ(シナ人)と呼ばれるよりも、ヤッブスと差別用語をあびせられるより何倍も、父を憤怒させ、晩年まで忘れられなかった並々ならぬ傷痕を残したのだ。
出典：北杜夫『壮年茂吉　「つゆじも」～「ともしび」時代』岩波現代文庫

クレペリン事件の背景
　この事件について、茂吉と親しかった内村祐之（内村鑑三の息子で東京帝国大学医学部精神科教授）は、冷静に次のように分析している（「エミール・クレペリンの印象」『わが歩みし精神医学の道』みすず書房）。つまり、上のような日独の歴史的状況にくわえ、クレペリンは、ミュンヘン大学に研究のために来るのではなく、学位取りだけを目的に来る日本人医学生の態度を快く思っていなかったという。また、クレペリンの性格は、冷徹で近づきにくく、暖かい心を持たない典型的なドイツ人教授だった。それは彼の精神医学の態度にもあらわれているという（とはいえ、彼は詩も書いたロマンチストでもあり、晩年のクレペリンは仏教に凝った)。その一方で、茂吉にもかなり気むずかしい一面があったと指摘する。「やはり茂吉さんの詩人らしい過敏性が、いろいろの面に現れていたのではないか。」
　ちなみに、西丸四方（島崎藤村の子孫の精神医学者）によると、クレペリンは前にジャワへ行って比較文化精神医学の研究をしたので、ジャワ人に対しては、親しみを持っていたのではないかという（西丸四方『精神医学の古典を読む』みすず書房)。
　茂吉の事件の背景にはいろいろな要素がからんでいる。

●クレペリン以降のミュンヘン大学精神科

●オスワルド・ブムケ
　クレペリンが精神医学研究所に専念するため、1922 年にミュンヘン大学精神科教授をやめた後、教授ポストを引き継いだのが、ブムケであった。
　オスワルド・ブムケ（1877 ～ 1950）は、フライブルク大学、ライプツィヒ大学、ミュンヘン大学、ハレ大学で学び、医師となった後は、1906 ～ 1913 年までフライブルク大学のアルフレッド・ホッヘのもとで臨床をおこなった。ホッヘの学説は「症候群仮説」であり、「精神障害には疾患単位なるものは存在せず、われわれが把握できるものは症候群であり状態像にしかすぎない」という考え方であった。つまり、クレペリンのように「疾患単位」を確立しようとしてもムダであり、事実、ホッヘは当時のクレペリンの最大の批判者であった。弟子のブムケもホッヘの「症候群仮説」を支持した。ブムケは、1914 年からロストック大学、1916 年からブレスラウ大学、1918 年からハイデルベルク大学、1921 年からライプチヒ大学の教授をつとめた。
　そして、1922 年にクレペリンがミュンヘン大学精神科教授をやめて空席となり、1924 年にブムケが教授となったのである。これは当時の精神医学界に大きな波紋をもたらした。つまり、クレペリンの最大の批判者であるホッヘの「症候群仮説」を受け継いだブムケが、よりによってクレペリンのポストを引き継いだからである。ブムケは、講義でもクレペリンの疾患単位説をドグマであると批判したという。
　理論上の違いだけでなく、実務上のことでもふたりはもめたようだ。後述のように、クレペリンは 1917 年にドイツ精神医学研究所を作ったが、研究所ははじめ建物を持たず、精神科の建物の中に間借りをしていた。1922 年にクレペリンが正式に研究所に移ってもこの状態は変わらず、1924 年にブムケが赴任した時もまだ続いていた。このことでもブムケはクレペリンに我慢ならぬ気持ちを持っていたという。嫁と小姑の関係といったところか。クレペリンは 2 年後の 1926 年には病死するのだが、ブムケとクレペリンの間は悪かったという。(研究所が独自の建物を持ち、精神科から出て行くのは 1928 年のことである。やっと小姑が片づいた)
　ブムケは、1924 ～ 1946 年まで、22 年間教授をつとめた。1928 年にはミュンヘン大学の学長をつとめた。ナチスの時代にはその協力者となり、戦後、1946 年に職を追われたが、翌 1947 には復帰した。
　ブムケは、もともと神経学者であり、彼は生物学的な志向が強かった。ブムケは神経科医ではあったが、精神科の診療においては、広く総合的に患者の情報を集めて、人間的な理解も重視した。ただし、精神分析学に対しては、その極端な心理主義を嫌って、批判的な態度を貫いた。
　ブムケについて面白いのは、ソ連のレーニンが病気になったとき、神経病医としての診断を求められたことである。1923 年にブムケなどの医師団がモスクワに呼ばれて、レーニンの診察をした。ブムケは 7 週間滞在した。そこで、トロツキーやブハーリンなどの政治家とも知り合ったという。
参考文献：内村祐之『わが歩みし精神医学の道』みすず書房

●ブムケ以後
　それ以後、ミュンヘン大学精神科の主任教授をつとめたのは、シュテルツ Georg Stertz、コッレ Kurt Kolle、マトゥーセック Paul Matussek である（詳しくは調べられなかった)。マトゥーセックは『妄想知覚論とその周辺』の邦訳がある（伊東昇太訳、金剛出版、1983)。

●ミュンヘンと精神医学

ほかにもミュンヘンで学生時代をすごしたり、ミュンヘンで臨床活動をおこなった精神医学者はたくんさいる。

●ミュンヘンとゆかりの深い精神医学関係者

ミュンヘン大学で学生時代をすごした精神医学者	ヤスパース マイヤー・グロス
ミュンヘンで臨床活動をおこなった精神医学者	ベーリンガー クルト・シュナイダー

●ヤスパース

カール・ヤスパース（1883 ～ 1969 年）は、記述精神医学を確立した精神医学者であり、のちに実存哲学の思想家として世界的に有名になった。北ドイツのオルデンブルクで生まれ、もともと孤立しやすい性格であり、気管支拡張症と二次的心不全という病気を抱えていたため、アパシー気味の大学生活であった。はじめはハイデルベルク大学やミュンヘン大学で法学を勉強していたが、19 歳の時に人生計画を立て、進路を変えた。イタリアを旅行している時に、スイスのジルス・マリアという場所（この近くの湖の巨岩の前でニーチェが『永劫回帰』の思想を思いついたというゆかりの池）で、両親を説得するために次のような計画書を書いたのである。「法学から医学に移る。医師国家試験を受けた後、精神医学に進み、ハイデルベルクのクレペリンのような学究生活を送る。最後には心理学者として哲学科で講じたい。」このジルス・マリアでの決意によって、ヤスパースはアパシーから脱出した。その後の人生は、このジルス・マリアでのシナリオを実現する過程であり、そのとおり、精神医学→心理学→哲学へと領域を移っていった。

ヤスパースはもしかしたらミュンヘン大学に来ていたかもしれない。ハイデルベルク大学で、若きヤスパースは、自信作の『精神病理学総論』をニッスル教授に見せた。ニッスルは次のように言った。「この本は結構なものだが、現在この大学には欠員がない。だが、ミュンヘン大学のクレペリンか、ブレスラウ大学のアルツハイマーのもとであれば、今すぐポストを用意してくれるだろう。どちらかへ行く気はないか」。ニッスルとクレペリンの関係はよかったので、ヤスパースが望めば、ミュンヘン大学のクレペリンのもとでポストが用意されたかもしれない。しかし、ヤスパースは、ハイデルベルクを離れるつもりはなかったので、「精神科でポストを得られなくても、哲学部の心理学科では教授資格を取ることができるだろう。」と答えた。ヤスパースは、精神医学の空席待ちの時代に心理学へ寄り道し、いずれは精神医学に戻るつもりであった。しかし、心理学者となったヤスパースは、精神医学に戻ってくることはなかったのである。

●マイヤー・グロス

ヴィルヘルム・マイヤー・グロス（1889 ～ 1961 年）は、ハイデルベルクやミュンヘンで医学を学び、1912 年に、ニッスルの精神医学教室の一員となり、1929 年には助教授となった。1928 年には、精神医学の代表的専門誌である Nervenarzt を創刊した。彼は、フロイト流の精神分析には反対の立場をとった。1932 年には、ゲッチンゲン大学教授に決まったが、ユダヤ人であったために、ナチスの台頭により反対されて実現しなかった。彼は、1933 年には、ロックフェラー財団の奨学金で、イギリスに渡り、ロンドンのモーズレー病院に移った。以後、彼は死ぬまでイギリスに留まり、スコットランドのダンフリーズやバーミンガム大学で精神医学の仕事をした。英語で著述を発表し、彼によってドイツ流の精神医学がイギリスに紹介されることになった。マイヤー・グロスがスレイターとロスと共著で 1954 年に書いた『臨床精神医学』という本は、版を重ね、世界中で教科書として使われた。

●ベーリンガー

クルト・ベーリンガー（1893 ～ 1949）は、ハイデルベルク大学で医学を学び、市内の病院で臨床経験を積んだ後、1921 年にヴィルマンスの精神科に入った。1932 年まで活動し、ハイデルベルク学派のひとりとされる。ベーラーはメスカリンを用いた実験精神病の研究で有名である。メスカリンのような幻覚剤は統合失調症のような症状をひきおこすので、自分も含めた精神科医 30 人にメスカリンを投与して精神の変容を調べた。1925 年には、精神科の教授となった。1928 年には、マイヤーグロスなどとともに、精神医学誌 Nervenarzt を創刊した。1932 年にミュンヘン大学へ招かれ、1934 年には、ホッヘの後任としてフライブルク大学の教授となった。

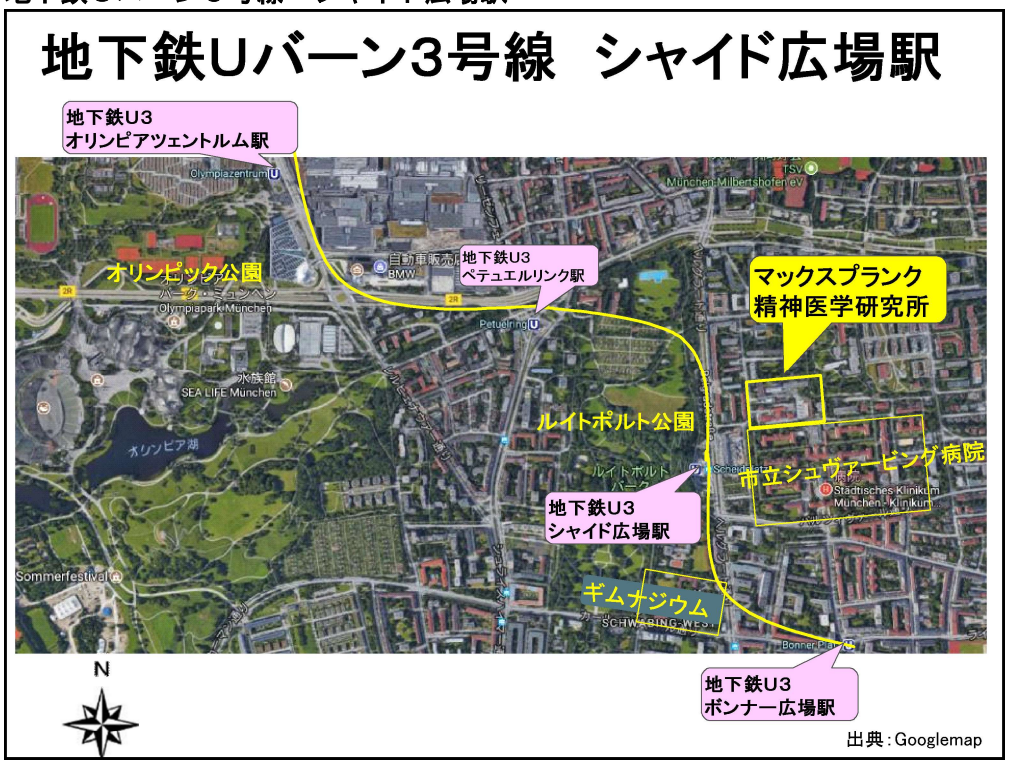
●クルト・シュナイダー

クルト・シュナイダー（1887 ～ 1967 年）は、統合失調症の精神病理学を完成させ、臨床精神医学の完成者と言われる。チュービンゲン大学で、医学ともに、哲学を修めた。哲学者のマックス・シェーラーやハルトマンの影響が強かったという。ケルン大学をへて、ミュンヘンのドイツ精神医学研究所に移った（後述のマックスプランク精神医学研究所の項目を参照）

精神医学研究所の臨床部門の主任として活躍したが、第二次大戦中は、ナチスによる優生学政策に嫌悪して、精神医学の研究をやめて、軍医としてすごした。大戦後の 1946 年に新生ハイデルベルク大学精神科の教授として招かれた。

１－５．シャイド広場駅

地下鉄Ｕバーン３号線　シャイド広場駅



次にマックスプランク精神医学研究所を訪ねてみよう。

地下鉄Ｕバーン３号線または２号線のシャイド広場駅（シャイドプラッツ駅）で降りる。

この写真はＵバーン３号線を示したもので、シャイド広場駅の２つ先のオリンピアツェントルム駅には、オリンピック公園がある。1972 年にミュンヘンオリンピックが開かれたところである。ミュンヘンオリンピックでの日本人選手では、バレーボールや水泳で活躍したことでも思い出される。また、オリンピック史上最悪のテロ事件がおこったことで記憶されている。会期中にパレスチナゲリラ組織「黒い九月」が選手村のイスラエル選手宿舎を襲い、11 人を殺し、ゲリラ５人も死亡した。

アラブゲリラがイスラエル（ユダヤ人）を殺したわけだが、後述のように、ユダヤ人を虐殺したナチスが活動を始めた場所がミュンヘンであり、アラブゲリラがミュンヘンを狙ったことは、そのような象徴的な意味があったのだろうか。暴力の連鎖である。ミュンヘンでナチスが活動を開始し、ダッハウを始めとして強制収容所が作られ、ユダヤ人を大量虐殺した→ユダヤ人は戦後にイスラエルを建国しアラブ人を排除した→アラブゲリラがイスラエル（ユダヤ人）に対してテロをおこなった、という暴力の連鎖。このテロ事件では、ドイツ警察の不手際により、イスラエル（ユダヤ人）の捕虜は全員殺され、アラブゲリラの一部は逃げてしまった。ドイツにしてみれば、自分たちが虐殺したためにユダヤ人がイスラエルを建国し、それでアラブ人を追い出したという加害者意識もあったのかもしれない。見事に「アラブゲリラ全員を射殺して、イスラエル（ユダヤ人）捕虜を全員無事で解放」といった解決をしたら、かえってドイツは非難されたかもしれない。どちらに味方してもドイツはやっかいな立場に追い込まれたはずである。シロウト考えだが、ドイツ警察はわざとドジなふりをして強行な解決をしなかったのかもしれない。

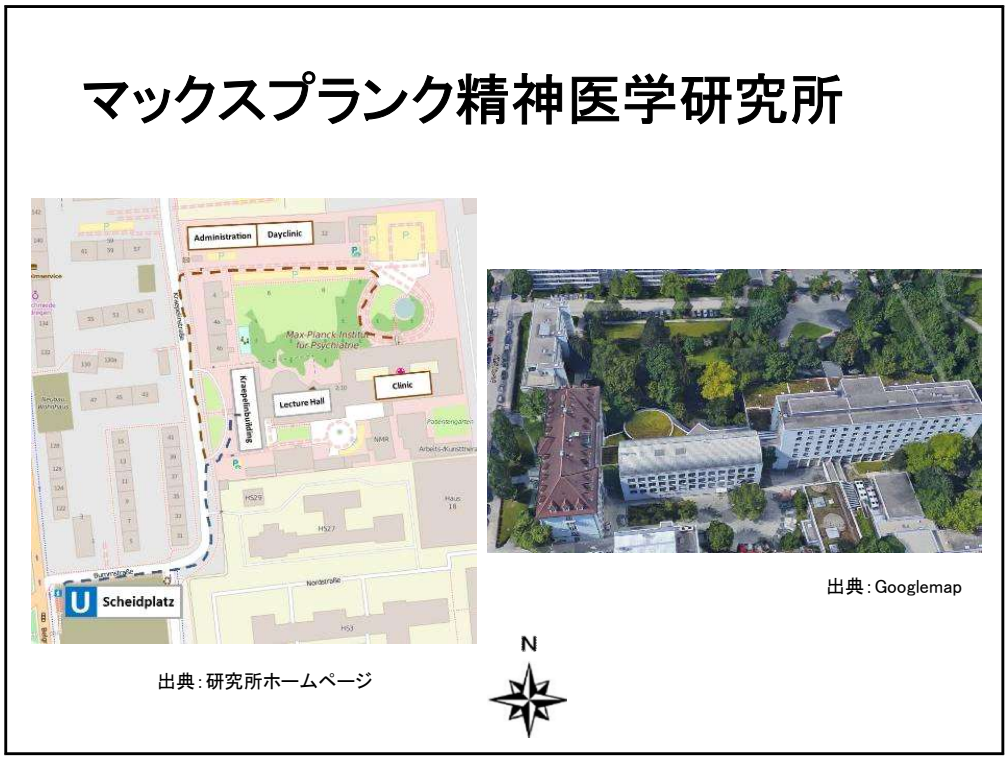
シャイド広場駅（シャイドプラッツ駅）

シャイド広場駅の東側にマックスプランク精神医学研究所がある。その南には市立シュヴァービング病院の広い敷地があり、赤い屋根の病棟が並んでいる。

駅の西にはルイトポルト公園が広がっている。1911 年に作られた公園で、園の北側には、ルイトポルトの丘という高さ 37m の丘があり、ここからミュンヘン市内が見渡せる。この丘は、第二次世界大戦の空襲で壊された家のがれきが積まれてできたもので、「シュヴァービング瓦礫の山」とも呼ばれる。戦争の傷跡はあちこちに残っている。

公園の南側にはギムナジウムがある。

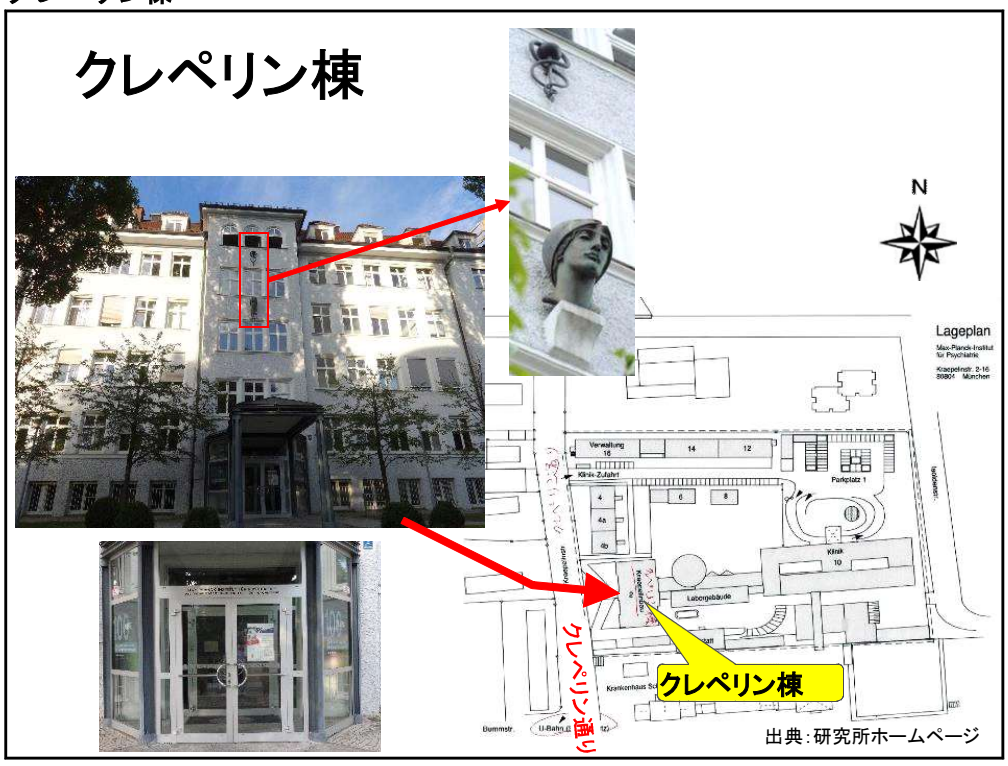
マックスプランク精神医学研究所



シャイド広場駅を出て、東に行くと、クレペリン通りがある。その南はジェームス・ローブ通りとつながっている。ローブは後述のようにクレペリンに研究所設立の資金を出したアメリカの富豪である。

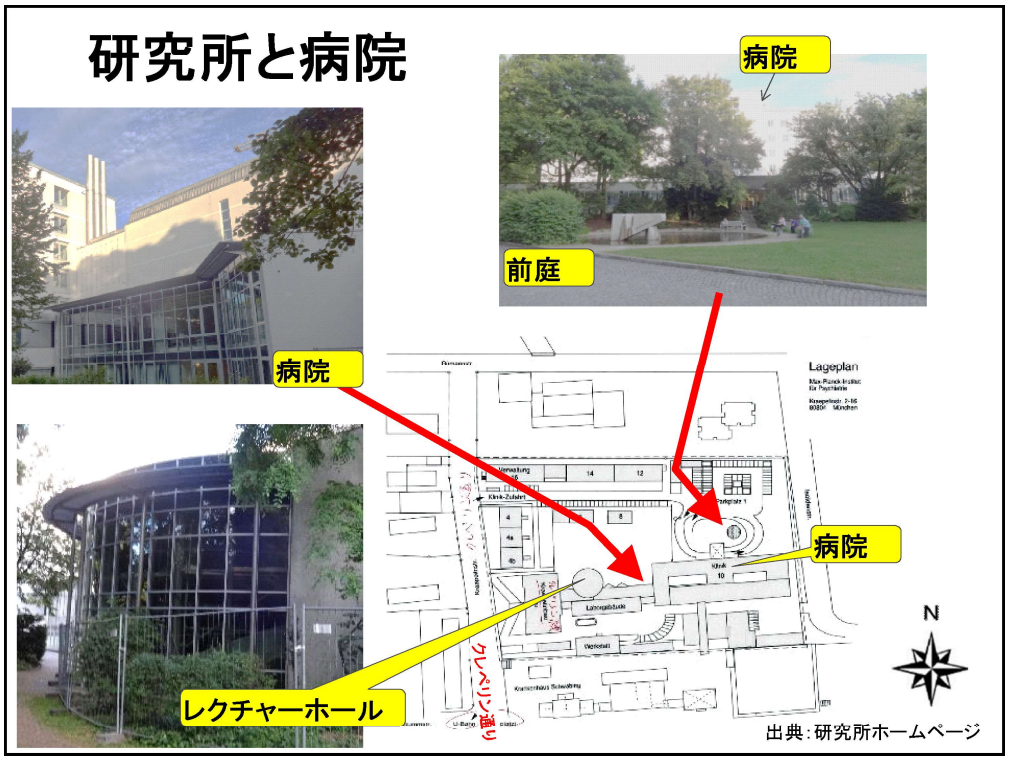
クレペリン通りを北に行くと、すぐにマックスプランク精神医学研究所 Max-Planck-Institut für Psychiatrie がある。正面に建つのはクレペリン棟である。

クレペリン棟



クレペリン棟は、白い６階建てのビルである。

研究所と病院



クレペリン棟の北側にある半円形の建物はレクチャーホールである。
クレペリン棟の北側は広い公園になっていて、草木が覆っている。
研究所の敷地の東側には、病院が付設されている。病院の前には、池と庭がある。

マックスプランク精神医学研究所の歴史

この研究所はこれまで２回名前が変わった。

年	名称	ドイツ語名
1917 年～	ドイツ精神医学研究所	Deutschen Forschungsanstalt für Psychiatrie（ＤＦＡ）
1924 年～	カイザー・ヴィルヘルム研究所	Kaiser-Wilhelm-Gesellschaft zur Förderung der Wissenschaften
1954 年～	マックスプランク精神医学研究所	Max-Planck-Institut für Psychiatrie

１）準備段階

この研究所を構想したのはクレペリンである。1912 年、クレペリンは、大学から独立した学際的な脳の研究をおこなう施設をドイツに初めて作らなければならないと構想した。

1916 年、ローブというアメリカの銀行家が寄付をしてくれたので、研究所が作られることになった。彼の名前は、研究所の前のジェームズ・ローブ通りに残っている。

ジェームス・ローブ James Loeb（1867 ～ 1933 年）は、ニューヨーク生まれのドイツ系ユダヤ人で、21 歳で父親の銀行を継いだ。ところが、35 歳の時に精神的問題のために引退し、両親の実家のミュンヘンに引っ越した。そこでクレペリンの治療を受けた。その縁で、ローブは研究所設立の資金を出し、1933 年まで寄付は続けられた。彼は他にもいろいろと寄付をおこない、例えばミュンヘン大学やムルナウの病院、ハーバード大学のフォッグ美術館などにも寄付している。さらに、ニューヨークのジュリアード音楽院やローブ古典ライブラリーなどの設立にも金を出した。

２）ドイツ精神医学研究所（ＤＦＡ）時代

1917 年に、ルードヴィヒ３世の名前により、ドイツ精神医学研究所（ＤＦＡ）が発足した。研究所のコンセプトは、生物学的・科学的アプローチと経験的・臨床的アプローチの統合ということであった。

研究所の場所は、はじめは、ミュンヘン大学病院の精神科（前述）の建物の中に間借りしていた。このため、前述のように、クレペリンと後任のブムケの間にはトラブルもあったようだ。

1922 年に、臨床部門は、市立シュヴァービング病院（前述）の病棟に作られたが、研究部門はまだ精神科に間借りしていた。

３）カイザー・ヴィルヘルム研究所時代

1924 年には、カイザー・ヴィルヘルム研究所に吸収され、その一部となる。
1926 年にはクレペリンが病死した。
1928 年に、ロックフェラー財団の寄付により、今のクレペリン通りに研究所を建てて、移転した。これによって、精神科への間借りから脱することができ、ブムケとの確執も収まったようだ。ただし、臨床部門は市立シュヴァービング病院の中にあった。

４）マックスプランク精神医学研究所時代

1954 年に、マックスプランク研究所に名称変更した。マックスプランク研究所の設立については後述する。
1966 年に、研究所の敷地内に、付設の病院を建てた。
研究所は 1917 年に創設されたので、2017 年は 100 周年となり、イベントがおこなわれるようだ。

研究所の研究者列伝

この研究所は、はじめからそうそうたる科学者・臨床家が主任をつとめてきた。初期の研究部門の主任を表に示す。

●初期のマックスプランク精神医学研究所　部門の主任

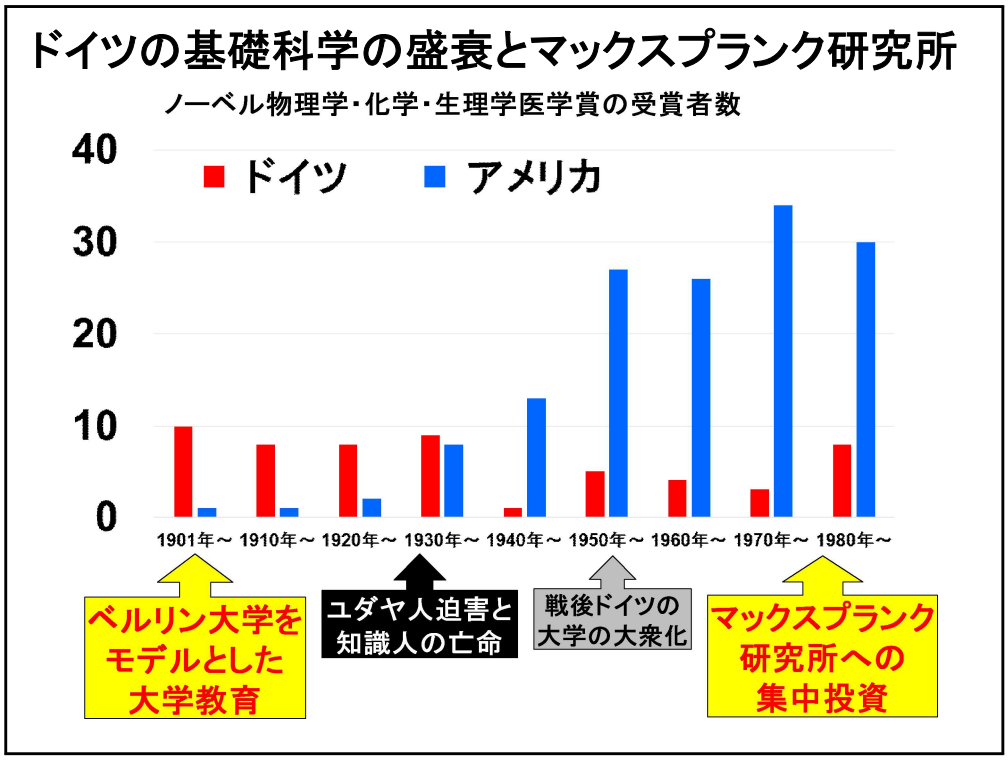
部門　department	期間	名前	研究内容
実験心理学	1917 ～ 1926	クレペリン	精神障害の診断体系の創始者
組織病理学第 1	1917 ～ 1919	ニッスル	神経解剖学　ニッスル染色法の発明
組織病理学第 2	1917 ～ 1935	シュピールマイヤー	神経組織病理学の創始者
系統学･人口統計学	1917 ～ 1945 1946 ～ 1952	リューディン	精神障害の遺伝の研究
組織トポグラフィ	1917 ～ 1918	ブロードマン	ブロードマンの脳地図で有名な神経学者
血清学	1917 ～ 1935	プラウト	現代の神経免疫学のパイオニア
実験心理学	1928 ～ 1931	ランゲ	犯罪の遺伝の研究者。ナチスの断種法に関わる
スピロヘータ研究	1928 ～ 1951	ヤーネル	中枢神経系の感染症の基礎と治療の研究
臨床部門	1931 ～ 1946	クルト・シュナイダー	臨床精神病理学の創始者
神経病理学	1936 ～ 1950	ショルツ	中枢神経系の代謝異常の研究
脳病理学	1954 ～ 1960		

クレペリンは、精神医学ではなく、「実験心理学」の部門の主任となっている。いかにヴント実験心理学の影響が強かったかを示す。ヴントの実験心理学とクレペリンについては、私の「ライプツィヒ大学を歩いてみよう」を参照いただきたい。　http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/
ニッスルやブロードマンは、有名な神経学者であり、今でも名前が残っている。
また、臨床部門のクルト・シュナイダーも著名な精神医学者で、前述のように、臨床精神病理学の創始者である。クルト・シュナイダーは、第二次大戦中のナチスによる優生学政策に嫌悪して、精神医学の研究をやめて、軍医としてすごした。大戦後の 1946 年に、新生ハイデルベルク大学精神科の教授として招かれて、そこで活躍した。

ナチスに協力した研究者：研究所の闇の側面

こうした活躍の一方で、精神医学研究所には闇の側面もあった。
系統学･人口統計学のリューディンは、精神障害の遺伝の研究で有名な学者である。しかし、彼は戦前のナチスを支持し、優生学の思想を持ち、ナチスの人種政策に協力した。エルンスト・リューディン(1874 ～ 1952 年)は、スイス生まれで、チューリヒのベルクヘルツリ病院でオイゲン・ブロイラーの助手をつとめた。1907 年からミュンヘン大学でクレペリンのもとで助手をつとめた。1917 年に精神医学研究所ができると、この部門の主任を務めた。上の表からわかるように、初代の主任たちの中で、最も長く主任をつとめた。1926 年にクレペリンが亡くなると、実質的なトップとなった。1930 年代からナチスの人種政策「遺伝性疾患子孫防止法」に協力した。1945 年の終戦で、連合軍はリューディンを逮捕し取り調べを受け、「ナチス協力者」であるとされたが、戦争責任の裁判に進むことはなく、1946 年に職場に復帰し、精神医学研究所の主任を続けた。
また、クレペリンの死後、実験心理学部門主任を継いだランゲは、犯罪の遺伝の研究者であったが、ナチスの断種法に関わった。
血清学部門の主任だったプラウとは、ユダヤ人だったために、迫害を受けて、イギリスに亡命した。
こうした研究所の闇の側面については、研究所のホームページでも公開している。

基礎科学の中心はドイツからアメリカへ



前述のように、1954 年にこの研究所はマックスプランクと名称変更したが、その事情は以下のとおりである。

もともとドイツは世界の科学の最先端であった。大学教育の発祥の地は、ドイツのベルリン大学である。1810 年に作られたベルリン大学には、言語学者・哲学者のフンボルトがあらわれて、近代の大学教育のシステムを作り上げた。①純粋学問の追究、②研究と教育の一致、③教授会の自治権という３原則を作ったのは、フンボルトである。②研究と教育の一致とは、大学ではカリキュラムを作って教えるのではなく、教官が研究していることを教えれば、それが教育になるという考え方である。つまりエリート教育の理念である。文科系はゼミナールで教育し、理科系は実験室で教育するというシステムを作ったのはフンボルトである。このようなエリート教育は大成功を収め、1900 年前後のドイツの科学は世界の中心となった。この頃のノーベル賞は、ドイツが独占していた。ドイツの大学システムをモデルとして、アメリカや日本のような新興国は大学を作った。

しかし、ナチスの台頭と第二次世界大戦によって、ドイツの科学は崩壊した。そのかわり、戦後は、アメリカの大学が世界の第一線となった。その理由は、ドイツのユダヤ人の科学者が大挙してアメリカに亡命したこと、アメリカの大学が、フンボルトの思想を取り入れたエリート教育をおこなって成功したことである。

戦後のドイツは、フンボルト流のエリート主義を捨て、平等主義的な教育をおこなったため、大学の大衆化が進み、専門教育のレベルは低下した。その結果、戦後のドイツは基礎科学が遅れてしまい、アメリカに大きく水をあけられた。

このことは、ノーベル賞の受賞者数に明確に現れている。上のグラフに示すように、ノーベル賞の受賞者は、1940 年代には、ドイツとアメリカが逆転した。1940 年代から、世界の科学の主役は、ドイツからアメリカへと交替したのである。

マックス・プランク研究所への集中投資

こうした危機感から、ドイツ政府は、基礎科学を復興せざるを得なくなった。その方法として、莫大な資金をマックス・プランク研究所に投入したのである。大学に資金を投入したのではなく、マックス・プランク研究所に投入した。世界の有能な研究者を集めて、集中的に投資をして、研究体制を整えた。こうして、研究者にとっては夢のような研究所群が完成した。

マックス・プランク研究所とは

マックス・プランク研究所は、もとはカイザー・ヴィルヘルム研究所といい、アインシュタインも所長をつとめた。マックス・プランク（1858 ～ 1947 年）は、1918 年に量子力学でノーベル賞をとった物理学者であり、1930 年にカイザー・ヴィルヘルム研究所の所長となった。しかし、プランクは、ナチスのユダヤ人科学者への処遇に抗議し、辞任した。第二次世界大戦後の 1945 年に、研究所は、プランクを再び所長として招き、彼の名前をとってマックス・プランク研究所と改名した。

マックス・プランク研究所は、ドイツ内外の各地に 83 の研究所を持っている。研究所をまとめているのは、マックス・プランク・ソサエティである。

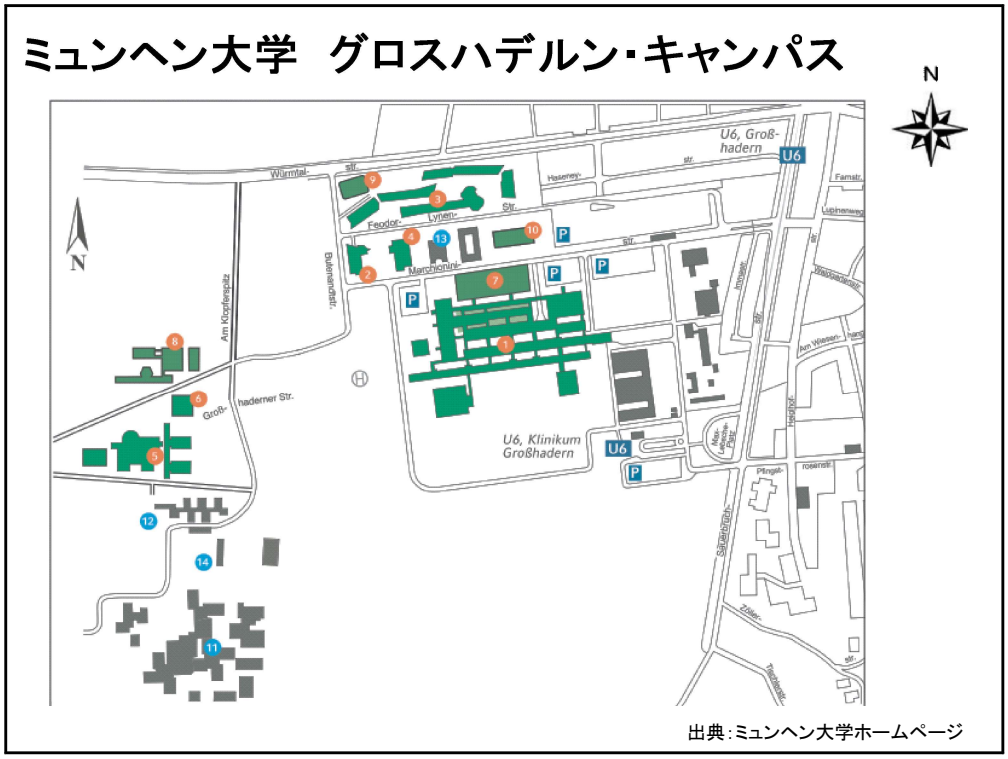
マックス・プランク研究所は、ドイツ中に作られた。ホームページで都市別に検索できる。

●ミュンヘンと近郊にある１０のマックスプランク研究所　　（再掲）

研究所名　　ウェブページ	Ｕバーン駅	住所	取り上げる章
社会法・社会政策研究所 Max Planck Institute for Social Law and Social Policy Webpage: www.mpisoc.mpg.de	Ｕバーン３・６ 大学駅	Amalienstr. 33	１－１
税法・国家財政研究所 Max Planck Institute for Tax Law and Public Finance Webpage: www.tax.mpg.de	Ｕバーン３・６ オデオン広場駅	Marstallplatz 1	１－３
技術革新・競争研究所 Max Planck Institute for Innovation and Competition Webpage: www.ip.mpg.de	Ｕバーン３・６ オデオン広場駅	Marstallplatz 1	１－３
精神医学研究所 Max Planck Institute of Psychiatry Webpage:www.psych.mpg.de/	Ｕバーン３ シャイド広場駅	Kraepelinstr. 2 - 10	１－５
生化学研究所 Max Planck Institute of Biochemistry Webpage:www.biochem.mpg.de	Ｕバーン６ グロスハデルン駅	Am　Klopferspitz 18 Martinsried	１－６
物理学研究所 Max Planck Institute for Physics Webpage: www.mpp.mpg.de	Ｕバーン６号線 Studentenstadt 駅	Föhringer Ring 6	
プラズマ物理学(IPP)、地球外物理学(MPE)、 宇宙物理学(MPA)、量子工学(MPQ)	Ｕバーン６号線 ガーヒング研究センター駅	ガーヒング市	１－７

１－６．グロスハデルン病院駅

ミュンヘン大学病院　グロスハデルン・キャンパス

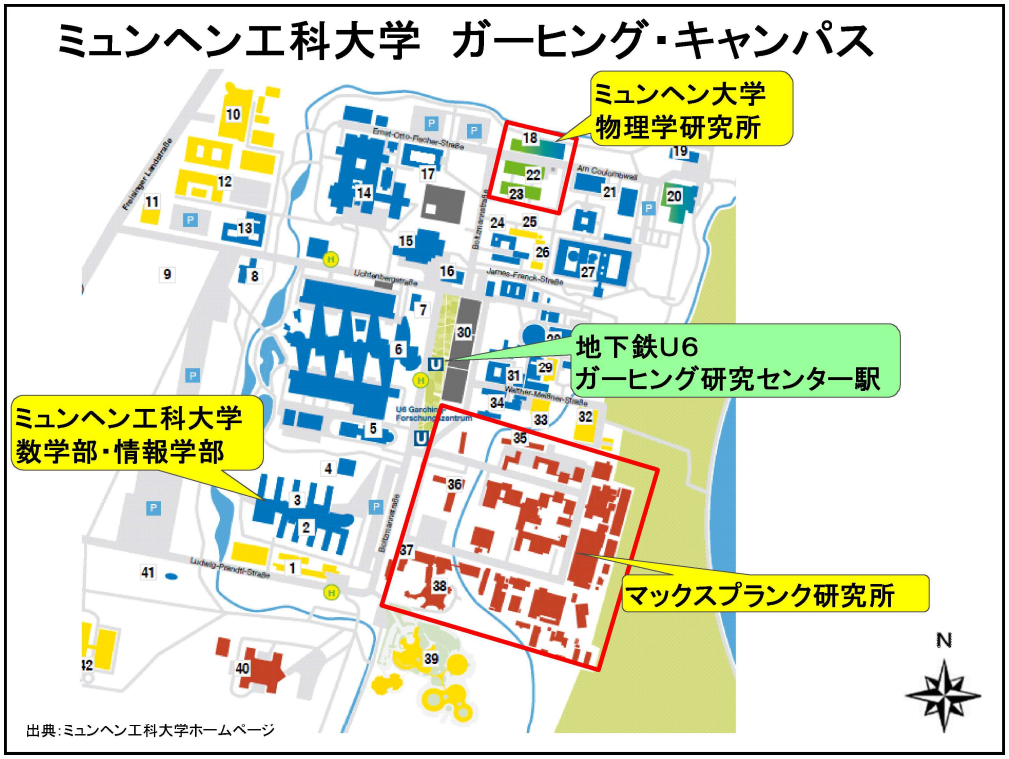


出典:ミュンヘン大学ホームページ

Ｕバーン６号線の南の終点であるグロスハデルン病院駅へ行ってみよう。
ミュンヘン大学の新しい理系キャンパスであるグロスハデルン・キャンパスがある。
医学部の大学病院と、化学・薬学部、生物学部が使っている。
近くには、マックスプランク生化学研究所もある。

１－７　ガーヒング研究センター駅

ガーヒング研究センター



最後に、Uバーン６号線の北の終点であるガーヒング研究センター駅 Garching-Forschungszentrum へ行く。

ここは、ミュンヘン市ではなく、隣のガーヒング市に入る。

ここに、ミュンヘン工科大学（本部は２－１参照）が新たに作ったキャンパスであるが、それだけなく、ミュンヘン大学やマックスプランク研究所や他の学術施設が並び、研究センター地区をなしている。

地下鉄の駅をおりると、ミュンヘン工科大学（ＴＵＭ）が新たに作った理系キャンパスである。数学部や情報学部などのビルが並ぶ。

キャンパスの北側に、ミュンヘン大学の物理学研究所がある。ミュンヘン大学とＴＵＭの共同研究施設も多い。

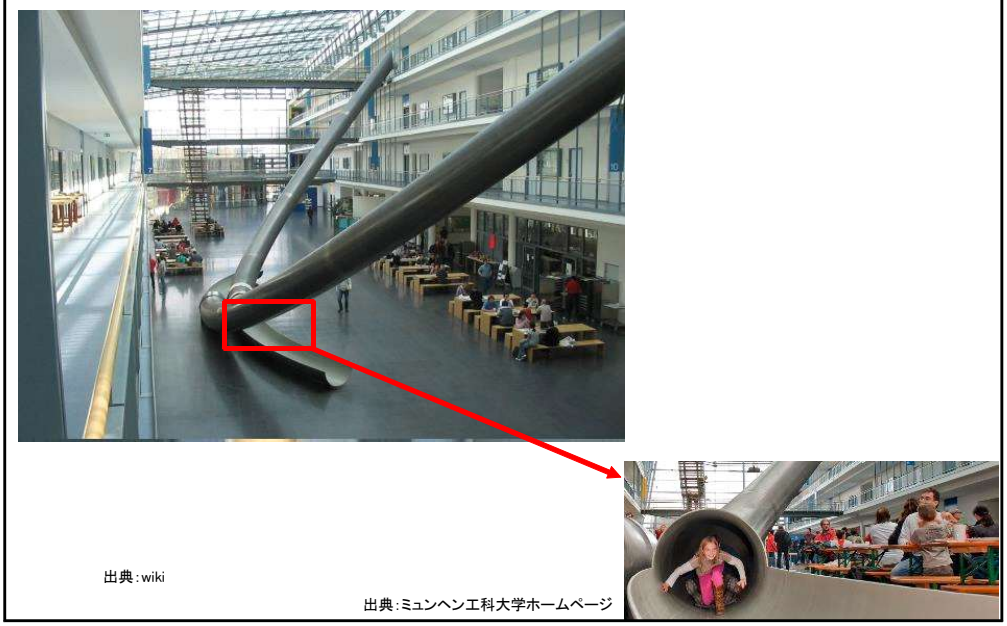
また、キャンパスの南東部に、マックスプランク物理学研究所がある。プラズマ物理学(IPP)、地球外物理学(MPE)、宇宙物理学(MPA)、量子工学(MPQ)の４つの研究所がある。

このほかにも、ヨーロッパ南天天文台本部や、企業の研究所がたくさん集まって、研究都市を形成している。

巨大なすべり台

巨大な滑り台

ミュンヘン工科大学ガーヒング・キャンパス　数学部・情報学部



出典：wiki

出典：ミュンヘン工科大学ホームページ

ミュンヘン工科大学（ＴＵＭ）の数学部・情報学部のビルの中には、巨大なすべり台がある。ビルの中に、ウォータースライダーのような２本のチューブが設置されていて、中を滑り降りることができる。緊急時の避難用とのことだが、遊びの施設だろう。

すべり降りる様子を YouTube で見ることができる。

ミュンヘン大学　グロスハデルン・キャンパス

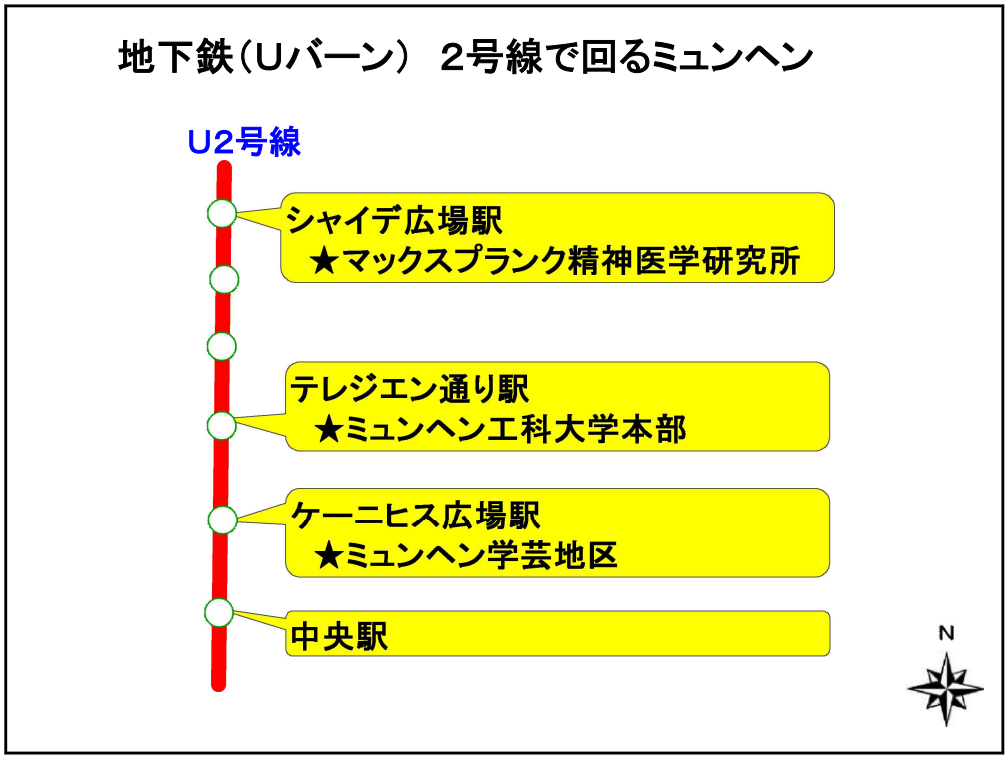
出典：ミュンヘン大学ホームページ

前述のミュンヘン大学のグロスハデルン・キャンパスと、ミュンヘン工科大学のガーヒング・キャンパスは、ともに地下鉄Ｕバーン６号線の南と北の終点である。２つの大学が競って、新しいハイテク研究の拠点を作っていることは頼もしい。

第２章　Ｕバーン　１・２号線に沿って

＜目次＞

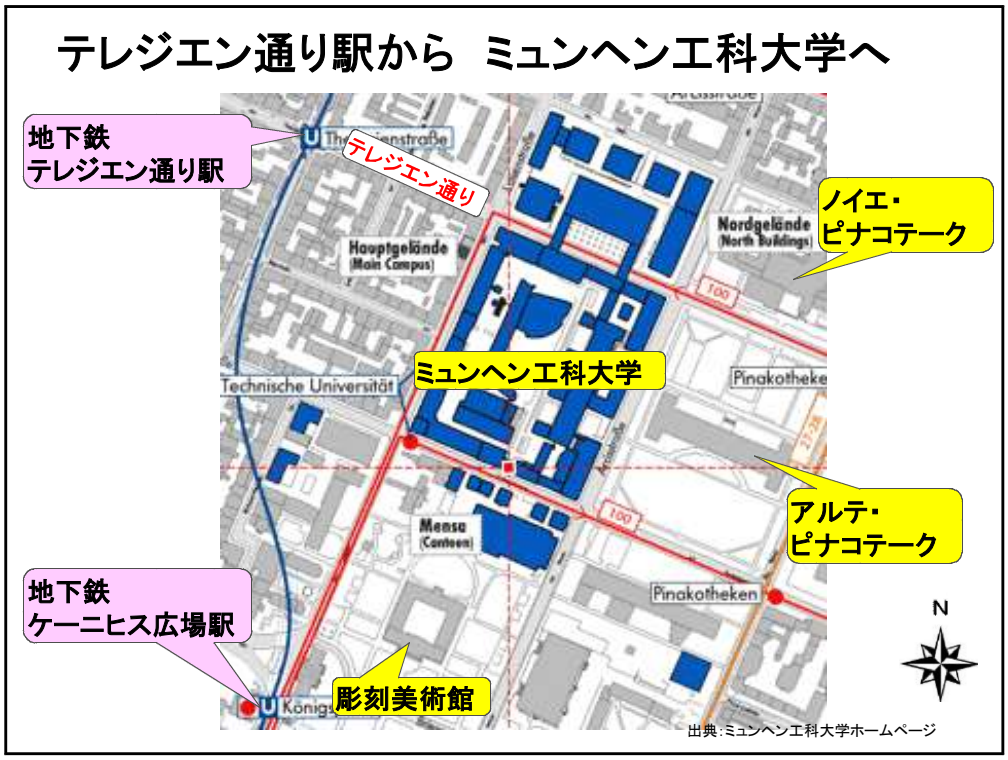
１章	Ｕバーン　３・６号線に沿って １－１　大学駅 １－２　ギゼラ通り駅 １－３　オデオンス広場駅 １－４　ゲーテ広場駅 １－５　シャイデ広場駅 １－６　グロスハデルン病院駅 １－７　ガーヒング研究センター駅
２章	Ｕバーン　１・２号線に沿って ２－１　テレジエン通り駅 ２－２　ケーニヒス広場駅 ２－３　中央駅
３章	Ｕバーン　４・５号線に沿って ３－１　マックス・ウェーバー駅
４章	Ｓバーン　２号線に沿って ４－１　ダッハウ強制収容所



前章でシャイデ広場を回った。
この章では、まず、テレジエン通り駅で降りて、ミュンヘン工科大学本部や美術館群を見る。
次いで、ケーニヒス広場駅で降りてケーニヒス広場の文化施設を見る。
さらに、中央駅で、森鴎外のミュンヘンでの足跡をたどる。

２－１．テレジエン通り駅

テレジエン通り駅から　ミュンヘン工科大学へ



Ｕバーン１・２号線のテレジエン通り駅で降りる。テレジエン通りを東へ行くと、ミュンヘン工科大学がある。テレジエン通り駅と隣のケーニヒス広場駅の間は 500 メートルほどなので、工科大学の南側は、ケーニヒス広場駅のほうが近い。

ミュンヘン工科大学の東側は、美術館地区となっており、アルテ・ピナコテークやノイエ・ピナコテークなど、たくさんの美術館・博物館が並んでいる（後述）。

ミュンヘン工科大学

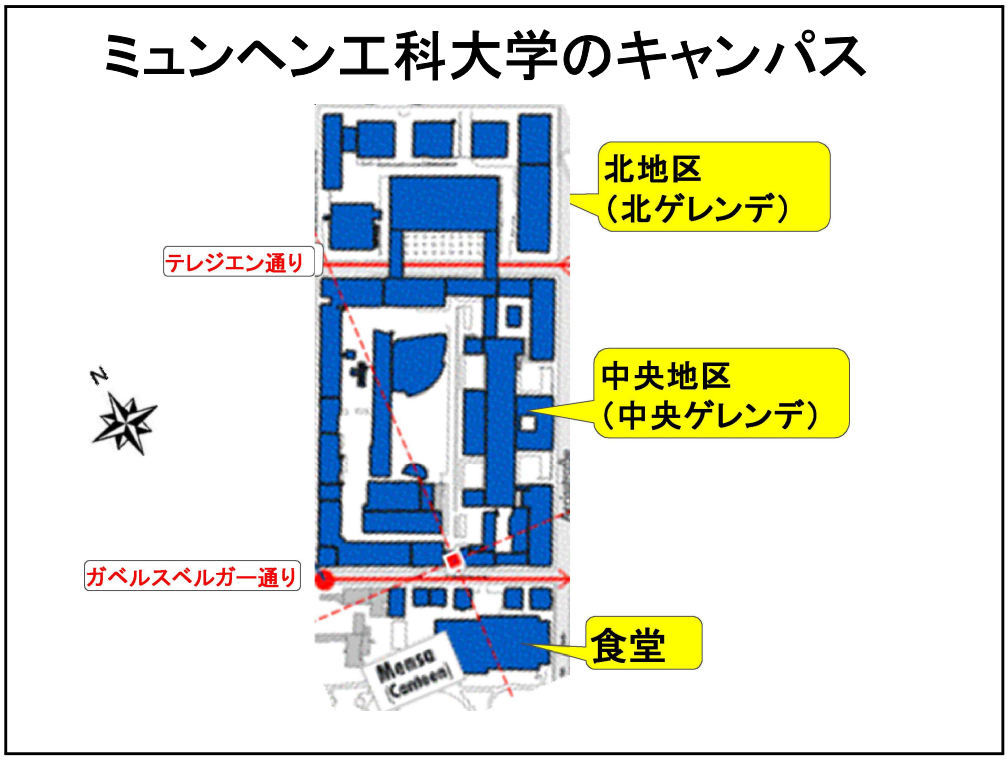
ミュンヘン工科大学 Technische Universität München は、ＴＵＭと略される。

1868 年にルードヴィヒ２世によって創設され、1877 年には王立ミュンヘン高等技術学校となり、1970 年からミュンヘン工科大学となった。

前述のように、地下鉄Ｕ６号線ガーヒング研究センター駅には、新しい巨大キャンパスがある。財政的に豊かな大学である。

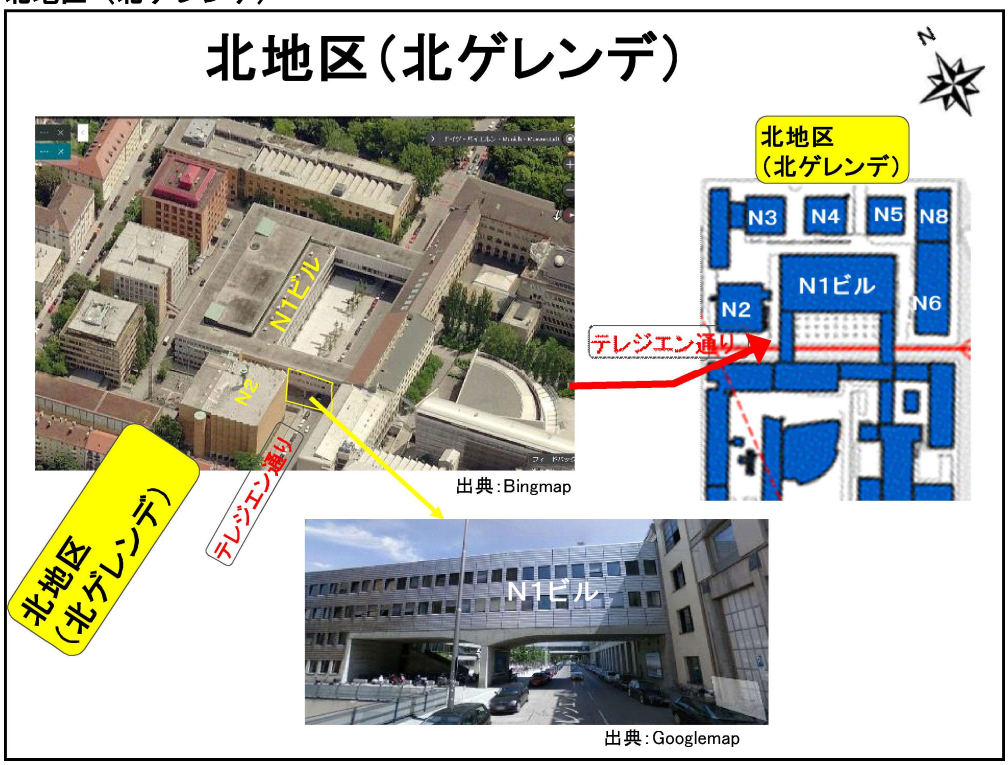
この大学に関係したノーベル賞受賞者は 17 名に上り、ドイツでも有数の理系大学である。その中には、ノーベル文学賞のトーマス・マンも含まれている（後述）。

ミュンヘン工科大学のキャンパス



キャンパスは、３つに分かれる。
テレジエン通りを境に、北側を「北地区（北ゲレンデ)」、南側を「中央地区（中央ゲレンデ)」という。また、中央地区の南側はガベルスベルガー通りで、この通りをはさんで南側に大きな食堂がある。

北地区（北ゲレンデ）



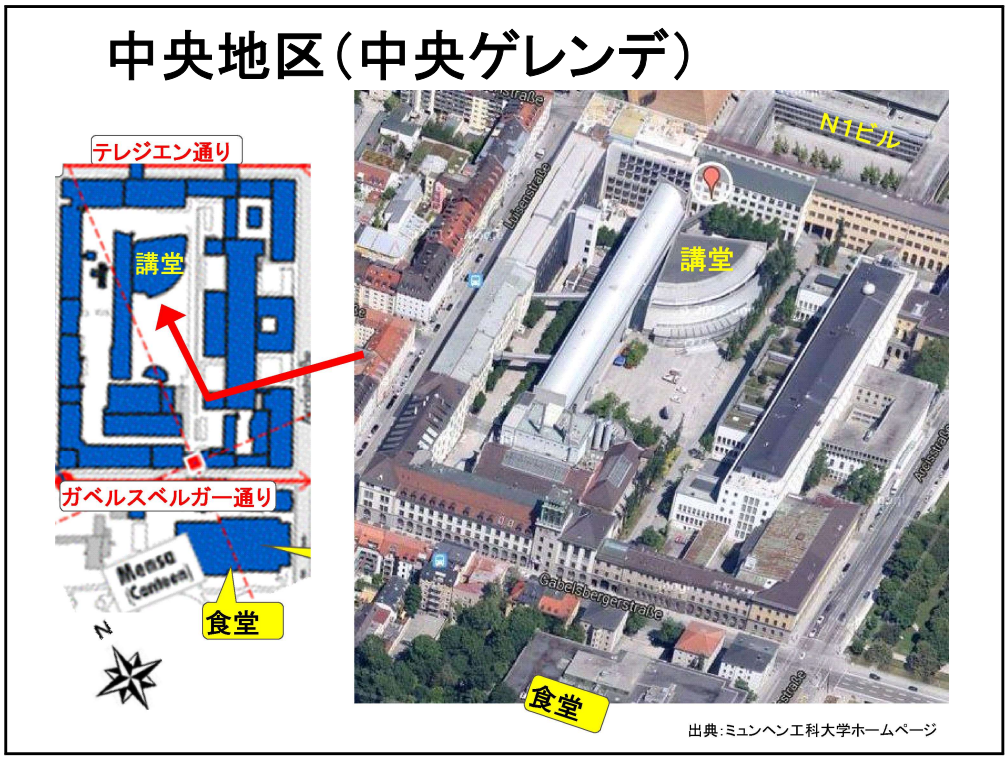
北地区にあるＮ１ビルは、変わった作りになっている。左上の写真のように、Ｎ１ビルは、テレジエン通りをまたいで、南側の建物に接続している。
Ｎ１ビルの西側の入り口を GoogleStreet で見ると（左下の写真)、４階建てのビルの１・２階部分がテレジエン通りのトンネルになっていることがわかる。このトンネルを抜けてテレジエン通りが走り、自動車や歩行者が通っている。上の３・４階部分は、通路になっている。
テレジエン通りを通り、トンネルを抜けると、大学の中庭のようなところに出る。そして、もう一度向かい側のトンネルを出て、大学を通り抜けるようになっている。

大学にしてみると、北地区と中央地区の建物を結ぶ渡り廊下となって便利である。また、Ｎ１ビルの南側が中庭のようになって、大学のスペースという印象が出る。大学の便宜をはかって許可されたのだろう。
北地区には、Ｎ１ビルの他に、０１０２ビルなど、正方形のビルが４本立っている。

北地区（北ゲレンデ）

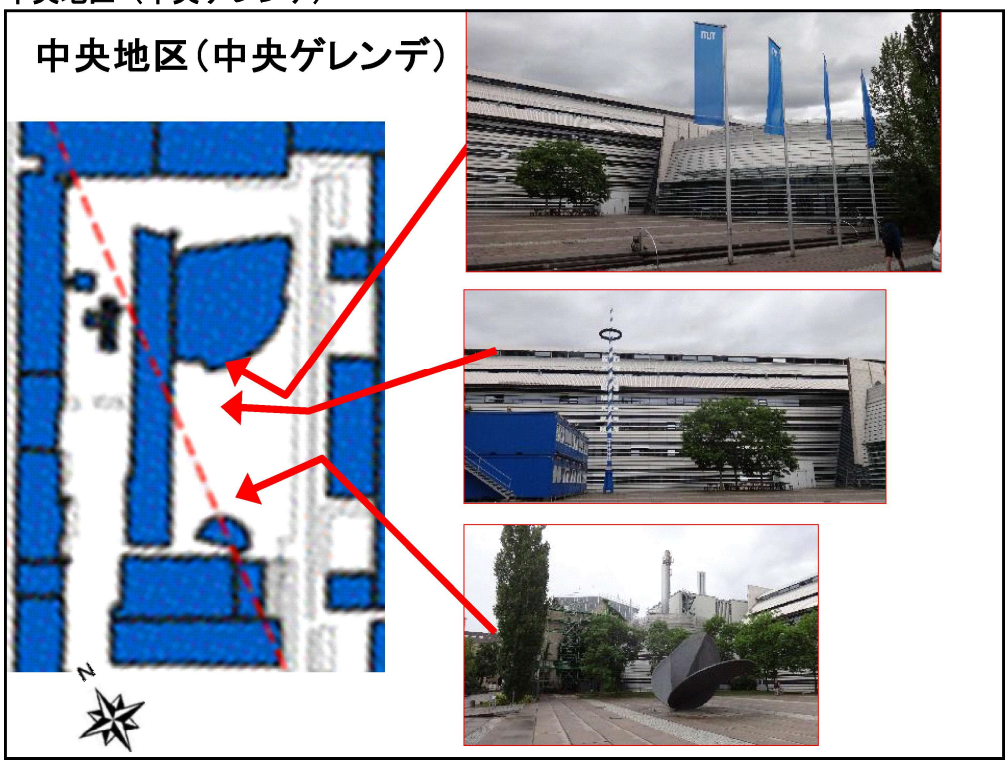
北地区の広場になっている空間を撮ったのが、真ん中下の写真である。テレジエン通りが左側を走っているのだが、まるで大学の中庭のスペースのようになっている。ぐるっと周りを大学の建物が囲んでいるからである。そして、木が植えられ、ベンチも置かれている。
広場の西端には、オームの像が立っている（左下の写真）。ゲオルク・オーム（1789 ～ 1854 年）とあり、電気抵抗のΩのマークが彫ってある。オームは、ミュンヘン大学教授をつとめた電気物理学者である。
Ｎ１ビルの中には自由に入れる。図書館が中にある（右上の写真）。
また、Ｎ１ビルの廊下には、壁にめりこんでい BMW 車のオブジェがあった（右下の写真）。中はバーチャルツアーになっている。

中央地区（中央ゲレンデ）



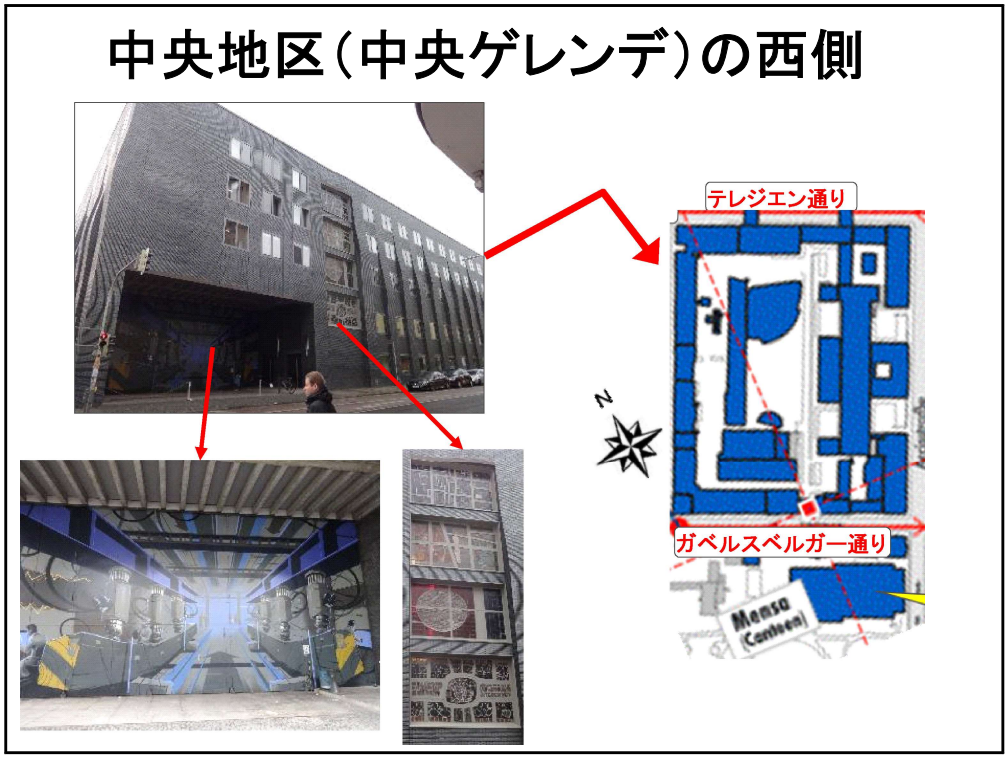
右側は中央地区の俯瞰写真である。周りを壁のようにビルが並び、内側に広い中庭が作られている。
中央に南北に細長いビルがあり、その東側に半円形（扇形）の建物は、ウェルナー・フォン・ジーメンス講堂（Werner-von-Siemens Auditorium）である。
南側には、食堂の建物も一部写っている。

中央地区（中央ゲレンデ）



テレジエン通りの側に門があり、中央地区に自由に入ることができる。
中央地区の中庭は広い。この中庭を東側から連続して撮ったのがこの３枚の写真である。
上の写真は、半円形のウェルナー・フォン・ジーメンス講堂である。
真ん中の写真は、南北に長いビルの正面である。広場の真中に塔が立っている。
下の写真は、広場の南側である。黒いオブジェがあり、背後に煙突のあるビルが写っている。
中央地区の南端には、石造りのアーチ型の古い門があった。

中央地区（中央ゲレンデ）の西側



中央地区の外に出て、西側の絵を写したものである。テレジエン通りを工科大学に歩いて行くと、建物にぶつかる。黒くて、スタイリッシュなビルである。

入口に実験室の絵が描いてある。また、壁にはステンドグラス風のオブジェがはめ込んである。

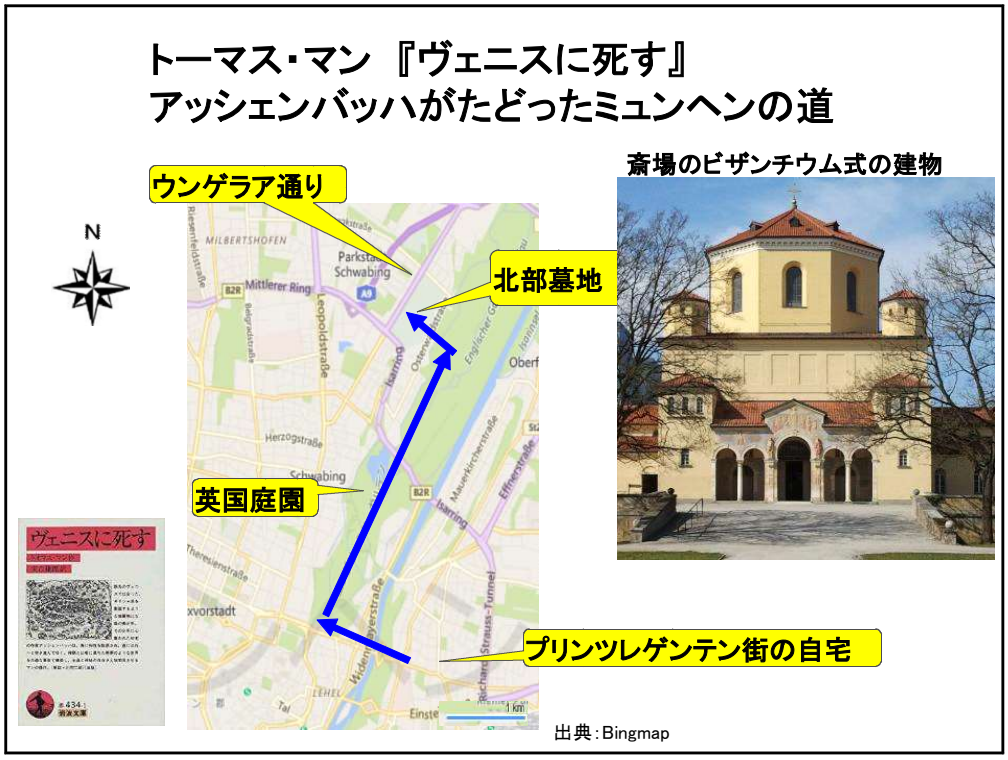
ノーベル賞作家のトーマス・マン

ノーベル賞作家のトーマス・マンは工科大学で聴講生をした

トーマス・マン（1875 ～ 1955 年）は、リューベックの裕福な商家に生まれたが、家が破産したため、1891 年にミュンヘンに移った。働きながらミュンヘン工科大学で聴講生をした。1901 年、26 歳で『ブッデンブローク家の人々』を発表し、ベストセラーとなった。30 歳で、ミュンヘン大学の数学教授の娘で当時学生だったカタリーナ・プリングスハイムと結婚した。彼女はユダヤ人だったため、後に夫婦はナチスに迫害さ

れた。1929 年、54 歳でノーベル文学賞を受賞した。
反ナチスの活動をしたため、1933 年にナチスが政権をとると、スイスに亡命せざるを得なくなった。スイスを旅行中に亡命したため、ミュンヘンの自宅に残してきた日記や資料類をすべて失ったという。1938 年、アメリカに移住し、プリンストン大学客員教授となった。戦後、1952 年にはスイスに移住して、そこで亡くなった。
マンとミュンヘンの結びつきは強い。マンは 16 歳から 58 歳まで 42 年間ミュンヘンに住み、『トニオ・クレーゲル』『ヴェニスに死す』『魔の山』など、代表作のほとんどをここで書いた。もしナチスがいなければミュンヘンで人生を全うしただろう。

トーマス・マン　『ヴェニスに死す』　アッシェンバッハがたどったミュンヘンの道



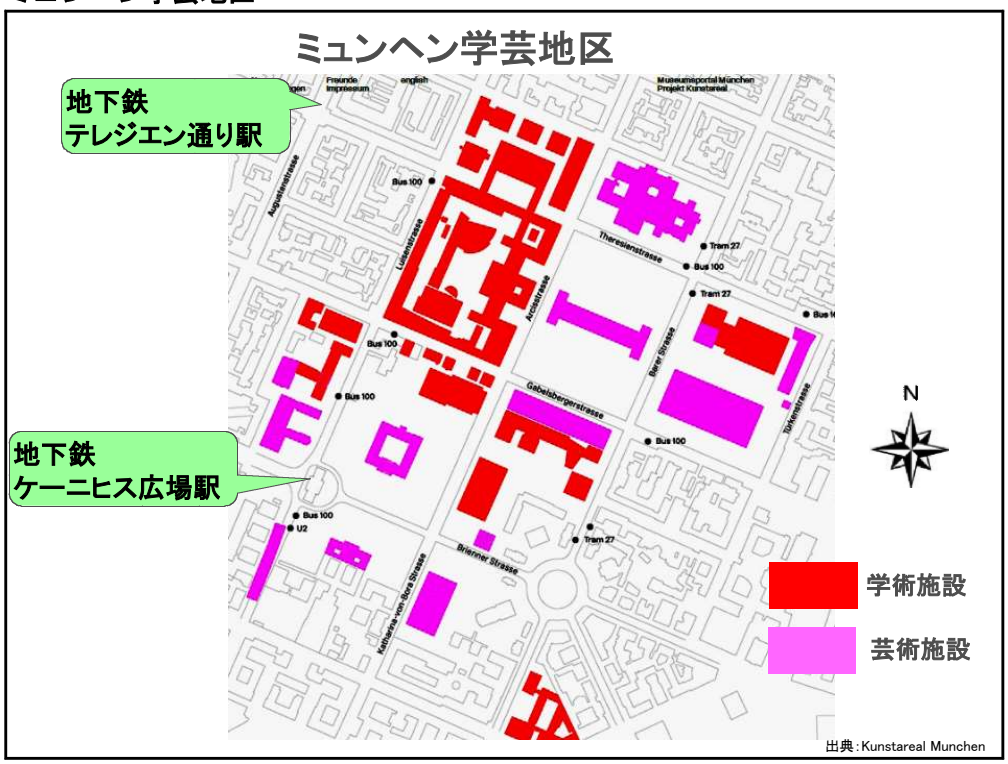
有名な『ヴェニスに死す』の冒頭部分は、ミュンヘンが舞台である。
この作品では、ヴェニスでのドラマと鮮明なイメージに比べて、ミュンヘンの部分は、何のドラマもなく地味なので、なかなかイメージがつかめない。そこで、主人公の動きをミュンヘンの地図にマッピングしてみると、少しは具体的になる。

50 歳の作家グスタアフ・アッシェンバッハは、日常生活と芸術家としての葛藤に疲れている。春のある午後、ミュンヘンのプリンツレゲンテン街にある自宅から、ひとりで、かなり遠くまで散歩に出かけた。英国公園を過ぎ、北部墓地のところまで歩いてきて、帰ろうとして、ウンゲラア通りで電車を待っていた。向かいに北部墓地のビザンチウム式の建物が見えた。ふと見ると、その建物の柱廊の中に、ひとりの男がいた。その男は、遠く異国から来ているような印象があった。その後、アッシェンバッハはその男のことを忘れてしまったのだが、心の中に「旅行欲」とでもいうものが発作的に広がった。目の前で異国のイメージを見た。島と泥地と水がある広い熱帯の沼沢地の光景であった。そして、来た電車に乗り込むと、旅行にでかけようと決心した。
2 週間後、アッシェンバッハはトリエステへ行き、アドリア海のある島に着いた。しかし、その島は自分の求めたイメージではなかった。そして、この島で、自分が求めていたのはヴェニスであったことに気がついく。こうして彼は、結果的に死に至る旅に出ることになる。

主人公の散歩を地図にプロットすると、プリンツレゲンテン街から北部墓地までは 6 キロほどあり、相当な距離を歩いたことがわかる。
ちなみに、ヴェニスについては、拙著『イタリア・アカデミックな歩き方』（有斐閣、2015）のヴェネツィアの章をご参照いただきたい。

２－２．ケーニヒス広場駅

ミュンヘン学芸地区



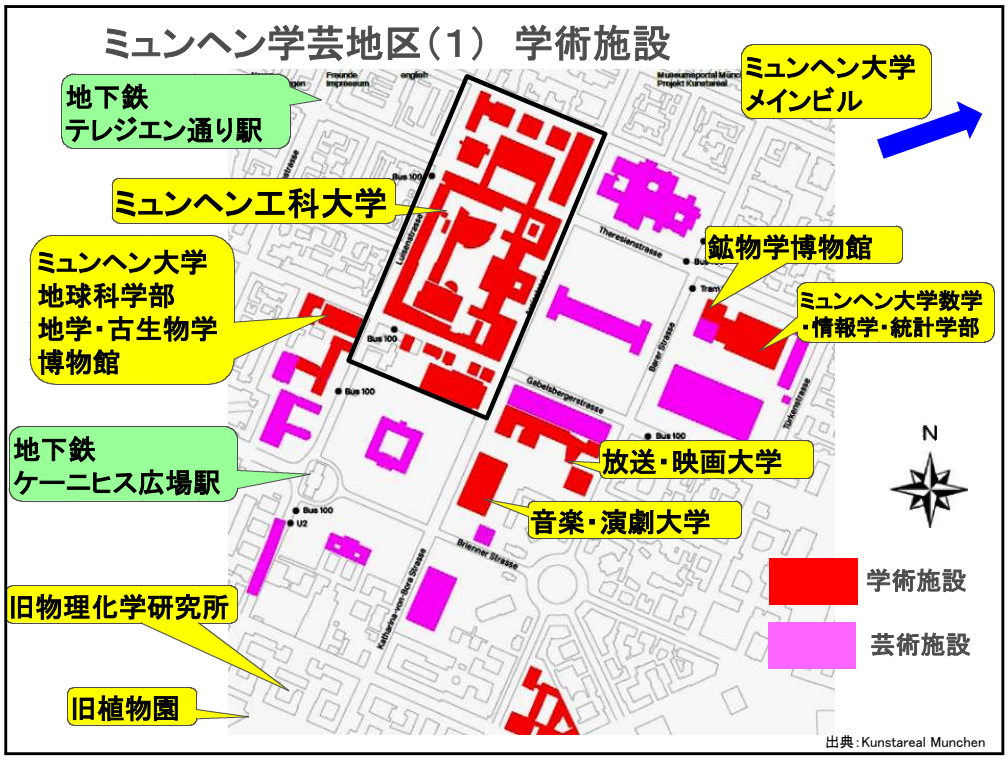
Ｕバーン１・２号線のケーニヒス広場駅で降りる。ここにミュンヘン学芸地区（Kunstareal　München）があり、学問や芸術の施設が集まっている。これは、ルードヴィヒ１世が、ここにケーニヒス広場を作り、その周りに学芸施設を集中させたからである。

この地図で、赤い色が塗ってあるところが学術施設で、ピンク色が塗ってあるところが芸術施設である。世界的に見ても、これだけ学術・芸術施設が集中している地区も珍しい。

地下鉄のケーニヒス広場駅とテレジエン通り駅が西側にある。

以下、学術施設と芸術施設に分けて見ていこう。

ミュンヘン学芸地区（１）　学術施設



まず、学術施設から歩いてみよう。

ミュンヘン工科大学がある。

また、このあたりは、前述のミュンヘン大学のメインビル（１－１参照）と近い。工科大学から 1 キロメートルと離れていない。

工科大学の南西側には、ミュンヘン大学の地球科学部（Luisenstraße　37）と、地学・古生物学の研究室と博物館がある。

また、工科大学の東側には、ミュンヘン大学の数学・情報学・統計学部（Theresienstrasse 39）があり、その隣は州立鉱物学博物館である。

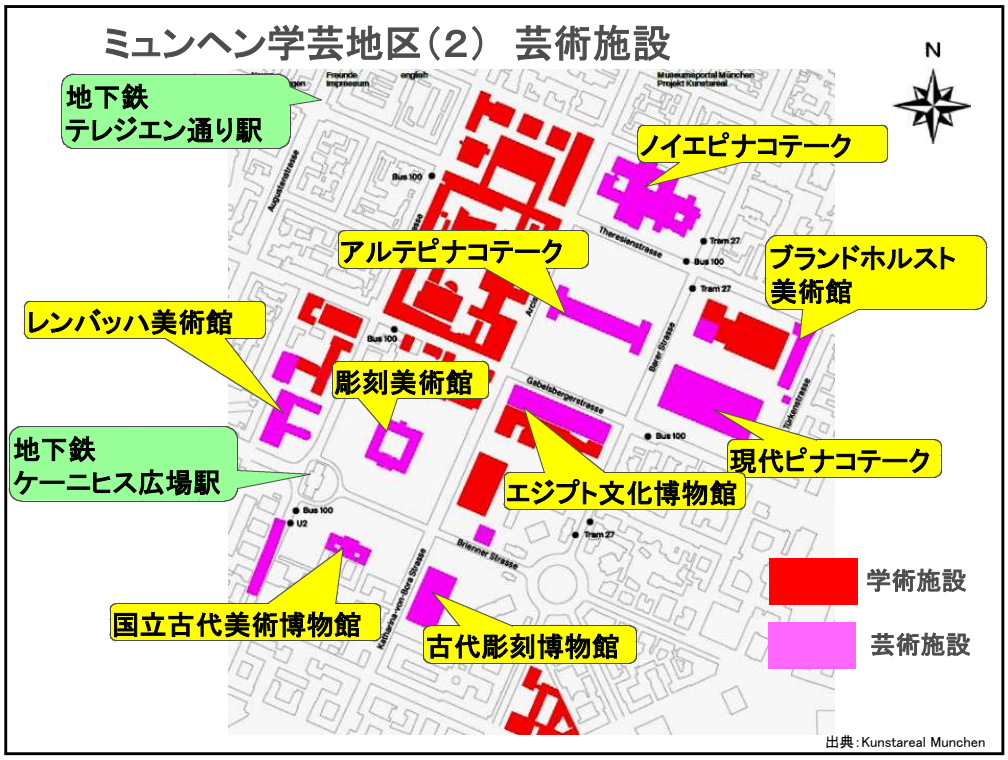
その南には、ミュンヘン放送・映画大学 Hochschule fur Fernsehn und Film muenchen がある。この場所は、以前は数学研究所であった。

その南には、音楽演劇大学の建物がある。

さらに南に下ると、ボニファッツ教会がある。その南向かいには、以前は物理化学研究所があった。今は民間の建物になっている。

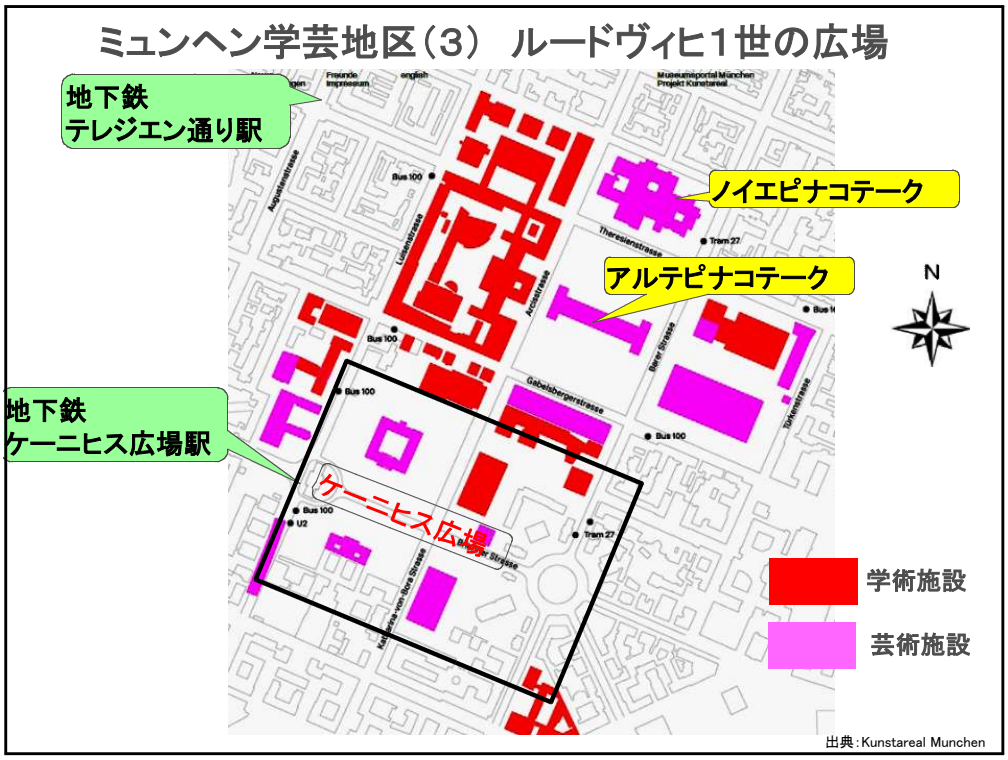
その南には公園があるが、旧植物園である。昔は立派な建物が建っていたが、今は公園になっている。

ミュンヘン学芸地区（２）　芸術施設



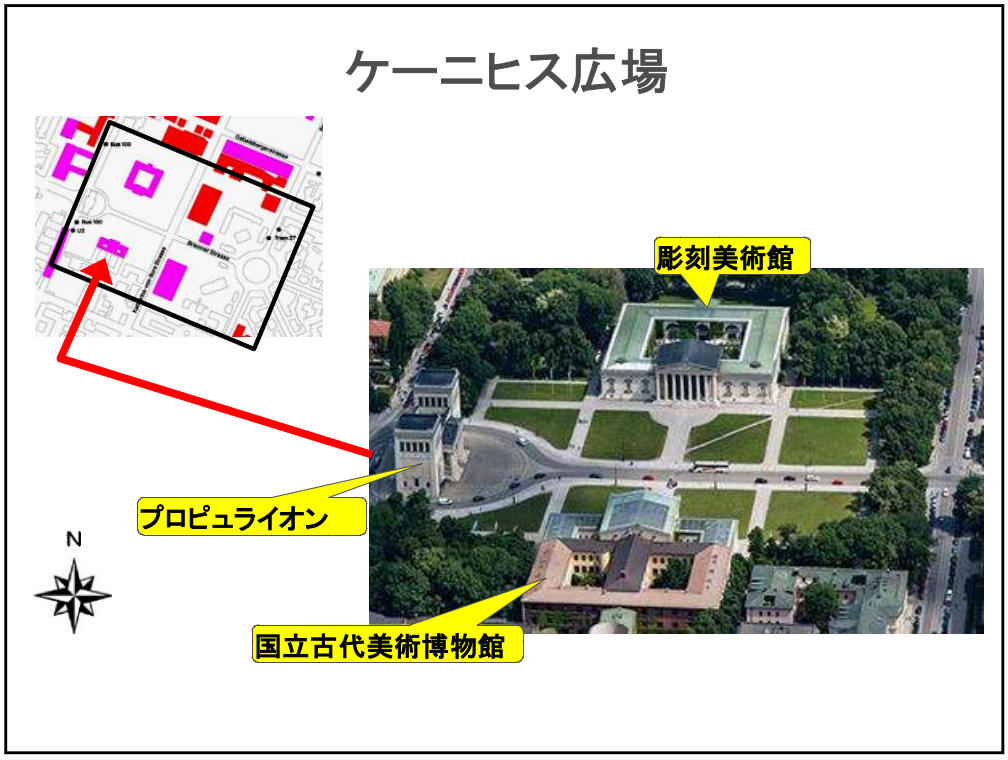
次に、同じ地区の芸術施設を歩いてみよう。
まず、３つのピナコテーク（絵画館）である。
北はノイエピナコテーク（新絵画館）である。
その南がアルテピナコテーク（古絵画館）がある。アルテピナコテークの南側の正面はロンカリ広場という。
その東がピナコテーク・デア・モデルネ（現代絵画館）である。前にカプセル様の部屋がある。
その東に小さなブランドホルスト美術館がある。新しくできた美術館である。
アルテピナコテークの南向かい、ミュンヘン放送・映画大学の西半分はエジプト文化博物館がある。
さらに、ケーニヒス広場を囲んで、いくつかの美術館が建っている。ギリシャ風宮殿が３つ並ぶ。
北が彫刻美術館（グリプトテーク）。対面する南が国立古代美術博物館。その東には、古代彫刻博物館 Museum für Abgüsse Klassischer Bildwerke がある。
さらに、広場の地下鉄駅の西側にはレンバッハ美術館がある。カンディンスキーやクレーなど青騎士グループの絵で著名な美術館である。庭がきれいである。

ミュンヘン学芸地区（３）　ルードヴィヒ１世の広場



地下鉄のケーニヒス広場駅を出ると、前に広場がある。これがケーニヒス広場である。
ケーニヒス広場とは「王の広場」という意味で、ルードヴィヒ１世が作ったものである。
当時のバイエルンは、同じドイツ帝国の一員だったが、勢力のあったプロイセンからは、田舎扱いされた。そこで、バイエルン王のルードヴィヒ１世は、首都ミュンヘンを芸術の都としようとした。古代ギリシャやローマに熱中し、ミュンヘンを「イーザル川のアテネ」を目指して作りかえたのである。その代表がこの学芸地区である。
芸術のためにアルテピナコテークとノイエピナコテークもこの時に建てたのである。

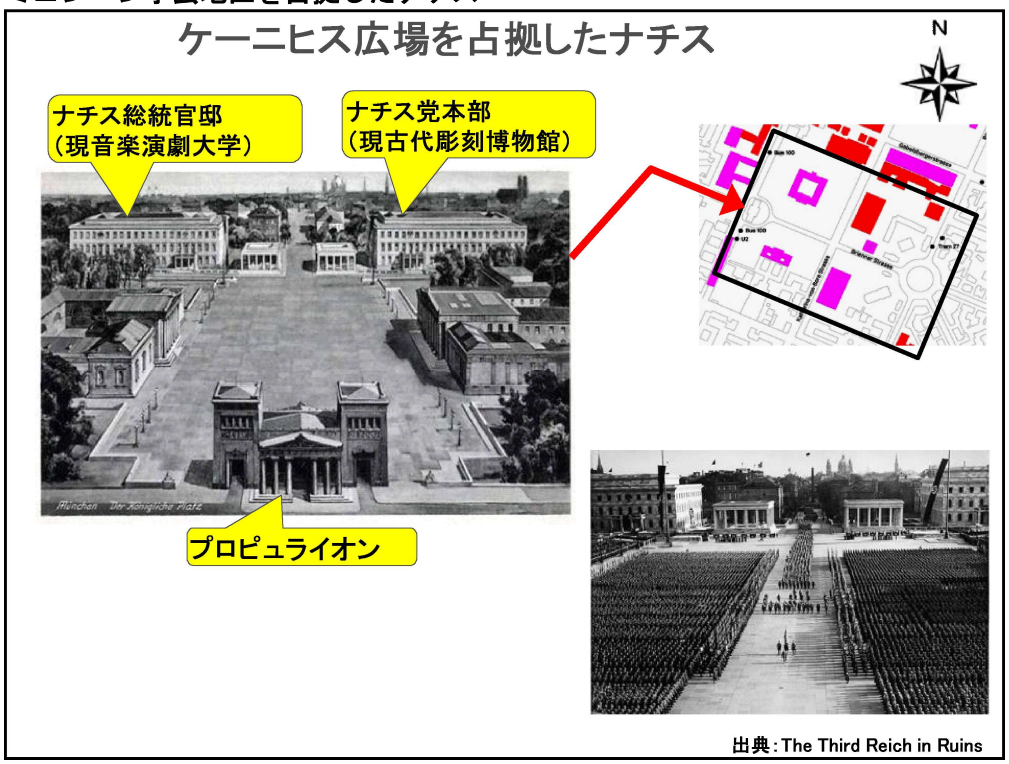
ケーニヒス広場



ケーニヒス広場の空間はすごい。ギリシャ風宮殿が３つ並び、その空間には圧倒される。学芸地区のハイライトである。
ギリシャ風宮殿は、北が彫刻美術館（グリプトテーク）で、対面する南が国立古代美術博物館が使ってい

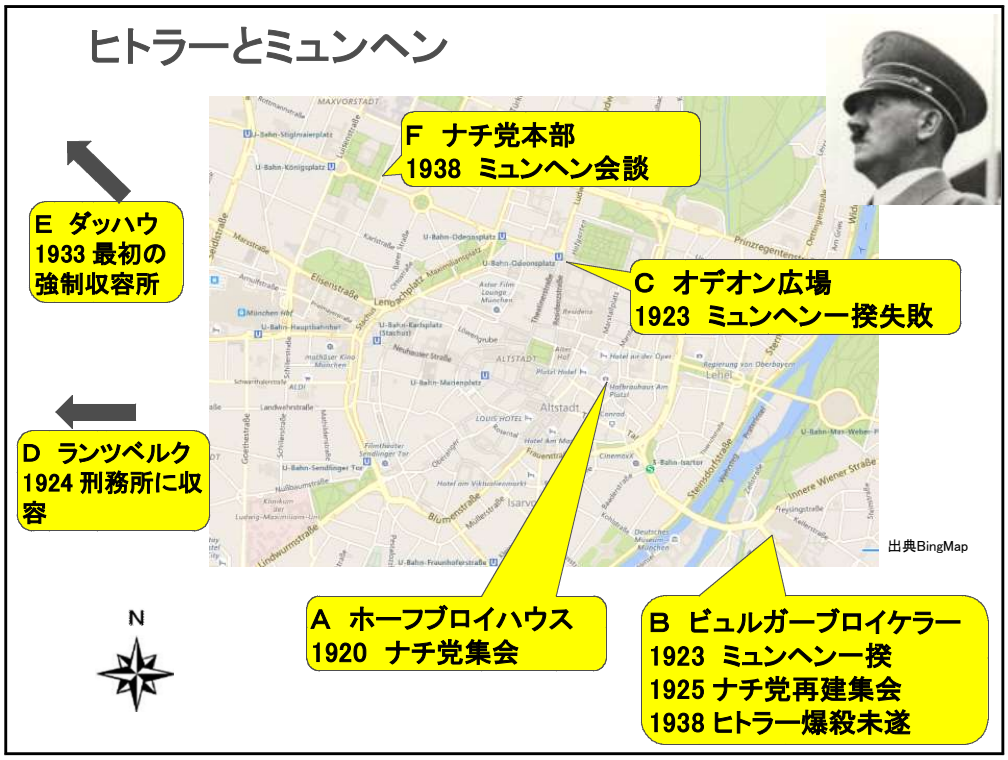
る。その西側に、プロピュライオンという門がある。中は使われていない。プロピュライオンのまわりはラウンドアバウトになっていて、回りは車道なので、歩行者は入りにくい。
「イーザル川のアテネ」の中心的空間といってよい。

ミュンヘン学芸地区を占拠したナチス



1933 年から 1945 年まで、この学芸地区を乗っ取ったのがナチスであった。
ミュンヘンは、ヒトラーの根拠地であった。ナチ党（国民社会主義ドイツ労働者党：ＮＳＤＡＰ）は地方政党だった。1933 年にヒトラーがドイツの政権を掌握してから、ナチスは中央政党となった。今でいえば、大阪維新の会とか､都民ファーストの会といった地方政党が中央に進出して政権をとったようなものである。
この写真は、プロピュライオンから、ナチス時代のケーニヒス広場を見たものである。
正面の２つの建物をナチスが使っていた。左はナチス総統官邸である。現在は、音楽演劇大学が使っている。右はナチス党本部であり、現在は古代彫刻博物館が使っている。
左下の写真は、ナチスがこの広場で集会をおこなっているシーンである。

ヒトラーとミュンヘン



ヒトラーのミュンヘンでの足跡を辿ってみる。

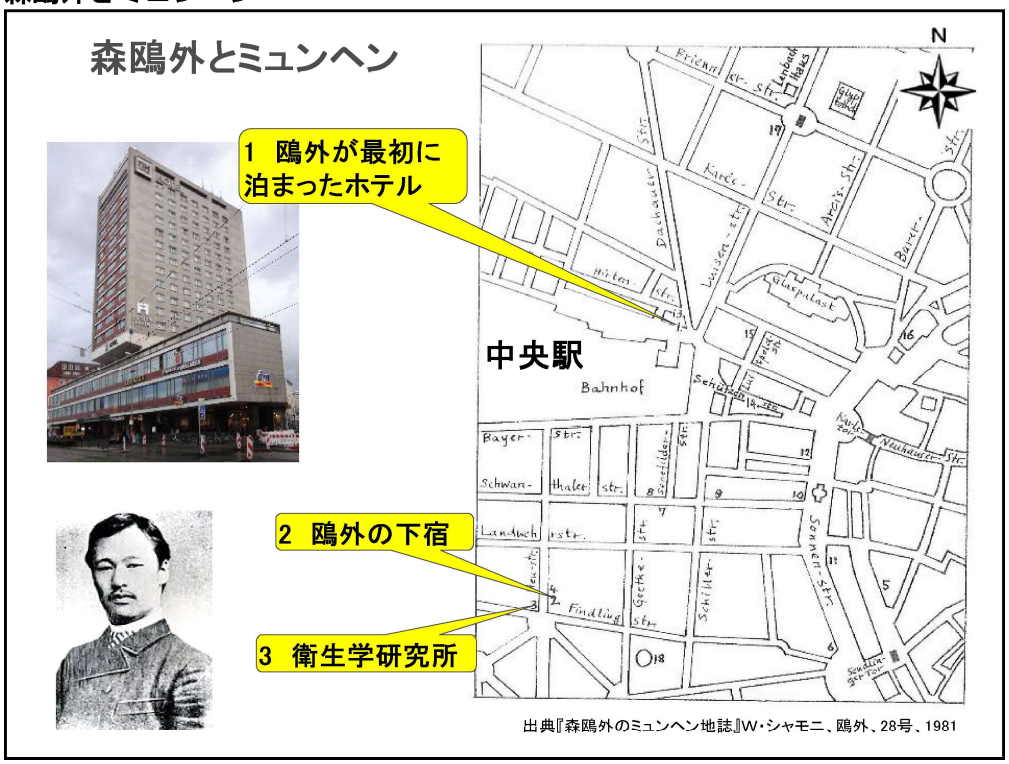
●ヒトラーのミュンヘン関係の事件

年	事件	地図
1920	ナチ党の集会をホーフブロイハウスで開き、党の綱領を発表した	A
1923	ヒトラーはビュルガーブロイケラーを占拠し「ミュンヘン一揆」をおこした オデオン広場へと行進するが、一揆は失敗し、逮捕される	B C
1924	ヒトラー裁判で５年の禁固を言い渡される ランツベルク刑務所に収容されるが、半年ほどで仮釈放となる	D
1925	ビュルガーブロイケラーでナチ党の再建集会を開した	B
1933	ヒトラーがドイツ首相に任命され、政権を掌握した（以後ベルリンへ）	
1933	ヒトラーの命でヒムラーがダッハウに最初の強制収容所を作る	E
1938	ミュンヘン会談をミュンヘンのナチ党本部で開いた	F
1938	ビュルガーブロイケラーでヒトラー暗殺未遂事件がおこる	B

参考文献：石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』
The Third Reich in Ruins http://www.thirdreichruins.com/munich3.htm#ehrentempel
https://topicsfaro.com/warruins4.html

２－３．中央駅

森鴎外とミュンヘン



中央駅のあたりは、1886 年に森鴎外が留学したところである。
この地図は、鴎外が関係した場所である。
出典：W・シャモニ「森鴎外のミュンヘン地誌」鴎外、第 28 号 41-52 頁、1981 年

1886 年に 3 月にミュンヘンに来た鴎外が、最初に泊ったのは Hotel Deutscher Kaiser である。中央駅のすぐ北にあたる。現在は、写真のような高層ビルになっている。
また、鴎外の下宿と勤務先は、中央駅から 500 メートルほど南に行ったところにある（後述）。

森鴎外のドイツ留学

1884(明治 17)年 22 歳	６月　陸軍衛生制度調査および軍陣衛生学研究のためドイツ留学を命じられる	
	８月　横浜から出港	
	10 月　ベルリン着	
	10 月　ライプツィヒへ行き、ライプツィヒ大学のホフマン教授の指導を受ける	ライプツィヒ時代
1885(明治 18)年 23 歳	２月　ドイツ語による「日本兵食論」「日本家屋論」を執筆した	
	10 月　ドレスデンで軍隊衛生学の研究に従事	ドレスデン時代
1886(明治 19)年 24 歳	３月　ミュンヘン大学に入り、ペッテンコーフェル教授のもとで研究する　（～ 1887 年４月）	ミュンヘン時代
1887(明治 20)年 25 歳	４月　ベルリンに移る。北罪柴三郎とともにローベルト・コッホを訪ね、その衛生試験所に入る	ベルリン時代
1888(明治 21)年 26 歳	３月　ベルリンのプロシア近衛歩兵第２連隊に入り、軍隊医務に従事（～６月）	
	７月　ドイツ発。ロンドンやパリなどを訪問しながら帰る ９月　横浜港に到着 陸軍軍医学舎（陸軍軍医学校）教官に任命される	
	９月　ドイツ人女性が来日、弟らが会い、帰国させた （これを扱った『舞姫』を 1890 年に発表）	

森鴎外は、1884 年（明治 17 年）に、22 歳の若さでドイツ留学を命じられた。目的は陸軍衛生制度の調査と軍陣衛生学研究のためであった。
鴎外のドイツ留学は、①ライプツィヒ時代、②ドレスデン時代、③ミュンヘン時代、④ベルリン時代の４

つの時期に分かれる。1884 年にはライプツィヒ大学に行き、1885 年にはドレスデンに行き、1886 年にはミュンヘン大学に入る。1887 年には、ベルリンに移り、のちにプロシアの軍の隊務に携わった。丸 4 年間の留学生活であった。

ライプツィヒ時代の鴎外については、私の『ライプツィヒ大学を歩いてみよう』を参照いただきたい。

http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/

参考文献
『軍医森鴎外のドイツ留学』武智秀夫、思文閣出版、2014
「森鴎外のミュンヘン地誌」W・シャモニ、鴎外第 28 号 41-52 頁、1981 年
『軍医鴎外森林太郎の生涯』浅井卓夫、教育出版センター、1986.

鴎外の下宿と衛生学研究所跡

鴎外の下宿

鴎外は、1886 年 3 月 11 日に、ホイ通り 16 番地 4 階に下宿を決めた。現在のパウル＝ハイゼ通り 35 番地にあたる。この場所は、左の地図に示すように、中央駅から南に 500 メートルほど南に行ったところにある。パウル＝ハイゼ通りとペッテンコーファー通りの交差点のあたりである。

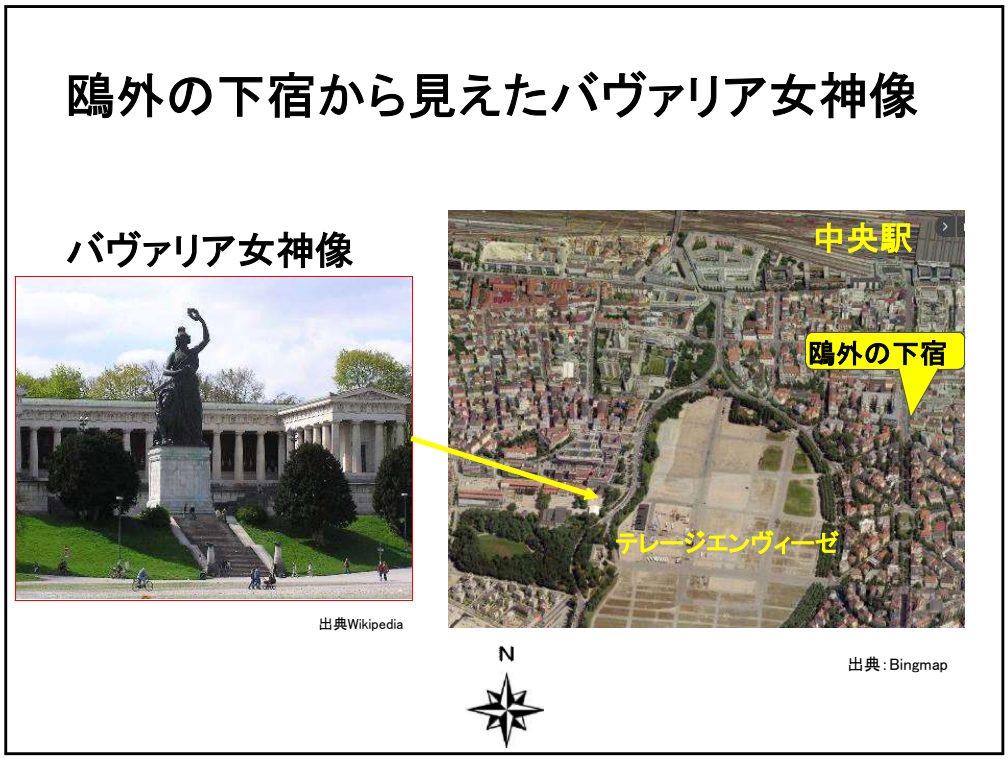
右の地図に示すように、交差点から東北に 2 軒目の建物の 4 階である。

下の写真では、黒い屋根の建物のあたりである。ミュンヘンは大戦中に空襲を受けたので、昔の建物は残っていない。

衛生学研究所

鴎外が通った衛生学研究所は、パウル＝ハイゼ通りをはさんで、西向かいにある。パウル＝ハイゼ通りとペッテンコーファー通りの交差点の北西の角である。今は衛生学研究所はなく、企業のビルになっている。

鴎外の下宿から見えたバヴァリア女神像



鴎外の下宿からは、有名なバヴァリア女神像が見えた。1886 年（明治 19 年）3 月 17 日の『独逸日記』には次のように書いている。

十七日。早起。仕女窓を開き雀を飼ふ。余偶然戸外を望めば、晴日テレジア牧 Theresienwiese の緑を照し、拜焉神女 Bavaria の像半空に屹立す。・・・余初め此家を僦す。曾て此奇觀あるを慮らず。自ら迂濶を笑ふなり

つまり、「朝窓を開けたら、テレジアの草原の向こうにバヴァリア女神像がたっているのが見えた。ここに下宿して 1 週間もたつのに、こんな面白い景観が見えるとは知らなかった。うかつだった」というのである。

鴎外が見たバヴァリア女神像は、1850 年に完成した 18 メートルもある巨大なものである。ルートヴィヒ 1 世が作らせたもので、ギリシャのアテネのアクロポリス神殿にあるような像を作らせたのである。しかし、この像が完成する 2 年前の 1848 年にルートヴィヒ 1 世は退位していた。この像は今でも見ることができる。

テレジアの草原（テレージエンヴィーゼ）は、写真に示すように、広大な草地で、毎年 9 月に開かれるビール祭り（オクトーバーフェス）の会場となる。

鴎外を指導した研究者

ペッテンコーファー教授の波乱の人生

鴎外は、衛生学研究所で、教授ペッテンコーファーのもとで１年間研究した。

マックス・フォン・ペッテンコーファー（Max Josef von Pettenkofer、1818 ～ 1901 年）は、波乱に富んだ人生を生きた人であった。貧しい家に生まれて、身を立てるために薬剤師となった。その後、医学も勉強し、医学者として多くの業績をあげた。ミュンヘン大学は、彼のために、ドイツ初となる衛生学講座を作り、その初代教授として迎えた。そして、「近代衛生学の父」とか「実験衛生学の父」と呼ばれる有名な衛生学者となった。バイエルンを代表する大科学者とたたえられた。前述のように、鴎外の下宿の南側の十通りは、彼をたたえてペッテンコーファー通りと命名された（鴎外の頃は Finding 通りと呼ばれていた）。

ところが、コッホが細菌学を打ち立て一世を風靡すると、ペッテンコーファーの衛生学は時代遅れのように見られ始めた。コッホはコレラ菌を発見すると、ペッテンコーファーはこの細菌はコレラの原因ではないと主張し、みずからコレラ菌を飲んで発病しないことを証明しようとした。結果的に彼はコレラを発病しなかったが、社会はコッホを支持するようになった。ペッテンコーファーは、晩年はうつ病となってしまい、ピストル自殺をとげた。

鴎外はペッテンコーファー教授を敬愛した。最初の孫には、彼の名前をとって森眞章（マックス）と名づけた。しかし、鴎外は、ミュンヘンの後、ベルリンに行き、そこでコッホのもとで研究をした。陸軍からそう命令されてきたのだが、結果的には、コッホとペッテンコーファーの論争において、鴎外は二股をかけたことになる。

ビールの利尿作用の研究

鴎外は、ミュンヘンの衛生学研究所で「ビールの利尿作用」について研究をした。

参考文献：『軍医森鴎外のドイツ留学』武智秀夫、思文閣出版、2014

『軍医鴎外森林太郎の生涯』浅井卓夫、教育出版センター、1986.

ミュンヘン人はとにかくビールを飲む。鴎外はドイツ人のアルコールの強さに驚いていた。例えば、彼がライプツィヒにいた 1885 年６月に同僚の送別会で、ドイツ人の同僚はひとり 25 杯のビールを飲んだと日記に書いている。25 杯とは 12.5 リットルである。鴎外は３杯しか飲めず、ドイツ人にからかわれたという。確かにドイツ人はビールを飲みすぎる。鴎外がミュンヘンでビールの生理学的作用についての研究したのも、こうした体験があったからかもしれない。

また、同じく、ミュンヘン人のビールの飲み過ぎを批判して、アルコールの害について研究したのが前述のクレペリンである。

鴎外の研究を指導したのはレーマンという講師だった。カール・レーマン（Karl Bernhard Lehmann, 1858 ～ 1940 年）のちにヴュルツブルク大学の教授となった。日本人も何人かヴュルツブルク大学で指導を受けた。

鴎外のミュンヘン時代の日本人

鴎外が留学した当時、ミュンヘンに何人かの留学生がいた。

この写真は、丹波敬三がミュンヘンに来たときの記念に、撮ったものらしい。明治 19 年にヨーロッパの一都市にこれだけ多くの日本人留学生がいたことに驚かされる。

岩佐新は医学者であり、横山又次郎は地質学者で後に東京大学教授。濱田玄達も医学者で後に東京大学教授となった。

原田直次郎と鴎外

この写真には、原田直次郎も写っている。前述のように、ミュンヘンで、鴎外は原田直次郎（前述１－１参照）と知り合った。

原田と愛人のマリイの話を聞いて、鴎外は『うたかたの記』を構想した。『うたかたの記』のマリーのモデルは、原田の愛人マリイという。

ルードヴィヒ２世と鴎外

『うたかたの記』は、バイエルン王ルードヴィヒ２世の死の謎解きをしたミステリー小説である。時間も空間も飛び越えた伝奇小説といってもよく、ぶっ飛んだ小説である。当時の人々はあきれたかもしれない。

ルードヴィヒ２世は、狂王、夢想王、メルヘン王などと呼ばれる。ノイシュバンシュタイン城など、ミュンヘンの周辺にたくさんの名城を作った浪費家でもある。彼は、国王を退位させられた直後、侍医の精神科医グッデンとともに水死体で見つかった。事故死とされているが、死の経緯は不明である。作家なら誰しも興味を引かれ、多くの小説（久生十蘭『泡沫の記』など）や映画（ヴィスコンティ『ルートヴィヒ／神々の黄昏』など）によく取り上げられる。鴎外もそうした誘惑に勝てなかったのだろう。この謎解きはあまり良いものとは思えない。

第３章　Ｕバーン　４・５号線に沿って

＜目次＞

１章	Ｕバーン　３・６号線に沿って １－１　大学駅 １－２　ギゼラ通り駅 １－３　オデオンス広場駅 １－４　ゲーテ広場駅 １－５　シャイデ広場駅 １－６　グロスハデルン病院駅 １－７　ガーヒング研究センター駅
２章	Ｕバーン　１・２号線に沿って ２－１　テレジエン通り駅 ２－２　ケーニヒス広場駅 ２－３　中央駅
３章	Ｕバーン　４・５号線に沿って ３－１　マックス・ウェーバー駅
４章	Ｓバーン　２号線に沿って ４－１　ダッハウ強制収容所

３－１．マックス・ウェーバー広場駅

マックス・ウェーバー広場駅（U4、U5）

Ｕバーン４・５号線には、マックス・ウェーバー広場駅がある。有名な社会学者マックス・ウェーバーにちなんだものである。

マックス・ウェーバーの生涯

マックス・ウェーバー(1864 ～ 1920 年)は、ハイデルベルク大学やベルリン大学学び、28 歳でベルリン大学の私講師となった。30 歳でフライブルク大学の教授となり、32 歳でハイデルベルク大学の経済学の教授となった。しかし、あまりがんばりすぎたのと、父親とのトラベルが神経疾患となった。あるいは政治活動がしたくて、大学教員のような仕事がしたくなかったのだとも言われる。

こうして 34 歳で大学の講義を休講とし、39 歳で大学をやめてしまった。それからは、この家で執筆に専念する生活となり、多くの著書を出版した。54 歳になってウィーン大学、55 歳でミュンヘン大学に招かれたが、56 歳でインフルエンザによる肺炎で亡くなった。

マックス・ウェーバーといえば、私は、本に埋もれたまじめな大学教授をイメージしていた。写真を見て

もどこかまじめである。『職業としての学問』（1917 年）など有名な学問論を書いている。しかも、主著が『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904 年）であるから、なおさらまじめにコツコツと研究しているイメージがあった。ウェーバーはこの書の中で、近代ヨーロッパの経済成長と「勤勉さ」の関係について述べている。つまり、プロテスタンティズムの宗教的体系が、「勤勉」や「禁欲」といった職業倫理をかたちづくり、それが経済発展のもとになったという。利潤の追求はいやしい行為ではなく、むしろ善である。こうした内面的な価値観が、禁欲的な職業生活の基本となった。低次の欲求を充足するために人は働くのではなく、内面的な価値を実現するために働くのである。

しかし、実際にはそれほど勤勉な大学教授などではなかった。

ウェーバー・クライス（ウェーバーの輪）

1899 年、35 歳でハイデルベルク大学を辞めてからは、気が向いた時だけ執筆するといううらやましい生活だった。大学の授業や会議などの雑用もない。「ハイデルベルクのリヴィエラ」と呼ばれた豪邸にに住んで、夫人とあちこち外国を旅行している。よほどの金持ちだったに違いない。

毎日のように友人の学者が訪ねてきて話をした（いつ社会学の研究をしていたのだろうと思うくらいである）。大学とは一歩離れた気楽さのためか、ハイデルベルクの大学の知識人たちが集まってきて、サロンを作った。この集まりは「ウェーバー・クライス」（ウェーバーの輪）と呼ばれた。ウェーバーのサロンには、ドイツだけでなく海外からも多くの知識人が集まり、学問史上も珍しいことで、「ハイデルベルクの奇跡」と呼ばれた。ウェーバーのもとに集まった知識人はそうそうたるメンバーである。

哲学者のヴィンテルハント、リッケルト、ラスク。

精神医学のグルーレ、ヤスパース。

社会科学者のイェリネック、トレルチ、ジンメル、ルカーチ、エルンスト・ブロッホ。

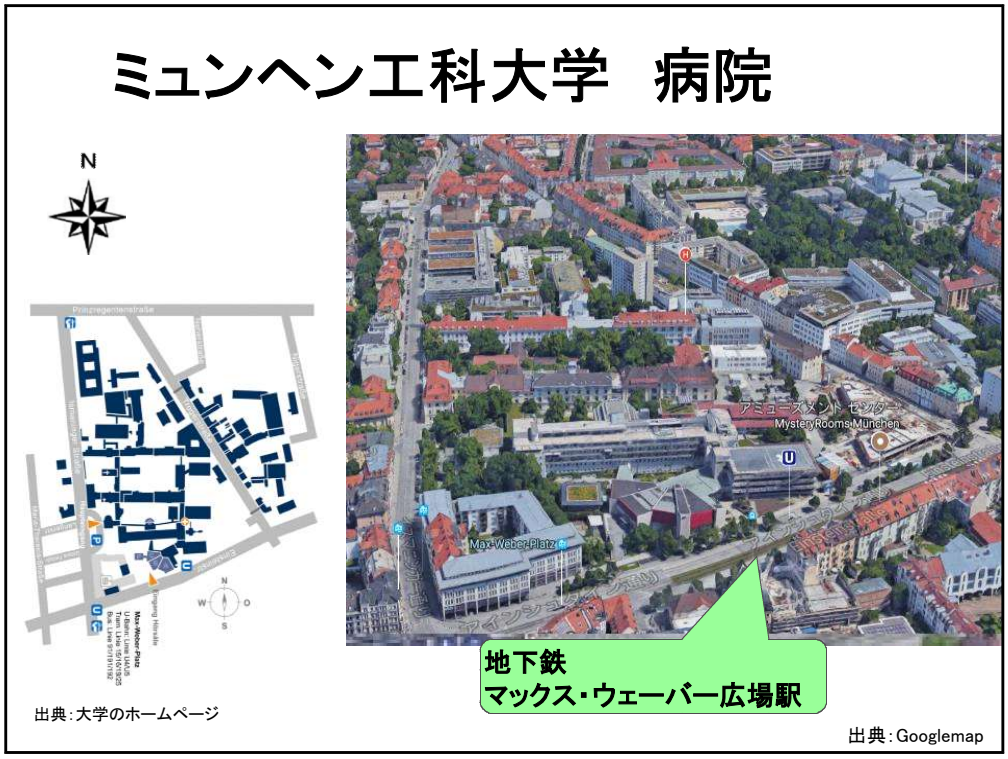
文学者のグンドルフ、ゲオルゲ。

こうしたサロンは、1918 年にウェーバーがウィーン大学に移るまで続いた。

「ウェーバー・クライス」については、私の「ハイデルベルクを歩いてみよう」も参照いただきたい。

http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/

ミュンヘン工科大学病院



マックス・ウェーバー広場駅を出ると、すぐ前に、ミュンヘン工科大学の医学部の大学病院がある。巨大な建物である。ミュンヘン工科大学は医学部も持っている。

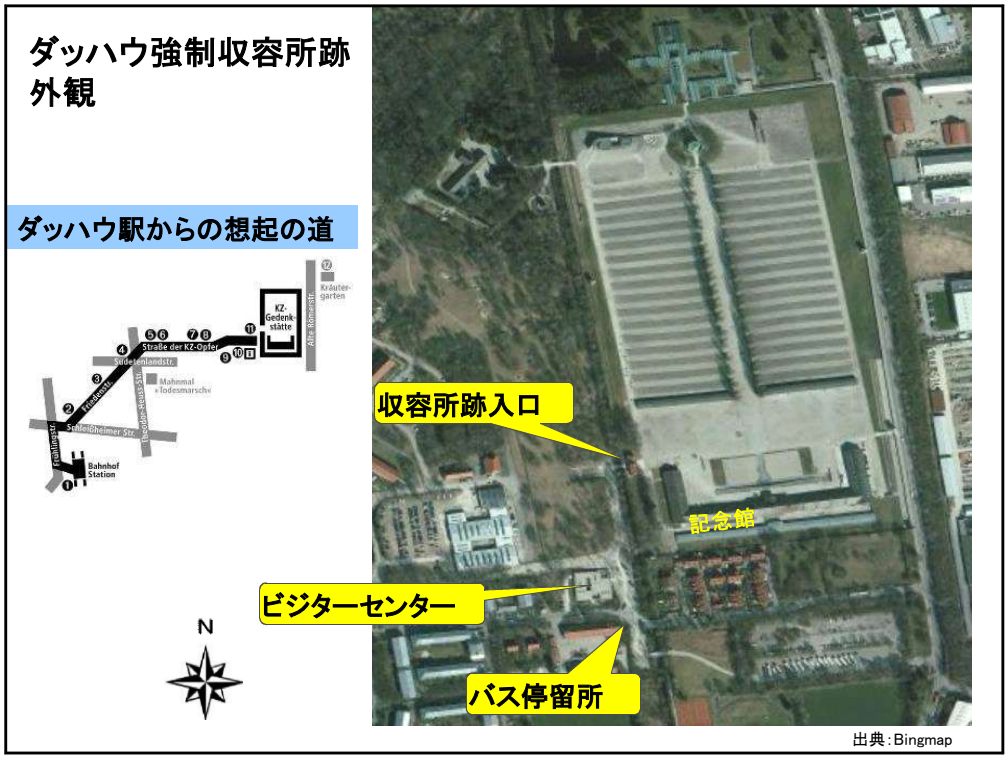
第４章　Ｓバーン　２号線に沿って

＜目次＞

１章	Ｕバーン　３・６号線に沿って １－１　大学駅 １－２　ギゼラ通り駅 １－３　オデオンス広場駅 １－４　ゲーテ広場駅 １－５　シャイデ広場駅 １－６　グロスハデルン病院駅 １－７　ガーヒング研究センター駅
２章	Ｕバーン　１・２号線に沿って ２－１　テレジエン通り駅 ２－２　ケーニヒス広場駅 ２－３　中央駅
３章	Ｕバーン　４・５号線に沿って ３－１　マックス・ウェーバー駅
４章	Ｓバーン　２号線に沿って ４－１　ダッハウ強制収容所跡

４－１．ダッハウ強制収容所跡

ダッハウ強制収容所跡　外観



ミュンヘンに来たからにはダッハウ強制収容所跡を見学したい。ここは見る価値がある。人間や歴史というものが見えてくる。

また、ダッハウは、心理学や精神分析学の歴史から見てもきわめて意義深い。ダッハウ強制収容所に入れられた心理学関係者としてベッテルハイムやフランクルがいる。ある意味で、ダッハウは「心理学を変えた場所」と言える。私にとってはミュンヘンで最も興味深い場所であった。

ダッハウ強制収容所跡には中央駅から１時間ほどで行ける。Ｓバーン２号線で、中央駅から 20 分ほどでダッハウ駅に着く。駅前から Saubachsiedlunk 行き 726 番のバスに乗り、15 分ほどで KZ-Gedenkstätte の停留所に着く。バスは平日は頻繁に出ているが、日曜日には１時間に１～２本と少なくなる。タクシーが便利。

ダッハウ駅から収容所まで歩いて 45 分かかるが、「想起の道」と呼ばれる歴史の散歩道となっている。ダッハウの町の北と東は、湿地帯や沼地が広がり、野生植物が茂り、「バイエルンの小バルビゾン」と呼ばれ、画家たちが絵を描きに来る場所だった。

写真に示すように、バス停のすぐ前にビジターセンターがある。ここにはカフェ、トイレ、書店などがあり、オーディオガイドも貸している。時間があれば、オーディオガイドを借りるか、ガイド付きツアーに参加するのがよい。
そこから北に少し行くと、収容所の入口がある（入場無料）。ここから入ると、中は広い敷地が広がっている。南側に記念館がある。

ダッハウ強制収容所の歴史

参考文献

マルセル・リュヒー『ナチ強制・絶滅収容所　18 施設内の生と死』筑摩書房、1998.
ミシェル『ダッハウ強制収容所自由通り』宇京頼三訳、未来社、2016.
ニコ・ロスト『ダッハウ収容所のゲーテ』林功三訳、未来社、1991.
ベッテルハイム『鍛えられた心』丸山修吉訳、法制大学出版局、1975.
ベッテルハイム『生き残ること』高尾利数訳、法制大学出版局、1992.
コーエン『強制収容所における人間行動』清水・高根・田中・本間訳、岩波書店、1957.

ナチス最初の収容所＝モデル収容所

1933 年に、ヒトラーが政権を掌握すると、警視総監代理だったヒムラーが、ダッハウに最初の強制収容所を作った。この地には、第一次大戦中に巨大な弾薬工場が作られたが、使われないままとなっていた。この廃工場を修復して強制収容所が作られた。目的は、共産主義者や社会民主主義者など政治犯を収容するためであった。ソ連の捕虜、フランス人レジスタンスなど、外国人が多く収容された。のちにジプシー、同性愛者、浮浪者、反社会分子なども入れられた。
1939 年には一度撤収され、1940 年に新しい収容所が作られた。南北に長い長方形の敷地に、２列の居住用の建物が並ぶ。周囲は鉄条網で張り巡らされ、高圧電流が流されている。塀には監視塔がたくさん立ち、刑務所のような作りとなった。後に作られた収容所はすべてこの方式で作られたため、ダッハウは「モデル収容所」と呼ばれるようになった。

強制収容所と絶滅収容所

強制収容所には３つの等級があった。

●強制収容所の等級

	１．強制収容所	２．絶滅収容所	３．強制労働収容所
政策	排除のための収容	絶滅手段としての収容	労働を通じての絶滅を狙った収容
年代	1933 ～ 1939 年	1939 ～ 1945 年	1942 ～ 1945 年
特徴	目的は弾圧政策の妨害者を収容し洗脳すること。人格変化の努力を最大限おこなう。	目的はユダヤ人を能率的に皆殺しすること。人格変化の努力はおこなわれない。	目的はドイツ戦時経済に奴隷労働力を提供すること。移動を禁じられたが、比較的生活の幅は許されていた
場所	ダッハウ、ブーヘンヴァルト、ザクセンハウゼンなど	アウシュビッツ、トレブリンカ、マイダネク	各収容所のまわりの強制労働キャンプ（カウフェリンク、テュルクハイム）

出典：マルセル・リュヒー『ナチ強制・絶滅収容所』14 頁、ベッテルハイム『鍛えられた心』113 頁

１）強制収容所

排除のための収容を目的とした収容所である。1933 ～ 1939 年の政策にもとづくものであり、弾圧政策を妨害する政治犯や外国人を収容し、洗脳すことが目的である。人格変化のための過酷な虐待が最大限おこなわれた。最初に作られたダッハウが典型的であり、ドイツ国内に多数作られた。この段階ではまだユダヤ人の絶滅を直接目的としたわけではなかった。

『ナチ強制・絶滅収容所』によると、強制収容所の発案者を自認するのがゲーリングである。彼はボーア戦争でイギリス人が南アフリカに作った強制収容所にヒントを得たという。強制収容所の発案の責任をイギリスに押しつけようとしたのだろうが、政治犯を収容して洗脳する施設はいつの時代にもあったということかもしれない。冷戦下のソ連でも、ポルポト時代のカンボジアでも、今の北朝鮮でも同じような収容所が作られている。

２）絶滅収容所

絶滅手段としての収容を目的としたものである。ユダヤ人を鉄道で大量に運び、そのままガス室に送るという絶対悪の殺人工場である。1939 にドイツがポーランドに侵攻してから作られたもので、悪名高きアウシュビッツやトレブリンカなど、ポーランドにいくつか作られた。ユダヤ人をいかに能率的に皆殺しするかが問題なので、ダッハウのような人格変化のための努力はなされなかった。

３）強制労働収容所

労働を通じての絶滅を狙った収容をおこなった。1942 年から、ナチス政府は、囚人を絶滅させるよりは、

労働力として使った方がよいと方針転換した。つまりドイツ戦時経済に奴隷労働力を提供することが目的であった。したがって、洗脳や絶滅が目的ではないため、前２者に比べて、生活の幅は広かった。各収容所のまわりに作られた強制労働キャンプがこれに当たる。

例えば、ダッハウでは、収容所がいっぱいのため、ダッハウの周辺に 183 カ所の強制労働キャンプが作られた。そちらに４万人が入れられた。彼らは飛行場建設、市内の整地、地下工場の建設などに使われた。後述のように、フランクルが収容されていたのは、ダッハウの強制労働キャンプのひとつであったカウフェリンクとテュルクハイムのキャンプであった。1944 年にはアウシュビッツから撤退してきた 25000 人以上のユダヤ人がこれらの強制労働キャンプに詰め込まれて、半数はキャンプで死亡した。フランクルはその中で生き残った。

ダッハウでおこなわれたこと

強制収容所ではナチスの医師が人体実験をおこなった。ダッハウでは、低気圧、低温などに人がいかに耐えられるかの実験で、被験者の多くは死亡した。戦後、これをおこなった医師たちは死刑となった。

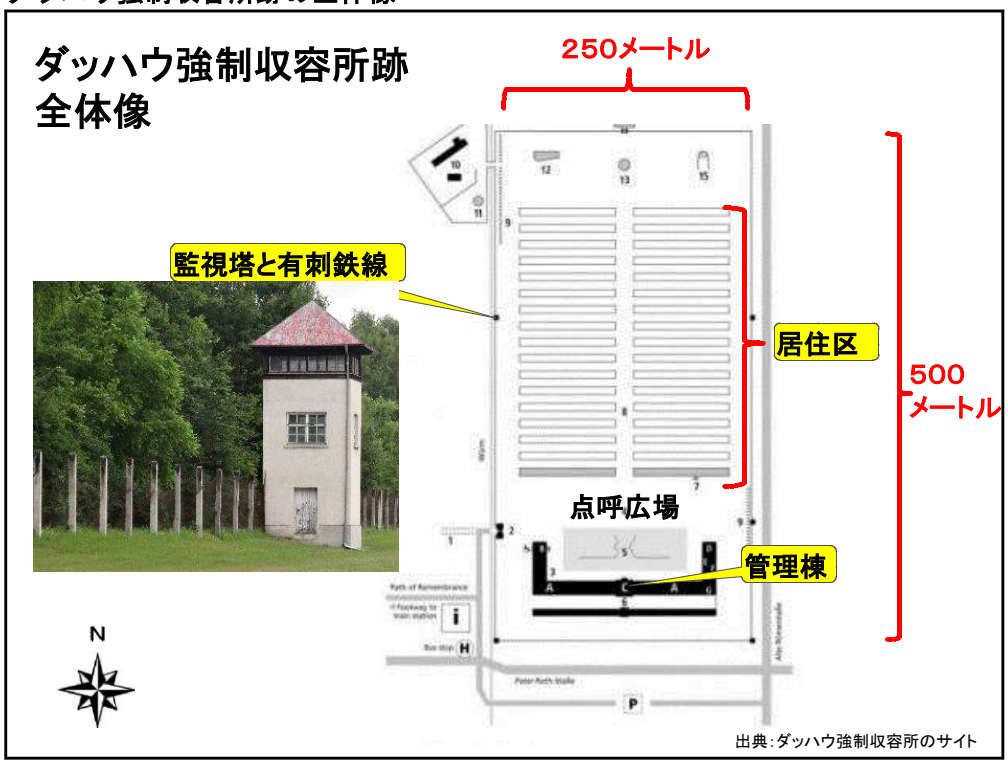
1944 年暮れにはチフスが流行し、多くの死者を出した。

1945 年４月にダッハウは、アメリカ軍によって解放された。せっかく解放されたのに、その後チフスなどで死亡した囚人も多い。解放後２ヶ月で 2500 人が死亡したという。

全体では、1933 年から 1945 年までに、ダッハウ収容所には、23 ヵ国から約 25 万人が収容された。うち７万人は虐待を受けるなどして死亡した。14 万人は他の収容所に移送された。３万 3000 人がアメリカ軍によって解放された。

戦後、裁判がおこなわれ、被告 40 名のうち、36 名が有罪判決を受け、32 名に刑が執行された。

ダッハウ強制収容所跡の全体像



敷地は想像以上に広い。大きさは、タテ 500 メートル×横 250 メートルである（東京ドーム約３個分）。

北側が「居住区」であり、南側に「管理棟」があった。間の広場は「点呼広場」と呼ばれた。

敷地の回りには、９本の監視塔が立っており、つねに見張られていた。敷地の回りは有刺鉄線が張り巡らされ、鉄線には高圧電流が流れていた。この高圧電流が流れる鉄線に飛び込んで自殺する囚人が多く、フランクルによると、こうして自殺することは「鉄条網に向かって走る」と呼ばれていた。

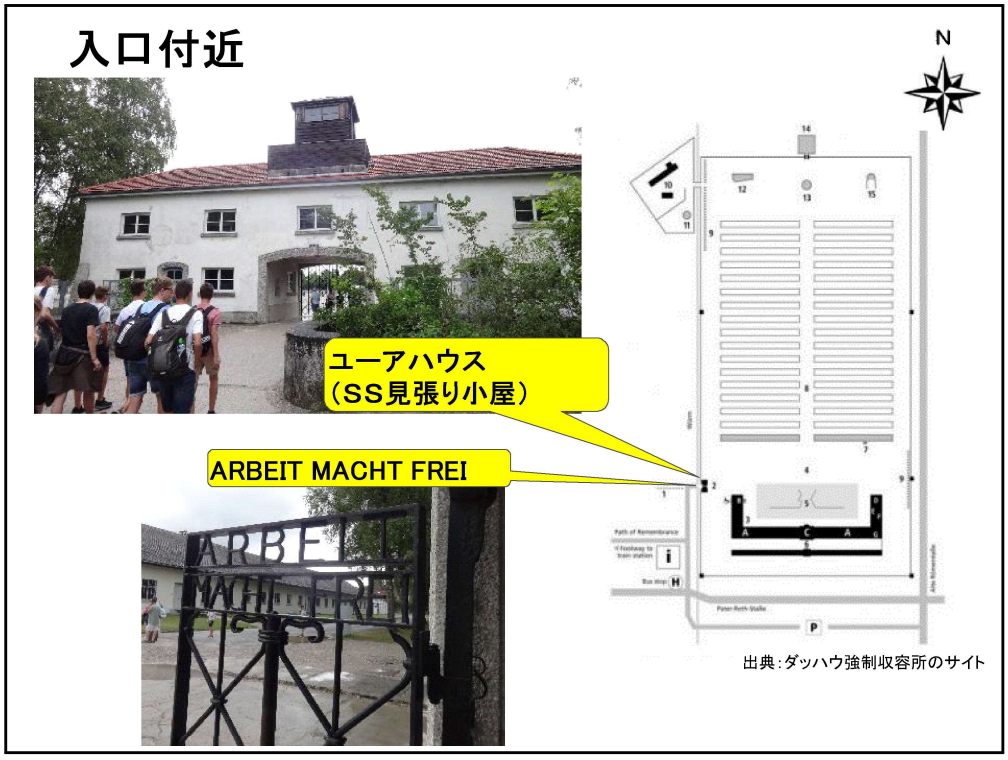
さらに、敷地の周囲には深い堀が彫られており、脱出は難しかった。誰かが脱出すると、発見されるまで、囚人全員が戸外に立たされた。真冬にそのようなことがあり、立たされた囚人のうち 80 人が凍死したこともあると囚人を体験したベッテルハイムは書いている。

ベッテルハイムによると、囚人の環境は次のように過酷なものだった。

囚人の衣料、住居、食事はまったく不十分であり、日曜もなく、一日十七時間ものあいだ炎天、雨、凍るような寒さにさらされ、ひどい栄養不良にもかかわらず、過酷な重労働に従事せねばならなかった。一瞬といえども規制され、監視されていて、プライバシーは全然なく、訪問者、弁護士、牧師にも面会は許されなかった。医療はもともと受ける権利はないものとされており、時には治療してもらえることもあり、またもらえないこともあったが、たとえ治療してもらったとしても、医学の心得のある人からしてもらうことはほ

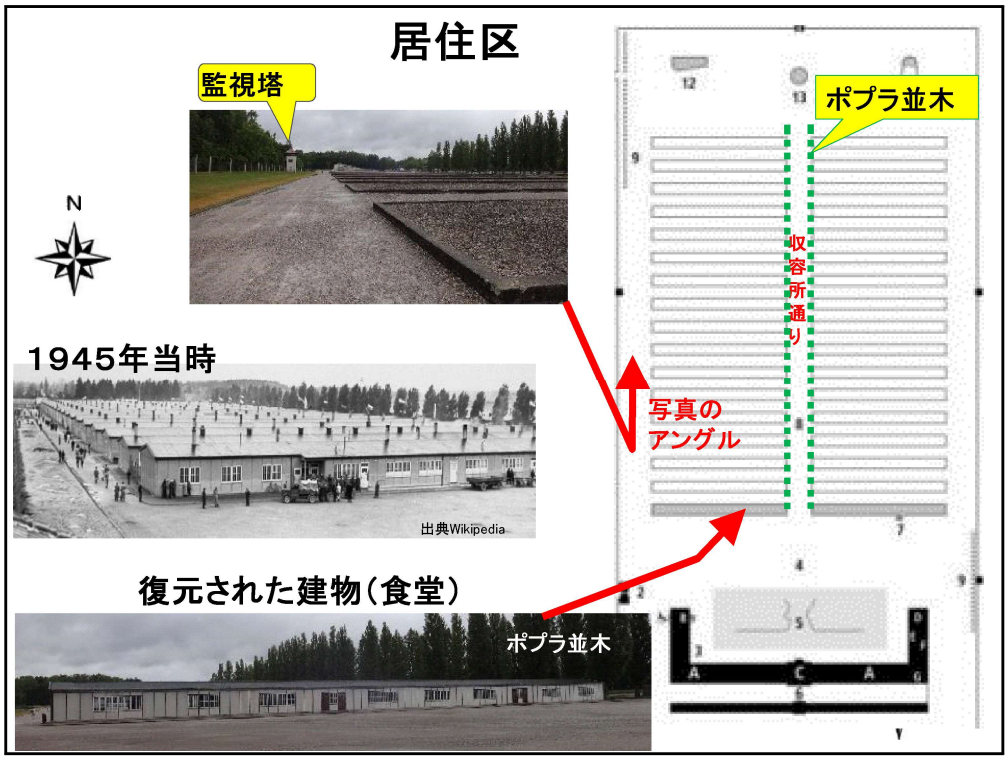
とんどなかった。誰も何故収容所に入れられたか告げられることはなく、いつまで入っていねばならないか知らされることも決してなかった。私かこれらの人々を「極限状況」におかれた人々というのは、すべて以上のような事情による。
ベッテルハイム『鍛えられた心』丸山修吉訳、法制大学出版局、1975．112 頁

入口付近



入口の建物は、ユーアハウス（ＳＳ見張り小屋）と呼ばれる。
写真にあるように、若い人であふれている。私が行ったのは平日の早朝だったが、中高年のツアー客とともに、高校生らしい集団であふれていた。バスが何台もとまっていた。たぶん、ドイツでは学校が生徒たちを見学されることは義務化されているのだろう。
ユーアハウスには、アーケードがあって、これをくぐって敷地に入る。アーケードの内側の黒い扉に、透かし文字が入っている。悪名高い ARBEIT MACHT FREI（働けば自由になれる」という透かし文字である。アウシュヴィッツなどの強制収容所にはどこでも見られる。

居住区



居住区には、１７棟×２列＝３４棟の建物が並んでいた。真ん中を南北に走る道は、収容所通りと呼ばれた。

現在は、34 棟の建物の土台だけが並んでいる（左の上段の写真）。矢印は、写真のアングルを示したものである。左のほうに監視塔が見える。

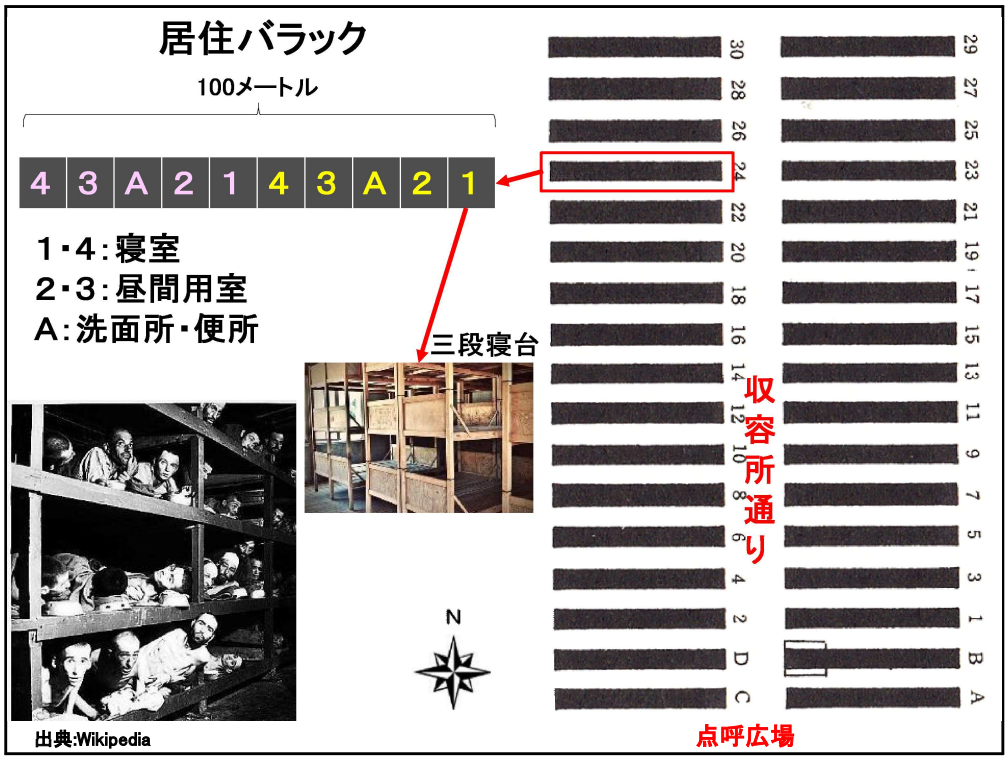
当時は、ここに「居住バラック」と呼ばれる細長い建物がずらっと並んでいたのである（左の中段の写真）。

一番南側のバラックだけは復元されている（左の下段の写真）。この建物は、当時の食堂であった。現在、この建物の中は、３段寝台や便所など、当時の囚人の生活を示す展示スペースとなっている。

なお、この写真の背景にはポプラ並木が見えるが、これは収容所通りの両側に立っている並木である。収容所の外の並木ではなく、収容所の中の並木であることに注意いただきたい（後述）。それだけ収容所の敷地は広いのである。

居住バラック

居住バラック



居住区を拡大してみよう。『ダッハウ収容所のゲーテ』によると、34 棟の居住バラックには、番号がついていた。最も南側の４棟はアルファベットで呼ばれ、南東側のＡ棟とＢ棟は病室であった。Ｂ棟の西側には死体収容室があった。ただし、病人が増えて、２棟で足りなくなると、１・３・５・７と奇数のバラックが病室として使われた。南西側のＣ棟とＤ棟は食堂・事務所・作業場であった。

残りの 30 棟は居住用のバラックである。東側が奇数棟、西側が偶数棟である。南側に近いほど特権階級であり、北側ほどスラム化して不潔だったという。

ひとつの居住バラック棟を拡大したのが左の図である。幅は 100 メートルあり、きわめて長い建物である。

ひとつのバラック棟は、10 個の部屋に区切られている。１２３４Ａと区別されているが、１番と４番は寝室、２番と３番は昼間用室、Ａは洗面所と便所である。入口はＡの部屋のみに設けられていた。

したがって、ひとつのバラック棟には、１番と４番がそれぞれ２つ、計４室の寝室があった。

寝室には木製の３段寝台が置かれていた（真ん中の写真）。ひとつの寝室には約 20 個、１居住バラック棟で 75 個の３段寝台が置かれた。したがって、１居住バラック棟で 75 個×３段＝ 300 人が収容できた。収容所全体としては、300 人× 30 バラック＝ 9000 人が収容できた。これでも過密なのに、大戦末期の 1944 年には、ここに 35000 人が詰め込まれていたというから驚く（『ナチ強制・絶滅収容所』）。定員の４倍が詰め込まれた。

フランクルの『夜と霧』95 頁には、アウシュビッツの３段寝台の記述がある。それによると、一段は２メートル× 2.5 メートル。そこに９人が寝る。上を向いて寝ることができず、横を向いて互いに密着し押し合いながらやっと寝ることができた。左の写真はそうした状態を示している（この写真は解放直後 1945 年 4 月のブーヘンヴァルト強制収容所のもの）。それでもしだいに慣れて眠れるようになったのだという。

『ダッハウ強制収容所自由通り』

『ダッハウ強制収容所自由通り』

ミシュレ

出典Wikipedia

居住バラックの中央にある「収容所通り」を、囚人たちは、皮肉をこめて「自由通り」と呼んでいたという。これをタイトルにしたのがミシェル『ダッハウ強制収容所自由通り』（宇京頼三訳、未来社、2016）である。その表紙が左の写真である。

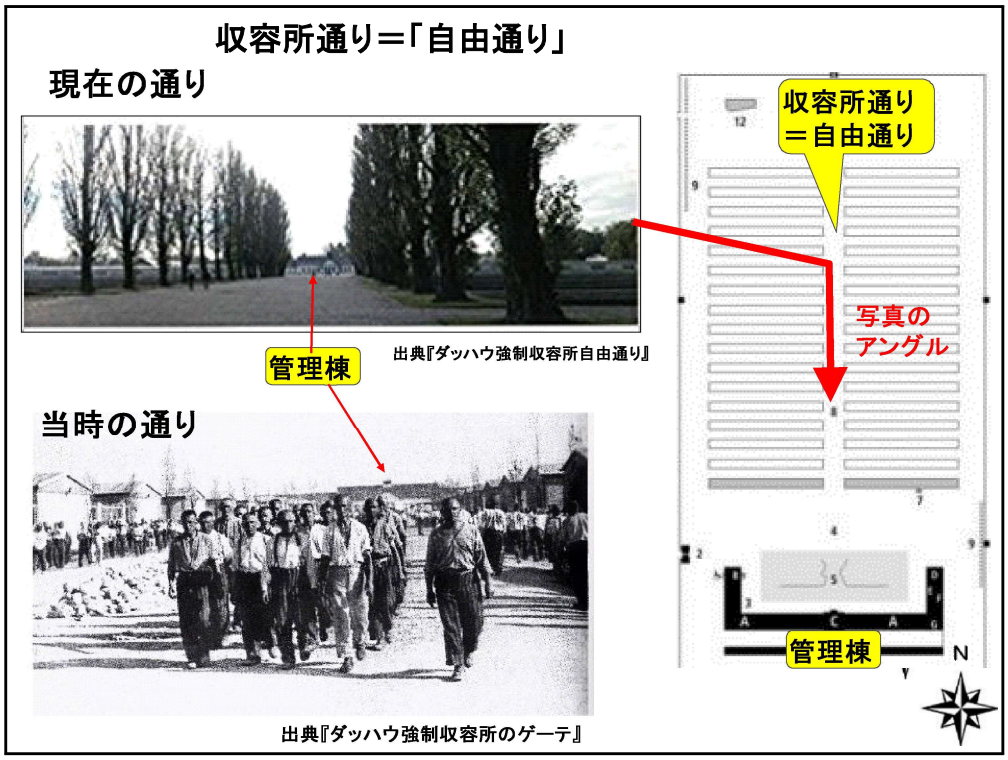
当時、収容所には「自由への道が存在する Es gibt einen Weg zur Freiheit。立派な囚人としての規律徳目を遵守することである」と書かれた板が至るところにかかげられ（本書 230 頁の写真）、囚人たちを不快にさせていた。これをもじって、自由通りと呼んだのである。「強制」収容所の中につけられた「自由」通り。まさにミシェルの皮肉である。

ダッハウ体験とミシュレの政治家人生

エドモン・ミシュレ（1899 ～ 1970 年）は、ユダヤ人ではなく、フランス人のレジスタンス闘士であった。1943 年にフランスでゲシュタポに逮捕され、ダッハウ強制収容所に送られた。毎日仲間が死んでいく状況においても、収容所内では抵抗運動があり、ミシュレたちフランスレジスタンスは、命をかけて、ドイツの産業体制を妨害しようとしたという。ダッハウでの彼らの体験を書いたのが『ダッハウ強制収容所自由通り』である。

２年後の 1945 年に彼らはアメリカ軍によって解放された。フランスの将軍が用意してくれたメルセデスに乗って、パリに戻ったという。その後、ミシュレはドゴール内閣の閣僚となった。抜擢の理由は、「ミシュレがダッハウ収容所で、共産党グループと良好な関係を保ちつつも、重要案件に関してはなにひとつ譲らなかったその「調整・指導能力」に目を付けた」からという（訳者あとがきより）。ミシュレは政治家として活躍し、アンドレ・マルローの後任の文化大臣もつとめた。彼は、フランスで切手に描かれたほど有名人である（右側の写真）。

収容所通り＝「自由通り」



左上の写真は、ミシェル『ダッハウ強制収容所自由通り』の表紙となっているものである。

この写真は、一見すると平凡な写真である。のどかな郊外の田園風景をバックにして、両側にポプラ並木のある道を写しているように見える。並木の後ろは畑が広がっているように見える。この写真の解説には「ダッハウ強制収容所に続く道」と書いてあり、強制収容所の外から門を見た写真のように思える。しかし、この解説だとこの写真の本当の恐ろしさは理解できない。

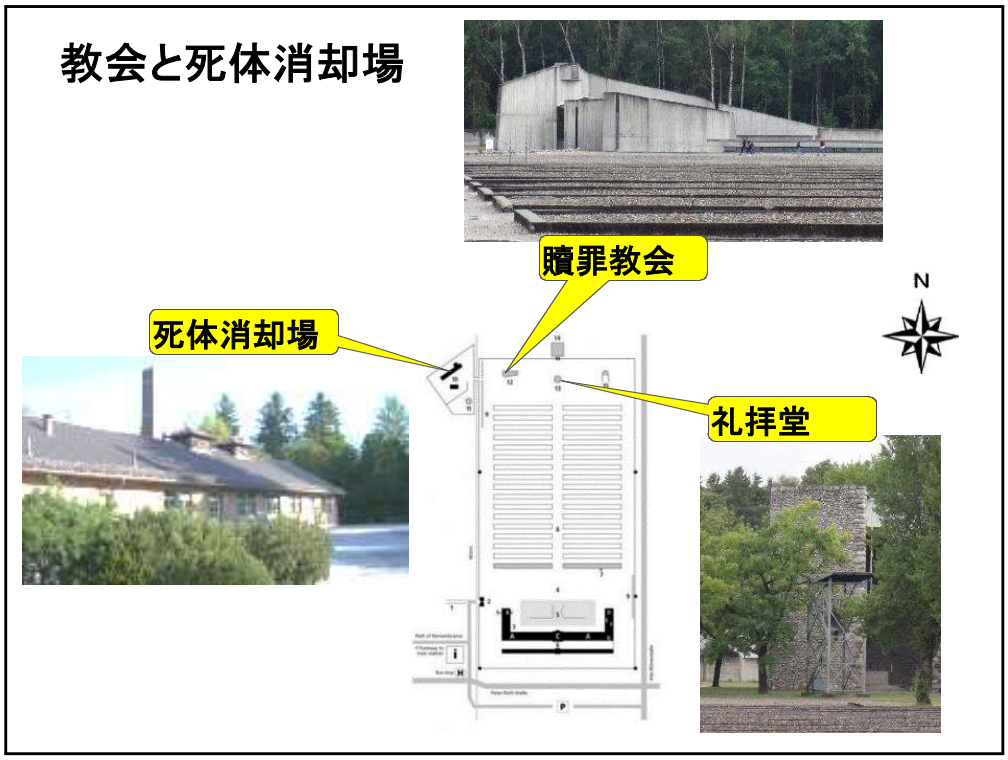
実はこの写真は、収容所内の収容所通りを撮ったものである。右側に写真のアングルを示してある。この写真は本書のタイトル「自由通り」を直接撮ったものである。敷地内はきわめて広大なので、ここが敷地外の農道のように誤解されたのもうなづける。この通りの両側にポプラ並木があることは、これまでの写真からもわかる。両側の畑のように見えるのは、居住棟の土台である。左右の長い建物は、復元された居住棟である。右側に見える白い三角屋根は、収容所入口のユーアハウス（ＳＳ見張り小屋）である。

この写真の正面に見える建物は管理棟である。つまり、この写真は、「自由」通りから「管理」棟を望んでおり、まさに本書の視点を象徴的にあらわしている。

同じアングルで撮った当時の写真を見つけた。左下の写真である（『ダッハウ強制収容所のゲーテ』所収）。中央に管理棟の塔が写っているのでわかる。ポプラ並木はまだ育っていないが、うっすらと見える。両側に居住バラック棟が並んでいる。坊主頭の囚人たちは、タテ縞の囚人ズボンをはき、ボロくきたないシャツを着て、整列して歩かされている。中央と左側の囚人たちはこちらに歩いているが、右側の囚人たちは向こうに歩いている。おそらく点呼広場に招集されたり、そこから帰ってきたところだろう。みんな無表情で疲れたように歩いている。しかし、どんな気持ちでこの通りを歩いているのだろうか。上下の２枚が同じアングルで撮られたものだとは信じられないほどである。

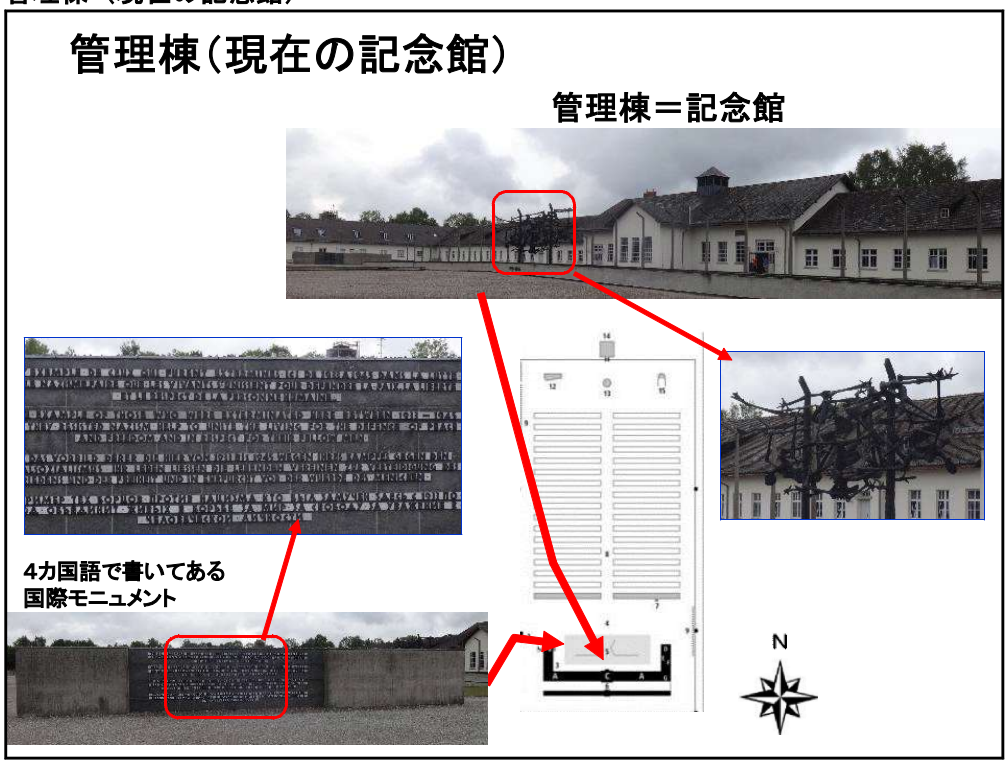
左上の写真は、今はのどかな田園風景のように見える。ところが、左下の写真のように、この道は囚人たちが強制的に行進させられた道であり、死体を回収する荷車が毎日通る死の通りであった（本書 251 頁）。左上の写真は、今と当時の対比を暗示する名ショットと言ってもよいだろう。

教会と死体消却場



敷地の北側には、礼拝堂と贖罪教会の建物がある。
敷地の北西の外には、死体焼却場が作られていた。この中を見学できる。
1942 年にはここにガス室が作られた。ガス室は大量虐殺のためのものであるが、ダッハウではガス室が使われた証拠はないという。ダッハウでは、処刑の方法はおもに絞首刑と銃殺刑であった。

管理棟（現在の記念館）



敷地の南側には、管理棟がある。管理棟の中央には、監視塔と同じ形の四角錐の塔が立っている。
両翼には、浴室、炊事室、洗濯室などがあった。また、最も南側には獄舎があった。
これらの建物は、今は記念館（ミュージアム）として使われている。記念館には、12 才以下は入れない。
管理棟の前の広場には、いくつかのモニュメントが作られている。西側にあるのは、４カ国語で書いてある国際モニュメントである。

ダッハウを訪ねて驚いたこと：　広島・長崎・パールハーバー・南京との比較

世界には第二次世界大戦の記念館がたくさんあり、それらを訪ねてみると、見学者であふれている。しかし、それは被害者意識の記念館だからだ。

第二次大戦の慰霊施設

	国	被害者意識	加害者意識
枢軸国	ドイツ		ダッハウ強制収容所跡
被侵略国	ポーランド	アウシュビッツ・ビルケナウ博物館	
枢軸国	日本	広島平和記念資料館 長崎原爆資料館	
被侵略国	中国	南京大虐殺紀念館	
戦勝国	アメリカ	パールハーバー・アリゾナ記念館	

被害者意識の慰霊施設

この表に示すように、第二次世界大戦の慰霊施設の多くは被害者意識で作られている。

ドイツによる被侵略国ポーランドのアウシュビッツ・ビルケナウ博物館は、ナチスによって虐殺された被害者の慰霊施設である。私はまだ行ったことがないが、毎年 150 万人近くが訪れる。

ドイツと同じ枢軸国として戦った日本では、例えば、広島平和記念資料館と長崎原爆資料館。原爆によって殺された被害者の慰霊施設で、被害者意識が先に立つ。原爆の悲惨さを強調し、残酷なことをしたアメリカを暗に非難している。毎年 100 万人が訪れる。

ポーランドと同じ被侵略国である中国では、南京大虐殺紀念館がある。毎年 100 万人が訪れる。

戦勝国でも同じである。アメリカのハワイのパールハーバーには、アリゾナ記念館がある。日本軍の奇襲攻撃で 1102 名が殺された戦艦アリゾナの慰霊施設であり、年間 100 万人が訪れる。

これらの記念館は、いずれも自分たちを「被害者」の立場に置いて、「加害者」である敵を責めている。いずれも毎年 100 万人が訪ねる観光地となっているが、それは自国民が行くのであって、敵国とされる国の人は行きにくい。例えば、日本人は、広島平和記念資料館と長崎原爆資料館には行くが、南京大虐殺紀念館やパールハーバーのアリゾナ記念館には行きにくい。私もこれらを訪ねた時は、少し勇気が必要だった。南京とパールハーバーでは、日本人は加害者だからである。確かに、南京大虐殺紀念館を訪ねるのは中国人だけだし、アリゾナ記念館を訪ねるのはアメリカ人だけである。これらの施設に日本人はほとんど見かけなかった。逆に、アメリカ人は広島平和記念資料館と長崎原爆資料館には行きにくいだろう（オバマ大統領が訪ねただけでも大ニュースとなるほどだ）。

日本人は、アメリカ人にとってパールハーバーを奇襲した卑劣な加害者である。しかし、これには目をつぶって、日本では広島と長崎での原爆の被害者であることが強調される。毎年８月の終戦記念日のテレビや新聞は、広島と長崎の被害を強調するが、12 月のパールハーバー奇襲の加害を扱うことはほとんどない。それどころか、「原爆は戦争を終わらせるために必要であった」などと戦勝国側の意見を述べたりすると、メディアから袋だたきにされる。南京虐殺についても同じである。中国人にとっては日本は侵略者である。しかし、南京でも日本人の加害者性を強調しにくい雰囲気となっている。

加害者意識の慰霊施設

政治的・倫理的には、人は被害者の立場に立ちたい。被害者を攻撃した加害者は回りから非難されるが、被害者は加害者を攻撃しても倫理的に許される。被害者は攻撃する正当性が得られる。倫理的には、被害者は強く、加害者は弱い。被害者は善玉、加害者は悪玉である。

こうした中で、ドイツのダッハウ強制収容所跡は、加害者意識で作られている。他の国の慰霊施設に比べて、いかに突出しているかがわかるだろう。ドイツが国をあげて戦争責任を反省しているからだ。ダッハウは平日の早朝にもかかわらず若者で混雑していた。ダッハウを訪ねて一番驚いたのはその混雑ぶりである。ドイツ人の戦争責任の本気度を感じて驚いたのである。形式的に記念館を作って終わりというのではない。高校生の必修科目として、教員が生徒を連れて強制収容所跡を強制的に見せる。自国の暗黒面をさらけ出すわけだから、決して快いわけではないだろうが、それでも暗黒面を国民にたたきこもうとする。昔の自国がいかに残酷なことをしたか、それを若い人に知らせて、同じ間違いをしないように努力している。

ドイツ人だって加害者ばかりではない。例えば、戦勝国によるトレスデン爆撃では大量の死者を出している。ドイツ人も被害者意識は強いだろうし、戦勝国に対する恨みも強いだろう。にもかかわらず、そうした被害者意識をドイツ人は出さない。日本人とは何という違いだろうか。

日本にたとえるなら、日本政府が、若者をパールハーバーのアリゾナ記念館や南京大虐殺紀念館に強制的に行かせて、日本軍の極悪非道ぶりを勉強しろと言うようなものである。日本とドイツの考え方が全く逆であることがわかる。歴史的な事情も地理的環境も、日本とドイツでは違うので、日本もドイツのようにするべきだと主張したいわけではないが、このようなドイツの潔い態度は高く評価されてよい。

ベッテルハイム

ベッテルハイム

ブーヘンヴァルト強制収容所

出典:Wikipedia

ダッハウに収容された心理学者で最も有名なのはベッテルハイムである。

ブルーノ・ベッテルハイム（1903 ～ 1990 年）は、オーストリアのウィーンで、ハンガリー系ユダヤ人のもとに生まれた。ウィーン大学で学位を得た。ユダヤ人であり、ナチスのオーストリア併合に抵抗したとして逮捕され、1938 年にダッハウ強制収容所に送られ、次にブーヘンヴァルト強制収容所に送られた。幸運にも、1 年後の 1939 年に、ヒトラーの誕生日の恩赦によって解放された。すぐにアメリカに渡った。

1943 年には、自分の収容所体験をもとにして、「極限状況における個人および集団の行動」という論文を発表した。ドイツが降伏する前なので、強制収容所の虐殺が続いていた時期に発表されたのである。この論文は、1945 年に、連合軍がドイツを占領し強制収容所を解放した時、ヨーロッパの最高司令官だったアイゼンハワー元帥によって高く評価され、軍政関係者の必読文献に指定された。

精神分析的自閉症論

翌 1944 年からシカゴ大学の教育心理学の教員となり、後に教授となり 1973 年に引退するまでつとめた。シカゴ大学のソニア・シャンクマン養護学校で、自閉症をはじめとして情緒障害児の治療に従事した。その成果として 1967 年に発表されたのが、有名な『自閉症　うつろな砦』である。1940 ～ 1950 年代にかけては、自閉症の心因論がさかんに主張された。カナーが自閉症児の母親の問題を指摘し、自閉症の原因は母子関係の心理的要因であると考えられた。自閉症は統合失調症が最早期に発症したものだという考え方があり、冷たい家族関係や誤った育児方法が原因であるとする心因論・環境因的な解釈が強かった。ベッテルハイムの『自閉症　うつろな砦』では、野生児研究を多く引用して、自閉症が幼児期の養育の問題であると示唆している。そして、治療において、子どもをおびやかさない環境を作り、子どもが感情を自由に表現したり、思い通りに自発的に行動できるように促すこと（環境療法）を重視した。当時は、ベッテルハイムのような精神分析理論にもとづく受容型の心理療法がさかんにおこなわれた。その後、ベッテルハイムは、「冷蔵庫マザー」（自閉症は養育者の態度などの後天的な原因で発症するという説）の考え方を述べていた。

しかし、そうした受容型の心理療法はあまり効果が得られず、また 1960 年代以降はこうした仮説を否定する実証研究が多くなった。そして、一度の大きなパラダイムシフト（心因論から生物学的原因論へ）と、小さいパラダイムシフト（言語・認知障害節から対人・情動障害仮説へ）をへて、現在は、ベッテルハイムのような精神分析学的な心因論・環境因論・トラウマ論は否定されている。

死後の伝記研究による批判

ベッテルハイムは晩年にうつ病に悩み、1990 年に 87 歳で自殺した。

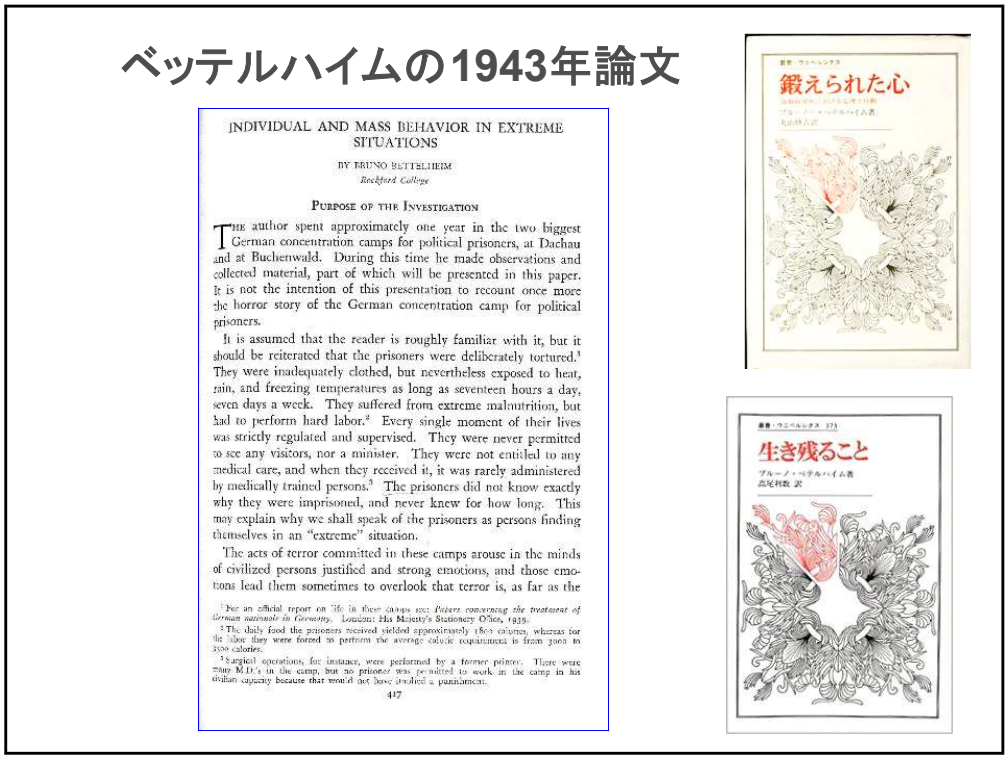
1997 年にリチャード・ポラックが発表した批判的伝記"The Creation of Doctor B: A Biography of Bruno Bettelheim"がきっかけとなり、ベッテルハイムの不祥事や経歴詐称が指摘されるようになった。シカゴ大学の養護学校で子どもに体罰をしたりするなどの問題行動も暴露されるようになり、彼の評判は暴落した。

また、経歴について、ベッテルハイムはウィーン大学で精神分析の学位を持ち心理学の訓練を受けたと自称したことがあった。日本の翻訳書の著者紹介には、「ウィーン大学で精神分析学を修めた」「ウィーン大学で心理学、特に精神分析学を学び、1938 年 Ph.D.取得」「1938 年にウィーン大学から医学博士の学位を得た」

などと書かれている。しかし、実際に調べてみると、ウィーン大学の学位は美術史についてのものだった（ただし、当時のウィーン大学の美術史ではフロイトやユングなどの精神分析の知識は不可欠だったらしい）。心理学については入門コースの心理学３科目を受講しただけだった。後にシカゴ大学は経歴のチェックが甘かったことを責められたが、第二次大戦直後のどさくさ状況では、海外での学歴のチェックは自己申告に頼らざるを得なかっただろう（これもナチスによる二次被害のひとつといえる）。

参考文献
ベッテルハイム『鍛えられた心』丸山修吉訳、法制大学出版局、1975.
ベッテルハイム『自閉症　うつろな砦１・２』黒丸正四郎他訳、みすず書房、1973,1975.
ベッテルハイム『生き残ること』高尾利数訳、法制大学出版局、1992.
　なお、ベッテルハイムの著作の多くは日本語にも翻訳されている。

ベッテルハイムの1943年論文



　ベッテルハイムは、1943 年に、アメリカ心理学会の「異常社会心理学雑誌」に、「極限状況における個人および集団の行動」という論文を発表した（左の写真）。その日本語訳は、ベッテルハイム『生き残ること』（高尾利数訳、法制大学出版局、1992）に収録されている。
　この論文を私は今回読んでみたが、実に面白くて、驚くことも多かった。この論文はアイゼンハワーから高く評価されたというが、なるほど心理学の外部の人に対して強く訴えかける力を持っている。
　ベッテルハイムの所属はロックフォード・カレッジとなっている。アメリカ心理学会の学術専門誌に掲載されたことで、ベッテルハイムは心理学者として高く評価され、それによりシカゴ大学の教員に採用されたと思われる。
　異常社会心理学雑誌のこの号には、ベッテルハイムの論文の次にも、Bondy という人が強制収容所論を載せており、小特集のような形だったのだろう。
Bettelheim, B.（1943）. Individual and mass behavior in extreme situations. The Journal of Abnormal and Social Psychology, 38, 417-452. （翻訳は『生き残ること』高尾利数訳、法制大学出版局、1992、に収録）

強制収容所の心理の３段階説
　ベッテルハイムは、強制収容所の囚人の心理を３つの段階に分けた。
１）最初の外傷の段階
２）適応の段階
３）適応の最終的段階

１）最初の外傷の段階
　これは投獄ショックの段階と収容所での「洗礼」の段階に分けられる。
　投獄ショックとは、警察によって逮捕された時の心理的衝撃である。これは、彼らの政治的状況や過去の経歴によって異なる。政治犯は、ナチスによって逮捕されるほどの重要人物であると認められたことで自尊

心は高められることがあった。もともと犯罪歴のある人も、今まで恨んでいた人々と対等になったことで、自尊心が高められた。しかし、政治的でない囚人は、投獄のショックに耐えることができず、多くは「逮捕は何かの間違いだ」と否認した。しかし、投獄されたことを認めることによって、人格崩壊がおこる場合もあった。自殺する者もいたし、ぐうたらになったり、仲間を裏切る行動をしたりナチスのスパイとなったりする者もいた。

次に、収容所での「洗礼」の段階が来る。囚人たちは、警察のもとを離れて、ナチスの手に渡り、強制収容所に移送された。この移送の段階で拷問がおこなわれた。また、収容所に着いた 24 時間の間に、「入会式」と呼ばれる拷問が待っていた。肉体的・精神的な暴力であり、殺されることもしばしばであった。この時の囚人の心理は「無関与感 feeling of detachment」である。この状況が自分とは関係がないという感じである。これは人格の統合を保つための防衛機制であった。つまり、主体としての自己と、客体としての自己を分けて、この状況は前者ではなく、後者に起きているのだと感じることである。それまでの自分の価値体系と、強制収容所の体験があまりにもかけ離れているので、目の前の状況を否認することである。

強制収容所で死んだ囚人の大部分は、到着後２～３週間で死んだ。彼らは生きる望みを失ったことからくる心身の消耗で死亡した。「もし最初の３日間生き残れるなら、次の３年間は生き残れる」といわれたという。

２）適応の段階

このような「無関与感」は、強制収容所で生き残るための適応メカニズムである。例えば、囚人は、極端な虐待に対してよりも、ささいな日常的な虐待に対して、大きな反応をしたという逆説的な現象がみられた。これは、大人に怒られる子どもといった昔の日常的な状況には強く反応するが、それに対してナチスの制度的な虐待には無感覚となることを意味していた。

これについてはフランクルの有名な言葉がある。「異常な状況においては、異常な反応がまさに正常な行動であるのである」『夜と霧』(99 頁)。

強制収容所に対する「適応」が進むということは、単に表面的な行動や意識が変わるのではなく、深い人格が変わるということである。はじめのうち、囚人は「自分の人格は無傷のままに保ち、もし外の世界に戻るのを許されたら元と同じ人格として復帰したい」と望んでいる。出来事のリアリティを認めない「無関与感」はこのためである。ところが、１～２年すると、今の収容所でできるだけよく生きていく方法だけに関心を向けるようになり、最悪な残虐行為も現実のものとして受け入れるようになっていく。「無関与感」もなくなっていく。そうなると、このまま残りの生涯を収容所ですごすのだ、外の世界に戻れることはないと思うようになる。外の世界に戻ることを怖れるようになる。外の世界に戻っても、昔の自分の人格は変わってしまったと感じてしまう。強制収容所に適応することによって、不可逆の人格変化がおこり、元の世界には戻れなくなると感じてしまう。外の家族や友人について思い出すのを好まなくなり、未来の生活について話し合うことに無関心となる。適応するかわりに希望を失うのである。

このことは新参の囚人と古参の囚人（３年以上過ごした者）とを比較するとわかる。ちなみに、ベッテルハイムは幸いにも１年で出られたので、古参の囚人の心理は観察によって得られたものだとしている。

囚人の集団全体が、子どもの反応に戻る「退行」がみられるようになる。

３）適応の最終的段階

適応の最終段階になると、囚人は、ナチスの価値を自分自身のものとして受け入れ、人種差別ということにも同調し、親衛隊に順応したり同一化するようになる。これほど人格が変容した。今でいう洗脳（マインドコントロール）である。そして、次に述べるように、これこそがナチスが強制収容所を作った理由だったとしている。

1943 年の論文ではここまでだが、後に 1979 年の著書で、ベッテルハイムは、強制収容所から解放された後の心理を「強制収容所生存者シンドローム」と呼んだ（『生き残ること』36 頁)。これは、後述するフランクルの「解放ショックの段階」に相当する。

加害者としてのナチスの分析

ベッテルハイムの分析の目的は、ナチスによる虐待の真の目的を明らかにすることである。囚人への虐待がおこなわれたのは、ナチスの看守の憂さ晴らしなどではない。虐待は手段であった。虐待は、一定の政治的意図のある組織的な行為である。ベッテルハイムはその目的を４つあげる。

①個人としての囚人を破壊して、扱いやすい集団に変え、どんな個人的・集団的な抵抗行為も起こらないようにするため。人間を無力化して、農奴と変えてしまい、支配しやすくするためである。

②国民のなかに恐怖心を植え付け、囚人を人質として、抵抗すればどうなるかという見せしめとするため。

③ナチス親衛隊の訓練の場として、親衛隊員がもっているやさしい感情や態度を破棄させ、無防備な市民を支配する訓練をおこなうためため。ナチスの親衛隊の兵士の多くは 17 ～ 20 歳の若者だった。

④ナチスの効果的支配方法の実験場として、囚人を殺さずに重労働に耐えるようにするために、最低限どれだけの食料や衛生施設が必要か、などを研究するため。のちに医学上の人体実験がおこなわれて多数の死者を出したのはこの延長であった。

強制収容所での残虐さだけが強調されてしまうと、こうしたナチスの本当の政治的イデオロギーがかえって隠されてしまうとベッテルハイムは述べる。

研究の目的について

ベッテルハイムの 1943 年論文を心理学研究という面からみた場合、ユニークなのはその目的と方法である。

まず、ふつうの心理学研究は、科学のために研究成果を発表するためにおこなわれる。ところが、ベッテルハイムがこの研究をおこなった目的は、狂気に陥らないようにするため、つまり自我を守るためであった。このことを彼は明確に述べている。

収容所に入った最初の数日間に、彼は、自分が人格崩壊しつつあることに気がつき、ショックを受けた。毎日の出来事によって希望や絶望を交互にくり返したが、それは人格崩壊に結びつきやすいことに気がついた。それは死に近づくことを意味する。そこで、彼は、強制収容所での体験に知的な興味を持ち、冷静に分析してみれば、状況にも耐えやすくなるだろうと考えて、「研究」を始めたのである。確かに、このような悲惨で絶望的な報告を読んでいると、客観的に冷静な分析をしようとしなければ、絶望したり自暴自棄になったりする気がする。

いつ自分が死ぬかわからないので、この研究を後世に残すことはできない危険も高い。研究の目的は、発表することではなく、研究を続けて理性を守り、自分を守ることであった。その意味では、研究していたからこそ彼は生き延びられたのかもしれない。しかし、逆に、研究のための記録メモを書いていることがバレれば、死刑になる危険もある。露見することは死を意味しており、文字通り命をかけた博打でもある。平和な時代の研究とは全く違う。

研究の方法論について

研究の方法も通常の論文とは全く違う。

データの収集の方法は、他の囚人と会話して、情動を集めることであった。しかし、他の囚人との会話は禁止されていたので、看守の目を盗んでおこなわなければならず、露見すれば死刑が待っていた。しかも、ベッテルハイムも他の囚人も、加重労働で極度の疲労状態にあり、栄養不良で、病気やケガをしていることも多かった。いつ殺されるかわからない死の恐怖につねに怯えている。全く冷静に面接できるような状況ではないのである。

こうした状況の中で、サンプリング数（話す囚人の数）を増やしていき、結局、ダッハウでは 600 人の囚人、ブーヘンヴァルトでは 900 人の囚人と個人的に知り合って会話したというから驚く（ただし、後には計 1500 人と会話したことが事実なのかどうか疑念が持たれているという）。ベッテルハイムはひとりで黙々と思索していたのではなく、逆に、多くの囚人と話すことでデータ集めをしていたのである。この論文は、意外にも、自分という一事例について主観的な報告をおこなったものではない。対話を用いて多くの囚人を観察した多数事例報告である。

会話の内容を記録する道具もすべもなかった。そこでベッテルハイムは、内容をすべて頭の中で記憶しようとした。記憶力を高めるために、記憶内容を何回もリハーサルした。

したがって、この研究は、「関与しながらの観察 participant observation」の典型である。強制収容所の囚人の心理を、看守の立場ではなく、囚人の立場から、同じ囚人同士として関与しながら観察したのである。つまり、強制収容所について最も豊かな情報を持ち論じうる人々は、以前囚人であった人々である。これが特徴である。これによって、被害者としての囚人の心理が了解できるようになり、わかりやすくなる。

囚人の心理を了解するためには、客観的な視点（ないし加害者としての視点）では困難であろう。看守の立場から囚人を客観的に観察しても、囚人の心の内面はわからない。囚人を客観的に監視するナチスの心理学的研究があったとしても、そのような悪魔的な観察は公にされることはなかったかもしれない（人体実験の医学研究のように）。強制収容所の研究は、加害者としての客観的な立場ではあり得ず、被害者としての参加しながらの研究とならざるを得なかった。

しかし、「関与しながらの観察」の利点は、同時に客観性がないという致命的な欠点がある。得られた結論にバイアス（一面的な偏った観察）がないとは保証できない。アメリカ心理学会の機関誌のひとつである異常社会心理学誌に採択されるためには、学術論文として方法論的な意識が重視される。

「研究者自身が分析されるべき集団の一員であるときに、その集団の行動を分析することの難しさもまた明らかであろう。さらに、経験した人たちにとって強烈な情緒を呼び起こすような状況について観察し報告するということの個人的困難さも、言及されねばならない。私は、自分の客観性についてのこれらの限界を自覚している。そして、それらの限界のいくつかを克服するのに成功することを望むのみである。」
『生き残ること』68 頁

このために、ベッテルハイムはできるだけ客観的に見ようと努力している。自分ひとりで結論を出すのでは信頼性（再現性・客観性）がないので、研究仲間を２人集めて、３人でデータ集めをして、その結論を比較したというのである。

ひとりは医学博士のフィッシャーであり、解放後にイギリスの陸軍病院につとめた。もうひとりはエルネスト・フェダーンで、彼は、1943 年に論文を発表した時には、まだブーヘンヴァルトに収容されており、氏名を明かすと生命に危険が及ぶので、当時は公表できなかった。後述のように、フェダーンは後にアメリカに渡りダッハウでの体験を公刊した。

平和な時代の研究とは全く違う。

心理学史上の意義

ベッテルハイムの 1943 年論文の心理学史上の意義をまとめてみよう。

①強制収容所の心理について報告したものとしては最初のものだろう。強制収容所での殺戮や虐待の告発はたくさん書かれていただろうが、心理については最初かもしれない（ただし確かめたわけではない）。この論文が書かれたのは 1943 年であり、ドイツが降伏しておらず、強制収容所の実態はまだ公然のものにはなっておらず、当時としてはショッキングな告発であろう。また、強制収容所の親衛隊の行動が、彼らの残酷さから来ているのではなく、イデオロギーの洗脳をめざした政治的なものであることを看破したのも注目される。アイゼンハワー最高司令官に高く評価されたのも、そうして政治的な仕組みの解明が高く買われたからであろう。

②強制収容所という外傷的ストレスに対する心理の時間的変化を、３つの段階に分けて記述し分析した。変化の時間的段階を設定する方法はユニークなものであった。また、そうした変化の基本は、強制収容所という異常な環境に対する「適応」なのだと看破し、自己防衛のメカニズムであるという精神分析的・力動心理学的な説明をした。ただし、精神分析学といっても、フロイトのような生得的要因や発達課程を重視でもなく、ベッテルハイムをはじめ外傷的ストレスの研究は、環境を重視する。したがって、正統的フロイト主義ではない。もし、フロイトが生きていたら、異端として除名されたかもしれない。

また、ベッテルハイムの研究のような力動的（ダイナミックな）説明は、心理学では主流というわけではなかった。心理学の主流は、あくまで心理を記述したり個人差を調べたり、「静的」な説明法であり、それは人間の外側から客観的な方法を使っていた。しかし、「静的」な方法は、変化を捉えることが苦手である。強制収容所の囚人の心理を記述するためには、外側から客観的な方法を使っても難しいため、ベッテルハイムのように、自らが観察者兼被観察者となる「関与しながらの観察」であるからこそ可能だったのだろう。こうした科学的客観性を少し犠牲にしたからこそ、変化をうまく記述でき、力動的（ダイナミックな）説明が可能だったのだろう。こうした精神分析的な解釈は、後のフランクルやコーエンの研究の下敷きとなったのである。それだけベッテルハイムの影響力は強かったと言える。ダッハウが心理学を変えたというのはこのことである。

③ベッテルハイムのこの研究がきっかけとなって、外傷的ストレスに対する適応心理学の流れが生まれた。この強制収容所の研究をハシリとして、戦争被害、犯罪被害、災害被害のような命にかかわる外傷的ストレ研究が生まれた（後述）。ただし、２つの世界大戦では、「戦争神経症」という外傷ストレスが大きな問題となり、また、捕虜収容所における「鉄条網病」（拘禁反応）の研究もあらわれていた。このような戦争が引き起こした精神病理の研究がおこなわれ、それが外傷的ストレスに対する適応心理学を生んだとも言える。

ただし、この外傷的ストレスをどのように治療したらよいかという治療方法論・援助方法論については、ベッテルハイムの論文にはまだ出ておらず、フランクルの出現を待たなければならなかった。

エルネスト・フェダーン

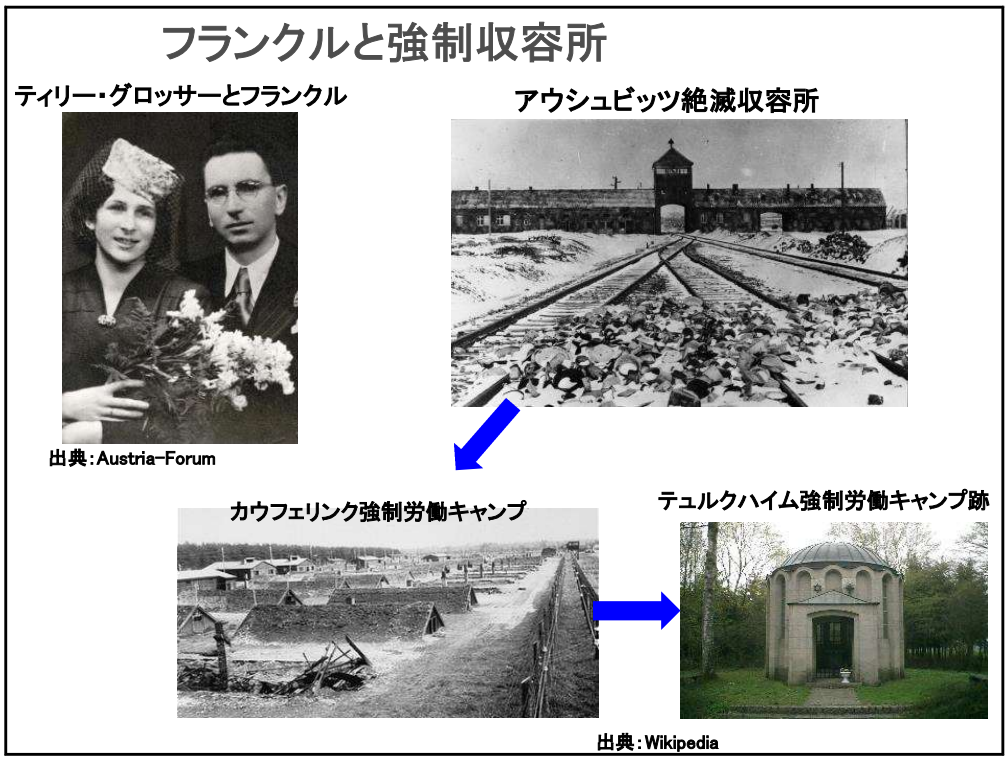
前述のように、強制収容所のなかで、ベッテルハイムと協力して、囚人の心理を研究したのは、後に精神分析学者となるエルネスト・フェダーンであった。

エルネスト・フェダーン（1914 ～ 2007）は、ウィーン生まれのユダヤ人で、有名な精神分析学者パウル・フェダーン（1871 ～ 1950 年）の息子である。彼はトロツキストとしての政治的運動で逮捕され、1938 年にダッハウ強制収容所に入れられ、後にブーヘンヴァルト強制収容所に送られた。そこでベッテルハイムと知り合い、共同で研究した。

一足先に解放されたベッテルハイムが 1943 年に論文を発表した時には、フェダーンはまだブーヘンヴァルトに収容されており、氏名を明かすと生命に危険が及ぶので、当時は公表できなかった。フェダーンは 1945 年にアメリカ軍によって強制収容所から解放されて、アメリカに渡り、ダッハウでの体験を公刊した。アメリカで精神分析家・ソーシャルワーカーとして活躍した。なお、父親のパウル・フェダーンもアメリカに亡命し、そこで精神分析学者として活躍した。

フランクル

フランクルと強制収容所



フランクルの前半生

ダッハウと関係のあるもうひとりの心理学者はフランクルである。フランクル研究所のホームページを参考に、彼の人生をたどってみる。

ヴィクトール・フランクル（1905 ～ 1997 年）は、ウィーンでユダヤ人として生まれた。ギムナジウム（中学・高校）の卒業論文で実存主義のショーペンハウエルについて論じた。この時にフロイトに会いに行き、国際精神分析学雑誌に投稿した。オーストリア社会主義高校生協会で活動した。ウィーン大学医学部に入り、フロイトから遠ざかり、アドラー派に近づき、アドラー派の雑誌である国際個人心理学雑誌に論文を発表した。在学中に学会で発表し、この論文ではじめて「ロゴテラピー Logotherapie」という用語を用いた。やがて哲学者マックス・シェーラーに傾倒し、アドラー派から退会する。在学中に、若者カウンセリング・センターを作り、若者に無料でカウンセリングをおこなった。

医学部卒業後は、ウィーン大学病院の精神科で働いた。28 歳から、ウィーンの病院の女性自殺センターで働き、年間 3000 名の患者を診療した。32 歳で精神科のクリニックを開業した。34 歳の時の論文ではじめて「実存分析 Existenzanalyse」という用語を用いた。

1938 年にナチスがオーストリアを併合してから、ここでユダヤ人差別が激しくなった。1940 年、35 歳の時に、ユダヤ人のためのロスチャイルド病院の精神科長として働いた。1941 年、36 歳の時にティリー・グロッサー（1920 ～ 1945 年）と結婚した。

しかし、翌 1942 年 9 月には、フランクル一家は逮捕され、プラハのユダヤ人ゲットーに入れられた。ここでフランクルの父親が衰弱死した。

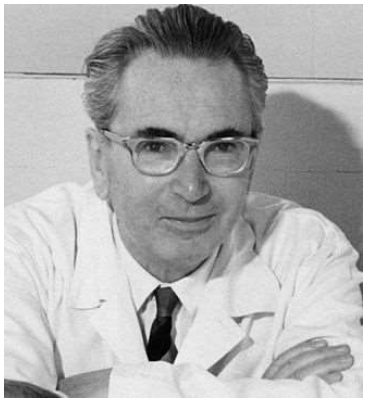
強制収容所体験

２年後の 1944 年 11 月、フランクル 39 歳の時に、一家はアウシュビッツの絶滅収容所に送られた。フランクルの母親はそこで死亡した。妻は、その後、ベルゲン・ベルゼン強制収容所に移動させられ、そこで翌年殺された。24 歳であった。なお、ベルゲン・ベルゼン強制収容所は、『アンネの日記』のアンネ・フランクが殺された収容所である。

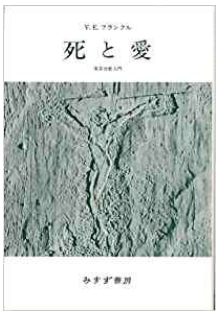
フランクルは、アウシュビッツから、ダッハウの強制労働キャンプであるカウフェリンクへと送られた。ここでは軍需目的の秘密の巨大な地下工場の建設をさせられた。民間の建設会社が囚人を買って働かせ、会社は囚人の日当を収容所当局に支払うというシステムである。死の強制収容所を利用して儲けた民間企業もたくさんあったことになる。さらに、1945 年３月には同じくダッハウの強制労働キャンプであるテュルクハイムに送られ、そこでチフス治療の医師として働いた。

戦後の活躍

戦後のフランクル



出典：Wikipedia



登山するフランクル
（フランクル博物館）

出典：Wikipedia

1945 年４月アメリカ軍によって解放された。40 歳である。アウシュビッツやダッハウから生きて帰れたことは奇跡としか言いようがない。

８月にウィーンに戻り、妻ティリーや母、兄夫婦が殺されたことを知った。すぐにウィーン市立病院の精神科で働き、そこで 25 年間つとめた。

1946 年、強制収容所での体験を９日間で口述筆記し、『ひとりの心理学者が強制収容所を体験した』を発表した。

43 歳でウィーン大学医学部精神科の准教授、50 歳で教授となった。また、ハーバード大学をはじめ、アメリカの多くの大学で客員教授をつとめた。この間、彼は人間の本質や心理療法について多くの著書や論文を発表した。

実存分析とロゴテラピー

フランクルは、実存分析とロゴテラピーの創始者として知られる。

20 世紀の初めに、キルケゴール、ニーチェ、ハイデッガー、ヤスパース、マルセル、サルトルらの実存主義哲学がさかんになり、２度の世界大戦の悲惨と精神的荒廃を背景に、世界の若者に広まった。人間はもともと死に向かう存在であり、不安や苦悩に満ちたものであるが、人間はたえず自分自身を乗り越え、みずからの責任において自分を作っていく存在である。

実存主義哲学を精神医学に応用したのが実存精神医学である。ビンスワンガーやメダルト・ボスの「現存在分析」や、フランクルの「実存分析」が有名である。いずれも「分析」という名前がつくのは、フロイトの精神分析の影響を受けたからである。フランクルは実存精神医学の先頭にたって活躍し、思想的に大きな影響を与えた。

フランクルは、のちに具体的な心理療法の技法として「ロゴテラピー」という語をもっぱら用いるようになった。ロゴとは「ロゴス」のことで、意味とか論理をさしている。ロゴテラピーの根本には、①意志の自由、②意味への意志、③人生の意味という３つの理論がある。人生の意味を見つけられなくなった状態をフランクルは「精神因性神経症」と名づける。生きる意味がわからない、目標がない、生きる目的が見つからない、人生が空虚に感じられるといった状態である。これは「実存的空虚」の状態なのだという。このような状態から脱するための心理療法を意味療法（ロゴテラピー）と彼は名づける。人生に意味を与えるためには３つの方法がある。①何かを創造することで世の中に何かを与える、②何かを体験することで世の中から何かを受け取る、③苦悩を受け入れて苦悩に立ち向かう態度を身につけることであり、それぞれ創造価値、体験価値、態度価値を求めることである。具体的な心理療法の技法としては、逆説的意図とか脱内省といった方法をあげている。

こうした考え方がどこからやってきたのか、『夜と霧』を読むと、ひとつひとつ理解できる。ロゴテラピーの考え方が、強制収容所体験に裏づけられていることがわかる。ロゴテラピーの骨格は、強制収容所の前にできあがっていたらしいが、強制収容所体験によって、その理論が充填され、理論の正しさが検証されたことになる。だから、フランクルがあれだけ過酷な体験をして得られた結論なのだから、そんな体験をしたことのない凡人にとっては、否定するわけにはいかないと思わせるところがある。しかし、考えてみれば、これはフランクルが読者にかける魔術なのであって、フランクルのような体験をした誰もが同じような理論

に到達するわけではない。

心理学や思想に与えたフランクルの影響

実存主義や実存精神医学は、心理学にも影響を与え、1960 年代にはアメリカで「人間性心理学」がおこる。ロジャースのクライエント中心療法とパーソン・センタード・アプローチ、パールズのゲシュタルト療法、マスロウの動機づけ理論、ロロ・メイの実存心理学などがその代表である。こうしたアメリカの心理学にフランクルのロゴテラピーの考え方は大きな影響を与えた。

参考文献：丹野義彦「人間性心理学」　丹野・石垣・毛利・佐々木・杉山編『臨床心理学』有斐閣

ロゴテラピーという心理療法はそれほど大きな影響力を持たなかった。『心理療法のシステム』（津田・山崎監訳、金子書房，2010）によると、ロゴテラピーの治療効果を調べる対照試験は、これまで全くおこなわれていない。ロゴテラピーの支持者は、治療効果を客観的に調べる対照試験を非人間化するものとして否定している。このため技法としてのロゴテラピーの影響力はほとんどなくなっている。フランクルの著作は、心理療法の具体的な技法としてではなく、心理療法の基礎的な考え方を教えてくれる副読本として生き残っていると言える。

むしろフランクルの本は、極限状況における人間の存在について考える思想書として長く読まれている。2001 年の同時多発テロの後、人間の死と生の極限を語るフランクルの言葉があらためて見直された。

日本でのフランクルの影響

日本においても、人間性心理学が一世を風靡した 1960 ～ 70 年代には、フランクルの影響力は大きかった。神谷美恵子の『生きがいについて』とともに、フランクルは広く読まれた。フランクル著作集も出版され、私も当時はフランクルの著作集を全部読んだものである。フランクルの文章はわかりやすく暖かい。後述のように、『夜と霧』はまるで小説のような迫力があり、圧倒的な文学性と感動性がある。

しかし、ロゴテラピーという心理療法は、それほど大きな影響力を持たないままである。前述のように、治療効果が明らかではないためだ。

一方で、フランクルの本は思想書としてはロングセラーを続けており、ことあるごとに読み返されている。日本でも 2011 年の東日本大震災で多くの人が死というものに直面し、心に沁みるフランクルの言葉が見直されたのは記憶に新しい。

フランクルの強制収容所論『夜と霧』

フランクルは、強制収容所での体験を『ひとりの心理学者が強制収容所を体験した』という文章に表現した。日本語訳が『夜と霧』である。この本は、私も若い頃何回か読んだが、本稿を書くために 30 年振りに読み返してみた。ダッハウを実際に見学してから『夜と霧』を読むと、現実感が違う。まさにこの地で起こったことであり、どこか遠くの地で起こったことではなくなる。あらためて心を揺さぶられた。

フランクルの『ひとりの心理学者が強制収容所を体験した』は、ドイツ語版は、1946 年に、
『それでも人生にイエスと言う：ひとりの心理学者が強制収容所を体験した』（… trotzdem Ja zum Leben sagen: Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager）
というタイトルで出版された。

英語版は、1959 年に
『死の収容所から実存主義へ』（From Death-Camp to Existentialism）
というタイトルで出版され、のちに
『意味への探求：ロゴテラピーへの招待』（Man's Search for Meaning : an introduction to logotherapy）
というタイトルとなり、ベストセラーとなった。英語版では、ロゴテラピーを紹介するという心理学の本の中に、『ひとりの心理学者が強制収容所を体験した』が収録されている。

一方、日本語版は、1956 年に
『夜と霧：ドイツ強制収容所の体験記録』
としてみすず書房から出版された。英語版よりも３年早い。この本は、フランクルの『ひとりの心理学者が強制収容所を体験した』を収録しているが、その半分ほどの量で、出版者による解説と写真図版がついている。解説では、絶滅収容所や強制収容所におけるナチスの残虐非道について、豊富な写真とともに紹介している。冒頭には日本の南京虐殺への非難もあり、政治的・社会的文脈で紹介されている。英語版とは違って、心理学の本ではなく、政治的・社会的にナチスを非難する本の中に、フランクルの『ひとりの心理学者が強制収容所を体験した』が収録されている。こうしたみすず書房の出版戦略は大当たりして、この本は大ベストセラーとなった。

このように、英語版と日本語版では、フランクルを取りあげる文脈が少し違っている。

参考文献：『夜と霧：ドイツ強制収容所の体験記録　フランクル著作集１』（霜山徳爾訳、みすず書房,1961）
『死と愛：実存分析入門』フランクル著作集２』（霜山徳爾訳、みすず書房,1961）

強制収容所の囚人の心理段階

フランクルは強制収容所の囚人の心理を３つの段階に分けた。

１）収容ショックの段階
２）無感動の段階
３）解放ショックの段階

１）収容ショックの段階

今までの生活のすべてが取りあげられ、強い苦悩と昂奮に襲われる。例えば、恩赦妄想や捨て鉢なユーモアであり、ある者は自殺を試みようと決心する。生きることへの期待と助かる可能性の追求が強く、そのため、苦悩はますます強まる。

フランクル自身の体験が語られる。アウシュビッツに列車で到着して、最初に、ガス室送りか強制労働行きかの選択がおこなわれた。90 %はガス室で殺され、10 %だけが強制労働に回された。すべてはその場の親衛隊将校の右か左かの指の動きひとつで決められた。フランクルは 10 %の強制労働に回され、生き残る。最初に、身体中のすべての毛をそられてしまう。家族とも引き離される。すべての所持品が没収され、持ってきたライフワークの学術書の原稿も廃棄させられる（メガネだけは没収を免れた）。翌日、古参の囚人がこっそりやってきて、生き残るための方法を伝えてくれた。「労働が可能であるという印象を示せなくなったらガス室行きだ」と。

２）無感動の段階

数日ないし数週後には、第２段階に移る。深刻な無感動が支配する。囚人は感情を殺して生きるようになる。「苦悩する者、病む者、死につつある者、死者－これらすべては数週の収容所生活の後には当たり前の眺めになってしまって、もはや人の心を動かすことができなくなるのである」103 頁。自分が自分の「主体」であるという感情を失う。囚人たちは羊の群れのようなものになってしまう。目立つと親衛隊によってガス室に送られてしまうからである。

無感動は心の自己防衛のメカニズムである。無感動になることで、殴られることにも無感覚となる。無感動こそ、囚人に最も必要な装甲である。「異常な状況においては、異常な反応がまさに正常な行動であるのである」99 頁。

原始的な段階に「退行」するといってもよい。満足な食事が与えられないので、ひたすら食欲に執着する。性欲はなくなってしまう。毎日をいかに生き残るかだけに関心が向かうので、それ以外のものは贅沢と感じられるようになる。政治的関心と宗教的関心はあったが、それ以外の高次の関心はなくなり、文化的冬眠の状態に陥った。

内面化への傾向

その一方で、フランクルは次のようなことも指摘する。

精神的に高い生活をしていた感じやすい人間は､精神の自由と内的な豊かさへと逃れる道が開かれていた。こうした内面化への傾向がある者が生き残った。そのため、「繊細な性質の人間がしばしば頑丈な身体の人々よりも、収容所生活をよりよく耐え得たというパラドクス」（122 頁）が存在した。

フランクルは自分の体験を引き合いに出す。早朝に収容所から行進する苦行のなかで、ある囚人のふとした言葉から囚人たちは自分たちの妻のことを思い出した。フランクルも想像の中の妻と対話し始める。

私の精神は、それが以前の正常な生活では決して知らなかった驚くべき生き生きとした想像の中でつくり上げた面影によって満たされていたのである。私は妻と語った。私は彼女が答えるのを聞き、彼女が微笑するのを見る｡私は彼女の励まし勇気づける眼差しを見る－そしてたとえそこにいなくでも－彼女の眼差しは、今や昇りつつある太陽よりももっと私を照らすのであった。その時私の身をふるわし私を貫いた考えは、多くの思想家が叡智の極みとしてその生涯から生み出し、多くの詩人がそれについて歌ったあの真理を、生れて始めてつくづくと味わったということであった。すなわち愛は結局人間の実存が高く翔り得る最後のものであり、最高のものであるという真理である。私ぱ今や、人間の詩と思想とそして－信仰とが表現すべき究極の極みであるものの意味を把握したのであった。愛による、そして愛の中の被造物の救い－これである。『夜と霧：ドイツ強制収容所の体験記録　フランクル著作集１』（霜山徳爾訳、みすず書房,1961）124 頁

その時、フランクルにとって妻の消息はわからなかった。実はその時にはすでに妻は殺されていたのだった。しかし、その瞬間のフランクルにとって、彼女がどこにいようと、生存していなくてももはや問題ではなかった。

こういう文章は、小説でなら説得力を持たないような陳腐なものであろうが、強制収容所という状況で示されると、感動的に聞こえてくるのである。（脳科学者であれば、脳内モルヒネが出た時に、たまたま妻の顔が浮かんだだけではないかと言うかもしれないが・・・）。

また、こうした内面化の傾向は、芸術や自然に対する強烈な体験としてもあらわれることがあった。

精神の自由

強制収容所では、人間の心は、生物・心理・社会の各レベルによって規定されてしまっているように思われた。生物学的な条件（飢餓・疲労・睡眠不足・病気など）、心理学的な条件（劣等感や、適応の過程における無感動など）、社会学的な条件（強制収容、ナチスによる虐待・洗脳）はそれぞれ厳しかった。人間はこうした規定の結果であって、人間の「自由」などはないように思われた。

しかし、フランクルによると、囚人の行動は、生物的・心理的・社会的表現以上のものがあった。つまり、生物・心理・社会による規定の上に、「実存」があり、人は規定に逆らって、決断できる自由を持っていたと述べる。

絶対的な強制状態にもかかわらず、囚人は決断を迫られていた。強制に従ってしまうことはあっても、従わない自由もあった。こうした自由を放棄して、典型的な「収容所囚人」となるか、あるいは人間としての尊厳を守る一人の人間になるかという決断である。そして、少数ではあるが、後者のような倫理的な英雄のような人々がいたという。自己犠牲的に収容所の中であちらでは優しい言葉をかけ、こちらでは最後の一片のパンを与えるような英雄的な人々がいた。

その一方で、「最もよき人々は帰ってこなかった」という記述も見られる（78 頁）。つまり、強制収容所から帰ることができのたは、良い人ではなかった（自分も含めて）というわけである。

３）解放ショックの段階

強制収容所から解放されたとしても、しばらく危険が続く。「強制収容所の生活は疑いもなく人間の奥底に一つの深淵をひらかしめたのであった」（198 頁）。それまで極度の緊張を強いられていたが、解放されると、その緊張がなくなり、極度の弛緩がおこる。圧迫が急に取り除かれるので、心理的な「潜函病」（潜水病）が起こるのである。最初はあらゆるものは非現実的で夢のように思われる。一種の離人症になっている。何日かたって、やっと感情がわいてくる。昔の生活に戻った時も、新たに不満と失望が待ち受けている。誰も彼を待っていてくれなかったことへの不満、心の拠り所としていた愛する人が存在しなくなっていたことへの失望。かつて強制収容所に適応したプロセスと同じことが、昔の環境に戻る適応においても必要になる。しかし、やがて強制収容所での日々を回顧し、次のように思える日が来る。これほど悩んだからにはこの世界で何者も恐れる必要はない、神以外には。

心理療法への示唆

こうした過酷な環境の中で、フランクルは、心理療法への示唆を得た。他の強制収容所の報告とフランクルが違うのはこの点に言及していることである。

ただし、そもそも強制収容所の心理療法とは語義矛盾である。囚人の苦悩を救うためなら強制収容所から出せばよい。もし強制収容所の環境に適応させるために心理療法を強要したならば、それはソ連時代の精神科医がしたように、政府の洗脳に力を貸すだけになる。この場合、フランクルのいう心理療法とは、囚人による囚人のための自発的な心理療法のことをさしている。ナチスの強制収容所に適応するための心理療法ではなく、あきらめないで強制収容所を生き延びるための心理療法である。そのような活動はまさに禁じられた非合法のものであり、露見すればガス室に送られた。したがって、できることは非常に限られていた。

大切なことは未来や未来の目的に目を向けさせることである。人は未来に向かって存在している。未来のある時点からみて現在の在り方が決まるのであり、将来の目的があるから今の生活が成り立っている。だから、人が未来を失えば、内的生活の構造は崩壊してしまう。このことは誰でも目的を失ったり、失業したりした場合には体験される。強制収容所の囚人はその極端な状況である。刑期が決まっているわけでもなく、今日にも殺されてしまうかもしれない。囚人には未来がないため、内的生活の構造が崩壊してしまう。（強制収容所では、毎時毎時になされる悪意によって、一日はとても長く感じるのに対して、一週は気味悪いほど早く過ぎ去っていくように感じられる。「一日の長さは一週間より長い」と感じられるのだという。）囚人は未来を失うと同時に、生きるよりどころを失い、内的に崩壊し、心理的にも身体的にも転落した。

したがって、強制収容所で生き延びるためには、未来に目を向けることが必要である。フランクル自身が、多数の聴衆を前に、強制収容所の心理学について講演をおこなうことを想像したという。強制収容所を客観視して、科学的に分析する姿を想像した。現在の体験がすでに過去のことであるかのように見ることができて救われたという。前述のように、ベッテルハイムが強制収容所の研究をおこなったのも、研究によって自我を守るためであった。

また、絶望して自殺を試みようとする囚人に対しても、未来の目的に目を向けさせることが必要である。フランクルはそのような囚人と話し、「人生においてあるものが未来において待っている」ことを示すことに成功し、２人の自殺を思いとどまらせた体験を述べている。ひとりは学問上の著作の完成、ひとりは深い愛情で彼に依存している娘の存在に目を向けて、未来を取り戻したという。

さらに、簡単な形の集団心理療法のようなものも可能だとフランクルは述べる。彼は、バラックの夜の暗闇の中で、労働に疲れた仲間に対して、目的を失わないように語りかけた。必要な生きる意志と勇気を与えようと試みて成功したエピソードを報告している。

「人生というのは結局、人生の意味の問題に正しく答えること、人生が各人に課する使命を果たすこと、日々の務めを行うことに対する責任を担うことに他ならないのである。」（184 頁）

圧倒的な文学性と感動：ベッテルハイムとの比較

本書の特徴は、先のベッテルハイムの論文と比べると明らかとなる。

１）まず、心理の分析だけでなく、心理療法について扱っている点である。

強制収容所の囚人の心理を描写する点においては、ベッテルハイムと同じである。その後、フランクルはその体験から心理療法の本質的な態度を導き出す。これはベッテルハイムにはなかったことである。

フランクルのこの書では、強制収容所のあまりに過酷な描写によって、読者は心的外傷を負うのである。しかし、その後、希望や心理療法による感動によって、読者は救われる。フランクルによって心理療法を受けたような感じである。ジェットコースターのように、地獄と天国の両方を体験することになる。このような読書体験は稀なことである。

２）第２に圧倒的な文学性と感動である。ひとつひとつのエピソードが、まるで小説のシーンのような迫力がある。各章の最後は完璧なオチが効いていて、感動させられる。前述の妻とのイメージ上での対話や、バラック内での「集団心理療法」の場面である。物語上のオチだけでなく、哲学上のオチがついている。フランクルは作家としての文章力がある。これらはベッテルハイムにはなかった要素である。ただ、あまりドラマチックすぎて、少し調子が良すぎる気がしないでもない。

中に引用されているドストエフスキーの『死の谷の記録』や、トーマス・マンの『魔の山』、そして、ソルジェニーツィンの『イワン・デニーソヴィチの一日』や『収容所群島』へと通じる強制収容所文学の流れに連なるだろう。

３）フランクルの個人的な体験が前面に出ていることも違う。アメリカ心理学会の学術論文として発表されたベッテルハイムのものと違い、本書は一般書店からノンフィクションとして出版された。ベッテルハイムの論文では、自分個人の体験はできるだけ後ろに隠れていたが、フランクルのこの書では、個人的な体験がほとんどである。

本書は、一般論ではなく、ひとりの人間にいかに体験されたかを述べたいとしている。本書は、強制収容所を体験していない読者に対して、強制収容所のことを「了解」してもらうために書いたという。また、強制収容所を体験した読者に対しては、強制収容所について学問的方法で「説明」するために書いたという。外にいた人間は、確かに距離は取れるかもしれないが、囚人の体験の流れの外に立っているのであって、妥当な記述をすることはできない。アウシュビッツで離ればなれになり、そこで殺された 24 歳の妻は、本書の至る所に登場する。また、彼の医師としての体験も正直に書かれている。これによって、ベッテルハイムの論文にはなかった文学性と感動が生まれた。

しかし、その分、客観性が犠牲になった。本書のような主観的な体験から一般性をもった客観的な理論を作ることは他の人々に委ねるとしている。心理学は体験への学的距離を要求するが、本書はそうした学的距離を取ることは断念した。モノサシがそれ自体歪んでいるかもしれないし、バイアスがあるかもしれない。私的な叙述はできるだけ排除するが、勇気を持って体験の個人的な叙述をすることにしたという。

４）ベッテルハイムの論文に比べて、政治性・社会性をそれほど重視しない点である。フランクルの興味は個人の心理学とその治療にあるからである。その結果、ナチス親衛隊や看守の行動についても、サディズムといった個人的な要因で説明している。しかし、これについては明らかにベッテルハイムのような政治的分析（「加害者としてのナチスの分析」を参照）が正しいのではなかろうか。ナチスの残虐さをサディズムといった個人の属性だけに帰してしまうと、ナチスの本当の政治的イデオロギーがかえって隠されてしまうという前述の４ベッテルハイムの警告は正しいように思われる。

なぜ心理学者なのか？　なぜ医師ではないのか？

本書の原題は『ひとりの心理学者が強制収容所を体験した』（Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager）であるが、不思議なのは、フランクルは精神科の医師なのに、なぜみずからを「心理学者 Psychologe」と呼んだのかということだ。現在の日本では精神科医と臨床心理士（心理職）は違う職種であり、精神科医はみずからを心理学者と呼ぶことはない（ただし、医師と臨床心理士の両方の資格を持つ人の場合は例外）。まして、臨床心理士がみずからを医師と呼ぶならば。それは医師法違反の犯罪者として逮捕される。

この理由は、第１に、おそらくフランクルにとって、心理学と精神医学の関係は、基礎医学と臨床医学の関係であり、心理学を学問的基礎として、そのうえで診療という臨床行為をおこなうという図式があるためだろう。例えば、イギリスでは、精神医学の基礎を「医学的心理学 medical psychology」と呼ぶこともある。フランクルは強制収容所では、（一時期を除いては）医師の立場で関わったわけではない。医師ではなく、一囚人の立場で、囚人たちの心理を観察したということ表すために、この題名にしたのだろう。

もうひとつの理由としては、強制収容所では医師は特権的な立場にあり、そこで働いたユダヤ人医師は、ナチスに協力したとして後で非難されたのかもしれない。本書でも、自分が医師としての優遇を受けたわけではないことを強調し、「私は自分が通常の囚人以上のものではなかったこと、119104 号以外の何ものでもなかったことを、ささやかな誇りをもって述べたいと思う」（79 頁）としている。さらに、強制収容所では現実生活の地位が逆転しており、現場の労働監督から職業を聞かれて医師だと答えたら、「なに、おめえは医者だったのか、ははあ、おまえは人々から金を騙り取ったろう」と言われて襲われたエピソードを書いている。

とはいえ、本書の随所には、強制収容所では医師は特権的な立場にあること、フランクル自身も医師として、精神科医として、心理療法家としての技能を買われて優遇されたことが正直に書かれている。囚人の中の監視役（カポ）に対して、フランクルは心理療法のような忠告をおこなって感謝され、いろいろな優遇を受けたという。また、後述のように、囚人が自殺を考えた時には、精神科医として説得し、思いとどまらせた。さらに、フランクルが移された２つ目のテュルクハイムの労働キャンプでは、病気の囚人の収容所があ

り、そこでチフス治療のため医師として働き、そのときは重労働を免れ、孤独の時間を持つこともできた。その時は、脱走するチャンスがあったのに、医師として治療する使命感のために脱走を断念するほどであった。こうしたことを考えると、『ひとりの医師が強制収容所を体験した』または『ひとりの精神科医が強制収容所を体験した』といったタイトルでも全く不自然ではない。

後述のように、フェルミの『亡命の現代史』によると、強制収容所で死んだ者の数は、精神分析学者は他の学問分野より少ないのだという。当時の精神分析学者は医師だったからではなかろうか。医師であったフランクルもフロイトも何とか生き残ったわけだが、彼らの家族はすべて強制収容所で殺されているのである。

フランクル『夜と霧』の心理学史上の意義

この書の心理学史上の意義をまとめておこう。

１．囚人の心理を３つの段階に分けて説明する点は、ベッテルハイムと同じである。その内容についても、強制収容所に対する「適応」を重視し、自己防衛のメカニズムであるとする精神分析的・力動心理学的な説明はベッテルハイムと同じである。ここから、心的外傷に対する適応心理学の流れが生まれた（後述）。

２．フランクルは、心理の分析だけでなく、心理療法についての示唆を与えた。強制収容所体験からフランクルは「生きる意味への探求」を見いだし、ロゴテラピーの基本的考え方となった。これは実存主義哲学を精神医学や心理療法に応用したものであり、実存分析と呼んだ。ここから、ビンスワンガーやボスとともに、実存精神医学の流れが生まれた。強制収容所体験がなければ、あるいはフランクルが強制収容所で殺されていれば、このような流れは出てこなかったかもしれない。その治療効果はともかくとして、今でも、心理療法の専門家は、この書から汲めども尽きぬ勇気を得るだろう。生きる意味を失って悩んでいる人にとっても大きな力を得られるだろう。

３．この書の文学性と感動は圧倒的であり、ベストセラーになったことで、実存精神医学を広く世の中に広く知らせる原動力となった。

４．心理学への影響も大きかった。フランクルのロゴテラピーの考え方は、アメリカに伝わり、1960 年代の「人間性心理学」に大きな影響を与えた。また、病的なパーソナリティではなく、「健康なパーソナリティ」理論にも大きな影響を与え、間接的にポジティブ心理学にも影響を与えた。

コーエンの強制収容所の心理学的研究

コーエン『強制収容所における人間行動』

マウトハウゼン強制収容所

出典：Wikipedia

強制収容所の心理として有名なのは、1953 年に出版されたコーエンの『強制収容所における人間行動』がある。

エリー・コーエン(1909 ～ 1993 年)は、オランダ生まれの医師で、ユダヤ人だったため、1942 年に逮捕され、オランダのアメルスフォルトとヴェスターボールク強制収容所を経て、1943 年にアウシュビッツ絶滅収容所に入れられた。1945 年にはマウトハウゼン強制収容所（写真右）に移され、同年アメリカ軍の手で解放された。1953 年に、『強制収容所における人間行動』（清水・高根・田中・本間訳、岩波書店、1957）を発表した。

文献：コーエン『強制収容所における人間行動』清水・高根・田中・本間訳、岩波書店、1957

コーエンの本は 1953 年に出たものであり、戦後に多くの文献資料が出てきてから、それらを参照して書かれている。ベッテルハイムの 1943 年の論文もフランクルの 1947 年の著書も引用している。

この本の第３章で、「強制収容所における抑留者の心理」をとりあげている。コーエンは、以下の３段階としてまとめている。

１）初期反応の段階
２）適応の段階
３）諦めの段階

これはベッテルハイムの段階論とほとんど同じである。「適応」が進んで、「諦め」の段階に至るという構成も同じである。ベッテルハイムの 1943 年の論文をもとにして、論を進めている。

コーエンは医師であるが、フロイトなど精神分析学の用語が多く出てくる。これもベッテルハイムの影響であろう。

ベッテルハイム・フランクル・コーエンの強制収容所論の比較

以上３名の強制収容所論を比較してみよう。

●強制収容所論の年表

年	ナチス強制収容所	ベッテルハイム	フランクル	コーエン
		1903　生まれる	1905　生まれる	1909　生まれる
1933	ダッハウ建設開始			
1938		ダッハウ、ブーヘンヴァルトへ		
1939		解放される		
1940	アウシュビッツ建設開始			
1942				逮捕、強制収容所へ
1943		「極限状況における個		アウシュヴィッツ、

		人および集団の行動」		マウトハウゼンへ
1944			アウシュヴィッツ、ダッハウ周辺の強制労働キャンプへ	
1945	連合軍による解放		米軍により解放	米軍により解放
1946			『夜と霧』	
1953				『強制収容所における人間行動』

この年表から、ベッテルハイムの 1943 年論文がいかに早い時期だったかがわかる。

ベッテルハイムは、1938 年にダッハウに入れられ、翌 1939 年にはすでに解放されている。アウシュビッツのような絶滅収容所が作られるのは 1939 年のことであるから、ベッテルハイムは、まだナチスの絶滅政策が本格化しないうちに解放されたと言えるだろう。

また、ベッテルハイムの論文が書かれた 1943 年は、第二次世界大戦の真っ最中であり、アメリカとドイツは交戦中であった。したがって、ベッテルハイムの論文は、アメリカの地から、敵国ドイツの残虐非道を非難し、ドイツ攻撃を正当化するという政治的な意図も強かっただろう。アイゼンハワー最高司令官がこの論文を高く評価したのもそのあらわれである。このため、ベッテルハイムの論文は、単なる政治的な主張にすぎず、残虐さの記述も大げさすぎるのではないかと見なされたかもしれない。そのために、彼が学術論文の形をとって客観性を強調することはどうしても必要だった。

一方、フランクルは 1944 年、コーエンは 1943 年にアウシュビッツに入れられ、1945 年に解放された。フランクルの 1946 年の本とコーエンの 1953 年の本は、すでに強制収容所が廃止されて、いろいろな資料が公開されはじめてから発表された。この時期になると、強制収容所の悪役ぶりは広く世に知れ渡り、戦争裁判も始まり、強制収容所を批判することは当たり前のことになっていただろう。だから客観性を強調する必要はなくなり、フランクルのように、私的な体験だけを書いて文学性を強調しても信用されたのだろう。

ところで、コーエンは逮捕される前に、強制収容所の情報は文献でだいたい知っていたと述べている。コーエンが逮捕されたのは 1942 年であるから、ベッテルハイムの 1943 年論文を読めるはずはないが、一方、1944 年に収容されたフランクルは、事前にベッテルハイムの 1943 年論文を読んでいたかもしれない。ベッテルハイムの情報を頭に入れて、強制収容所に入ったかもしれない。情報があるほど、不安は弱められたかもしれない。

次に、ベッテルハイム・フランクル・コーエンの段階論を横に並べて比較してみよう。

●３人の段階論の比較

ベッテルハイム 1943 年	フランクル 1946 年	コーエン 1953 年
1) 最初の外傷の段階	1) 収容ショックの段階	1) 初期反応段階
2) 適応の段階 3) 適応の最終段階	2) 無感動の段階	2) 適応の段階 3) 諦めの段階
	3) 解放ショックの段階	

この表からわかるように、３人とも、囚人の心理を、時間的な段階に分けて説明している。これはベッテルハイムの論文が最初である。それぞれ３つの段階に分けているが、分け方は多少異なっている。フランクルだけ解放後のショックの段階に触れている。ちなみに、ベッテルハイムも後に 1979 年の著書で、ベッテルハイムは、強制収容所から解放された後の心理を「強制収容所生存者シンドローム」と呼んだ（『生き残ること』36 頁）。

次に、このような段階を辿るメカニズムについては、３人とも、強制収容所への「適応」を重視し、「自己防衛」のメカニズムであるとしている。これは、フロイトの精神分析的・力動心理学的な説明である。こうした説明の仕方もベッテルハイムが最初である。

このように、ベッテルハイムの 1943 年論文は、その後の強制収容所の心理学研究のレールを敷いたといえる。さらに、後述のように、ここから、心的外傷に対する適応心理学の流れが生まれ、心理学のひとつの潮流を作ることになるのである。

心理学の流れを変えた場所：ダッハウと心理学の深い関係

前に私は「ダッハウ強制収容所は心理学を変えた場所である」と述べたが、ここに来てその理由が少し明確になった。大きく３つの理由がある。第１と第２は直接的な理由であり、第３は間接的な理由である。

もちろん政治的・社会的・文化的影響ということで言えば、ナチスの強制収容所やユダヤ人虐殺の影響は計り知れない。ユダヤ人が戦後に建国したイスラエルは、結果的に現地のアラブ人を追放することになり、中東の政治的危機をもたらし、現在ではイスラエルのアラブ人差別が国際的に非難されるようになった。この文脈で、前述のミュンヘンオリンピックでのアラブゲリラによるイスラエル（ユダヤ人）へのテロ事件がおこったわけである。ユダヤ人学者がアメリカに亡命し、ナチスの侵略を食い止めるために、ユダヤ人物理学者はアメリカで原子爆弾を開発した。冷戦になると核戦争の危機をもたらした。ユダヤ人学者の亡命により、ドイツは学問レベルが低下した。最も損をしたのはドイツである。これについてはマックスプランク研究所のところで述べた。強制収容所がもたらした心理学のパラダイムシフトは、それに比べたら、小さい問題かもしれない。

１）ベッテルハイムから適応心理学へ

ダッハウ強制収容所に収容されたベッテルハイムがその体験をもとに、囚人の心理変化のプロセスを記述し、その政治的な意図を告発した。アイゼンハワーが高く評価するなど、アメリカや連合軍の陣営に大きな影響を与えた。このベッテルハイムの 1943 年論文が、のちのフランクルやコーエンの研究の下敷きとなった。これにより新たに外傷的ストレスの研究の流れが生まれた。理論的には、フロイトの精神分析学・無意識心理学・力動心理学の影響をうけ、これは「適応心理学」と呼ばれる。ダッハウの強制収容所で囚人が体験した心理は、精神分析や力動的心理学の適用範囲を広げたといえる。こうした流れの中心となったのはユダヤ人系の学者であった。適応心理学は、精神分析学と精神医学を結びつけ、精神医学と心理学とを結びつける接着剤の役割も果たした。

２）フランクルから実存主義精神医学へ

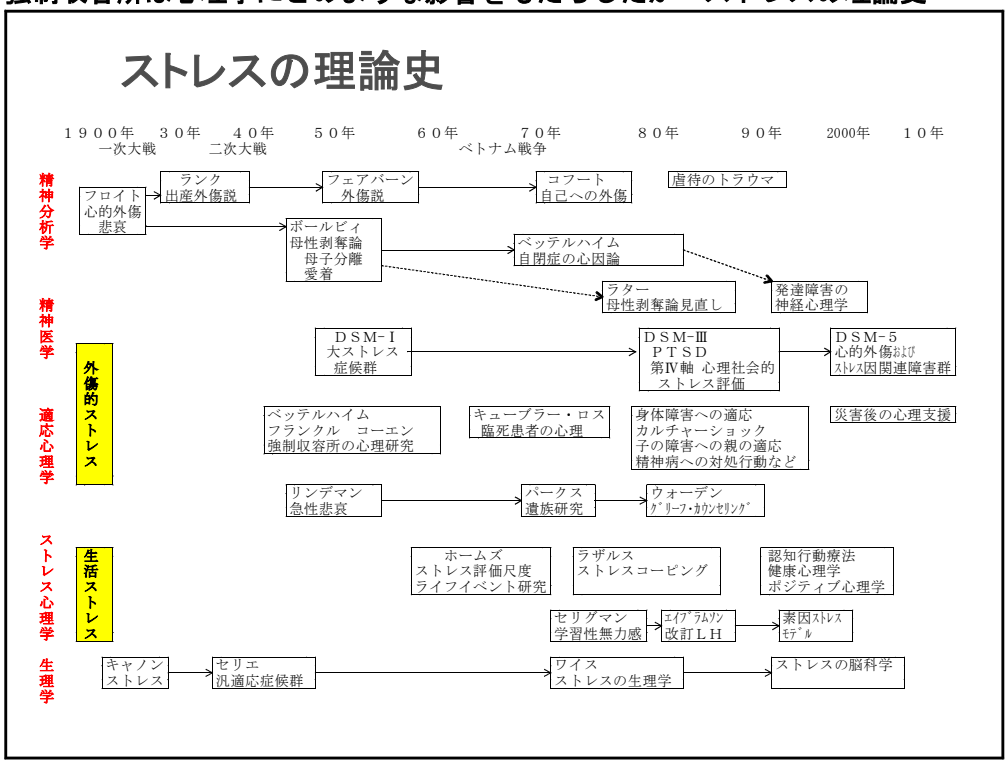
ダッハウ強制収容所の周辺の強制労働キャンプに収容されたフランクルは、心理療法の本質について考察することができた。フランクルは、実存主義哲学を精神医学に応用した実存分析を開拓した。これによって実存主義哲学が精神医学や心理学に大きく入り込んできたのである。また、この動きは、精神分析学と精神医学を結びつけることでもあった。これはヨーロッパでの動きであったが、これは 1960 年代にアメリカにも影響し、人間性心理学の流れが生まれた。こうした流れの中心となったのもユダヤ人系の学者であった。

３）ユダヤ人のアメリカ亡命と精神分析学の世界制覇

ダッハウで最初に生まれた強制収容所は、後にアウシュビッツのような絶滅収容所へと発展し、それによって 600 万人ものユダヤ人が殺された。この被害を避けて、ユダヤの知識人たちはアメリカに亡命した。あらゆる学問領域のうちで、最も極端な形をとったのが精神分析学であった。創始者フロイトがウィーンのユダヤ人医師を中心に広めた精神分析学は、ヒトラーによって完全に抹殺されようとした。オーストリアのウィーンやハンガリーのブダペストの精神分析学者のほとんどが海外に亡命せざるを得なくなった。歴史的にみても、ひとつの学問分野が根絶やしにされかかり、多くが海外亡命せざるを得なかったというのは稀有な現象である。アメリカに亡命した精神分析学者はとてもパワフルに活躍したため、アメリカの心理学や精神医学を乗っ取ってしまった。こうして、心理学と精神医学における精神分析学・力動心理学のパラダイムシフトがおこった。そのひとつの動きが適応心理学であった。1950 年代から 60 年代のアメリカ精神医学と心理学の教授ポストは、ほとんど精神分析系・力動心理学系の学者で占められた。アメリカの精神分析学・力動心理学は、世界を制覇し、この領域の主流として君臨した（日本も真っ先にその影響を受けた）。こうした傾向が、1980 年代のＤＳＭ-Ⅲの時代まで続いたのである。その後は、精神分析療法から認知行動療法へという新たなパラダイムシフトがおこり、現在に至っている。

以下、これらについて、もう少し詳しく説明しよう。

強制収容所は心理学にどのような影響をもたらしたかーストレスの理論史



上で述べたダッハウと心理学の関係について、もう少し詳しく見てみよう。

この図は私が授業のために作ったもので、ストレス研究の流れをみたものである。大きく、①精神分析学、②精神医学、③適応心理学、④ストレス心理学、⑤生理学に分けてある。

参考文献：丹野義彦『性格の心理』第 10 章、サイエンス社、2003.

津田 彰・大矢幸弘・丹野義彦（編）『臨床ストレス心理学（叢書実証にもとづく臨床心理学）』東京大学出版会、2013.

１）精神分析学

精神分析学では、フロイトの心的外傷や悲哀の研究に端を発する心的外傷論の流れがある。ランク、フェアバーン、コフートなどである。最近では、虐待による心的外傷（トラウマ）による精神障害の機序や分析治療の研究がある。

もうひとつ、精神分析学には、心的外傷と母子関係を重視する流れがある。スピッツの依託うつ病の研究（Spitz & Wolf, 1946）が有名である。これを受けて、1950 年代には、イギリスのボールビィの母性剥奪論（マターナルデプリベーション論）が生まれてきた。第二次大戦では大量の戦災孤児が発生し、そのケアは大きな社会問題となった。ボールビィは「母子分離」の現象を調べた。幼児が養育者から引き離されると、以下のような行動をとる（Bowlby, Robertson & Rosenbluth, 1952）。これをボールビィは以下の３段階にまとめた。

１）抗議の段階
２）絶望の段階
３）離脱の段階

養育者から離れた幼児ははじめ泣きわめいて抗議するが、かなわないとわかると絶望にうちひしがれる。さらに、外界への興味を取り戻す離脱の段階に進む。離脱の段階は、一見すると明るくなったように思われるが、養育者と再会しても喜ばず、養育者を忘れてしまったかのようである。つまり、離脱の段階にいたると、養育者との愛着関係は不可逆の溝を飛び越えてしまう。

こうした適応段階の考え方は、ベッテルハイムの 1943 年の強制収容所への適応の３段階論ときわめて似ていることがわかる。ボールビィの 10 年近く前にベッテルハイムは同じような考え方を出していた。

また、ボールビィは「愛着」の理論を提示して大きな影響を与えた。こうした研究がベッテルハイムらの自閉症の心因論・環境因論へと影響を与えた。

２）精神医学

しかし、1960 年代になると、精神医学者のラターによって、ボールビィの母性剥奪理論は見直された。また、自閉症についても、神経心理学など脳科学的な研究が進み、心因論・環境因論は否定された。

また、精神医学においては、「外傷性ストレス」の研究がさかんになった。外傷性ストレスとは、戦争・災害・大事故といった死に結びつくような大きな心理的危機のことをさす。例えば、２つの世界大戦で問題になった戦争神経症（シェルショック）などがそれに当たる。

第二次世界大戦は人間を極限状況におき、多くの犠牲者（戦争神経症、戦争孤児、強制収容所収容者など）が出現した。戦後は、人類規模の喪失感が襲い、喪の期間とな入った。極限状況における人間の心理が研究され、その治療援助方法が模索された。ボールビーの母性剥奪理論、戦争神経症研究、ベッテルハイムらの強制収容所研究は、そうして生まれた。精神分析学や力動的心理学は、人間が自分でコントロールできない無意識の破壊衝動や史の本能を仮定し、大きな影響力があった。

1952 年に、アメリカ精神医学会が診断基準ＤＳＭ-Ⅰ（精神障害の分類と診断の手引き第１版）では、大ストレス症候群という診断名が入り、初めて精神医学の体系に「ストレス」という用語が認められた。ＤＳＭ-Ⅰは、アメリカのアドルフ・マイヤーの反応因・環境因の考え方が強かった。マイヤーは精神分析に影響を受けて独自の「反応型」の体系を作り、何でも「ストレスに対する反応」という枠組みで捉えた。

その後 1960 年代のベトナム戦争後遺症やレイプ被害の増加などにより、ストレス症候群は大きな問題となり、1980 年のＤＳＭ-Ⅲでは、「心的外傷後ストレス障害（Post Traumatic Stress Disorder；ＰＴＳＤ）」という診断名が作られ、この用語は社会でもよく使われるようになった。

また、ＤＳＭ-Ⅲでは多軸評定という診断システムが取り入れられ、ひとりの患者について、Ⅰ軸（臨床症候群）、Ⅱ軸（人格障害と知的障害）、Ⅲ軸（身体疾患）、Ⅳ軸（心理社会的問題とストレス）、Ⅴ軸（生活適応度）という５次元から総合的に診断するものである。ここでⅣ軸に心理社会的ストレスが取りあげられていることは、ストレスが診断で重視されたことを意味している。

2013 年に改訂されたＤＳＭ-５では、多軸評定はなくなったが、ＰＴＳＤなどは「心的外傷およびストレス因関連障害群」という大項目として独立した。ＤＳＭ-ⅢまではＰＴＳＤは、「不安障害」という大項目の下位分類であった。

３）適応心理学

外傷性ストレスの研究は、精神医学だけでなく、心理学でも進んだ。この流れをここでは「適応心理学」と呼んでおこう。適応心理学の特徴は、段階論と変化メカニズム論である。人は、強い外傷体験があると、まずショックの段階があり大きな感情変化を体験するが、外傷環境に適応しようとする段階があり、外傷を受容して諦観の段階に進む。ここまでくると、元に戻れない不可逆の壁を乗り越えてしまう。このような段階を進めるメカニズムは、外界や自分に対する適応機制である。これは、退行や投影といったフロイト精神分析学の自我防衛の機制の影響を受けている。前述のアドルフ・マイヤーの力動精神医学の影響も大きく、正統派のフロイト主義ではない（フロイトが生きていたら彼らは異端として除名されただろう）が、広い意味では精神分析学の一部といってよいだろう。

適応心理学の創設に影響を与えた最初の研究こそが、ベッテルハイムの 1943 年の強制収容所研究であった。ダッハウが心理学を変えた場所と呼んだ理由はここにある。その後、フランクルやコーエンの強制収容所の研究もあらわれた。

続いて、アメリカのキューブラー＝ロスが、死を宣告された末期疾患患者との面接を通じて、患者は①衝撃、②否認、③怒り、④抑うつ、⑤受容、⑥解脱といったプロセスを経ることを明らかにし、それぞれの時期に応じた援助が必要であると述べた。

こうした研究がもとになり、のちに、身体障害（例えば事故で突然足を失うとか、失明するなど）、文化移動、精神障害発病といった重い心的外傷に対する反応の研究がおこなわれた。身体障害への適応過程、カルチャーショック、生まれてきた子が先天的障害を持つことがわかった親の心理的過程、精神病への対処行動などの研究であり、それぞれの心的外傷に対して、とのような心理治療や心理援助をすればよいかが研究された。2011 年以降の日本では災害後の心理や心理支援が大きなテーマとなった。

さらに、リンデマンは、ボストンのキャバレー火災の遺族の治療にあたり、その体験から 1944 年に急性悲哀の研究を発表した。ここからハーバード遺族研究がはじまり、パークスの遺族の心理の研究、ウォーデンのグリーフカウンセリングなどの系列が生まれた。

ここでベッテルハイムによって定式化された外傷的ストレスへの心理的変化理論が、のちにどのように応用されたかをみておこう。

●ベッテルハイムから心的外傷論の一般理論へ

外傷的ストレスへの心理的反応		
強制収容所の被抑留者の心理	母から隔離された子の心理	臨死患者の心理
ベッテルハイム 1943 年	ボールビィ 1952 年	キューブラーロス 1969 年
1)最初の外傷の段階	1)抗議の段階	衝撃　否認　怒り　取引
2)適応の段階 3)適応の最終段階	2)絶望の段階 3)離脱の段階	抑うつ 受容　解脱

この表に示されるように、ベッテルハイム（1943）の強制収容所の３段階の枠組みが、ボールビィ（1952）の母から隔離された子の心理や、キューブラーロス（1969）の臨死患者の心理の研究に影響を与えていることがわかる。大きな外傷的ストレスに対して、人は「適応」していき、やがては不可逆的な段階に至る。外傷的ストレスの範囲が拡大し、理論はしだいに精緻化されていった。

ちなみに、ベッテルハイムの自閉症論の誤りもこの表からわかる。ボールビィのように母親と離された子どもが、心的外傷を持つのである。ベッテルハイムが母親から自閉症児を離したことは新たな心的外傷を作り出すことになった。

４）ストレス心理学

一方、精神分析学の影響を受けない実証心理学においては、「ストレス心理学」という領域も育ってきた。その特徴は、「生活ストレス」の分析にある。外傷性ストレスの研究は、世界戦争や大虐殺など大量死に対する社会的な反応と言ってもよい。したがって、大戦後、時間がたち、大量死がなくなり、生死にかかわるような極限状況の外傷ストレスに出会うことは少なくなった。それよりも「日常ストレス daily hassles」（対人関係や仕事や健康といった日常生活で誰でも経験するようなストレス）のほうが、人の健康を左右する大問題となる。こうした状況では、自分でコントロールできない無意識プロセスよりも、むしろ自分でコントロールをする意識プロセスが大切になってくる。

ホームズとラーエは、ライフイベントの研究において、社会的再適応尺度を開発して、ストレッサーのインパクト度を数量化する方法を作った。また、ラザルスのコーピング（対処行動）の理論は後のストレス心理学の基礎を築いた。対処行動を「問題焦点型コーピング」と「情動焦点型コーピング」に分けるなど、この研究は人間の精神的健康を維持するための実証的な方法論を築いた。ストレス対処には、ストレッサーをどう認知するかという「認知的評価」が重要であることを指摘した。ラザルスの評価理論は「認知行動療法」の基礎理論のひとつとなった。ストレス対処により心身の健康を維持向上させる健康心理学もさかんである。これまでの適応心理学が人間のネガティブな側面を扱うのに対して、健康や自己実現など人間のポジティブな側面を扱う「ポジティブ心理学」もこの流れにある。また、セリグマンの「学習性無力感理論」から「素因ストレスモデル」や「絶望感抑うつ理論」に至る社会臨床心理学の研究は、ストレッサーの役割を重視している。

このようなストレス心理学は、適応心理学にかわって、ストレスの心理学研究の主流を占めるようになった。全体の流れとして、精神分析学から認知行動療法へのパラダイムシフトがおこっている。

５）生理学

最後に、生理学では、「ストレス」という用語の名付け親のキャノンの研究や、セリエの汎適応症候群理論、ワイスのストレスの生理学理論などが有名である。現在では、ストレスの脳科学研究もさかんである。

ユダヤ人精神分析学者のアメリカ亡命

ストレス研究に決定的な役割を果たしたのはユダヤ人である。これには２つの経路があった。

第１は、1933 年からのヨーロッパの強制収容所において、ユダヤ人は途方もない心的外傷を負い、それがユダヤ人であるベッテルハイムやフランクルの研究をもたらす結果となったことである。適応心理学の流れを初めて作ったのはユダヤ人の精神分析学関係者であった。ダッハウが心理学を変えたというのはこの意味である。

第２は、ナチスのユダヤ人迫害により、中部ヨーロッパの精神分析学者の多くが、亡命を余儀なくされたことである。フロイトの精神分析学はウィーンのユダヤ人を中心に創設された。1933 年にフロイトや精神分析学の著書はベルリンで焚書となった。精神分析学者の３分の２は亡命した。ひとつの学問分野が根絶やしにされたというのはきわめて珍しく、精神分析学だけである。それでも、フェルミによれば、強制収容所で死んだ者の数は、精神分析学者は他の学問分野より少ないのだという。医師が多かったからだろうか。

亡命した精神分析学関係者の生地と亡命先をリストアップしてみよう。

●亡命した精神分析学関係者

学者	生地	亡命先
フロイト アンナ・フロイト	オーストリア	イギリス
メラニー・クライン フークス	ドイツ	
バリント	ハンガリー	
ライヒ フェニケル ライク スピッツ ザックス フェダーン ハルトマン コフート シルダー アドラー	オーストリア	アメリカ

アレグザンダー ラドー マーラー ラパポート ローハイム	ハンガリー	
ホーナイ フロム フロム・ライヒマン エリクソン	ドイツ	

参考文献：フェルミ『亡命の現代史１　二十世紀の民族移動１』掛川トミ子・野水瑞穂訳、みすず書房

この表からわかるように、生地は、圧倒的にオーストリアが多い。フロイトの愛弟子たちはウィーン学派と呼ばれるが、この学派はほとんどが亡命を余儀なくされた。次に多いのはハンガリーである。オーストリア・ハンガリー帝国をドイツが侵略したため、ハンガリーのブダペストの精神分析学者が亡命を余儀なくされた。あとはドイツ国内のユダヤ人である。

亡命先については、はじめ多くの者はヨーロッパにとどまることを望んだ。フロイト親子はイギリスに亡命した。しかし、ナチスがヨーロッパ全域を侵略すると、ほとんどがアメリカに亡命した。アメリカでは支持者が亡命者たちを手厚くサポートした。これによって、ニューヨークは精神分析学の世界的首都となった。アメリカで心理学がさかんになったのは、精神分析学者の亡命があったからである。1950 年代には、アメリカの医学部精神科の教授ポストは、精神分析や力動精神医学の学者に占められるようになった。

ダッハウと心理学の逆説的関係

逆説的な言い方になるが、もしダッハウ強制収容所がなければ、ベッテルハイムもフランクルも世に出ることはなかったかもしれない。別の学者が別の理論を出したかもしれないが、これほど影響力のある理論が生まれてきたかどうかはわからない。もし人類が強制収容所の体験を持たなければ、実存主義哲学・実存精神医学・精神分析学・人間性心理学がこれほど世界に影響を与えただろうか。

もし強制収容所がなければ、ユダヤ人の精神分析学者は、迫害されることなく、オーストリアやハンガリーで活躍し続けていただろう。精神分析学は、中欧における地域的（ローカル）で特殊な学問でしかなかっただろう。性を主題とし、神秘主義的で物好きな思想程度にしかならなかったのではなかろうか。もしユダヤ人の精神分析学者がアメリカに亡命しなかったら、アメリカで精神分析学は花開くはずもなく、精神分析学や力動心理学が世界を席巻することもなかっただろう。

逆説的といったのはこのことであり、精神分析学にとって、果たしてどちらの道が幸福だったのだろうか。

精神分析学の栄枯盛衰

多大な犠牲を払ってアメリカに花開いた精神分析学であったが、1970 年頃からしだいに衰退していった。これにはさまざまな理由がある。

１）心理学的精神医学から生物学的精神医学へ

薬物療法や脳科学の発達で生物学的精神医学が台頭したこと、

1940 ～ 1950 年代にかけては、自閉症や統合失調症の心因論がさかんに主張された。カナーが自閉症児の母親の問題を指摘し、自閉症の原因は母子関係の心理的要因であると考えられた。自閉症は統合失調症が最早期に発症したものだという仮説が主張され、冷たい家族関係や誤った育児方法が原因であるとする心因論・環境因的な解釈が強かった。そこで、ベッテルハイムのような精神分析理論にもとづく受容型の遊戯療法がおこなわれた。しかし、そうした受容型の心理療法はあまり効果が得られなかった。

1960 年代以降はこうした仮説を否定する研究が多くなった。そして、一度の大きなパラダイムシフト（心因論から生物学的原因論へ）と、小さいパラダイムシフト（言語・認知障害節から対人・情動障害仮説へ）をへて、現在は、精神分析学的な心因論・環境因論・トラウマ論は否定され、生物学的要因による対人・情動障害説に収束してきている。

「素因かストレスか」という二項対立で言うと、ストレス重視から、素因重視へとに変わった。こうした動向は、自閉症だけでなく、ＡＤＨＤなどの発達障害全体について当てはまる。

参考文献：東條吉邦・丹野義彦・大六一志（編）『発達障害の臨床心理学（叢書・実証にもとづく臨床心理学）』東京大学出版会、2010.

横田正夫・丹野義彦・石垣琢麿（編）『統合失調症の臨床心理学（叢書・実証にもとづく臨床心理学）』東京大学出版会、2003.

２）力動的精神医学から記述精神医学へ

診断基準ＤＳＭが成功して普及することにより、記述精神医学の力が強まった。これによって力動的精神医学が衰退した。

３）ナラティブからエビデンスへ

精神分析学はエビデンスがない。無意識を重視するので、心は意識できない部分が多いため、明快なエビデンスがない。科学的な検証を受けることができない。精神分析学を哲学的に批判したポパーは、精神分析の理論は反証可能性がないので、科学理論とは言えないという。

精神分析学の原理はナラティブであり、言ってみれば「面白さの基準」である。面白いためになるナラティブができればそれでよい。それが事実であるかどうかはどうでもよい。証明することはできないのだから、証明しなくてよいとする。、「正しさの基準」ではなくて「面白さの基準」である。正しいかどうかはわからないのだから、勝手なことが言える。だから一般にはウケるのだが、専門家からは眉をひそめられる。芸術とか文化では無意識論は役に立つのかもしれないが、精神医学や心理学では信用されない。

社会的にエビデンス・ベースト・メディシン（実証にもとづく医学）の原則が浸透し、精神分析は信用されなくなってきた。精神分析療法の治療効果が低いことが明らかになった。

４）精神分析療法から認知行動療法へ

社会的にエビデンスが重視され、精神分析療法の治療効果が低いことが明らかになった。このため、アメリカでは保険会社が、精神分析療法に対する診療報酬を支払いにくくなったこと。その象徴となるのがメニンガー・クリニックの倒産である。

これに対し、認知行動療法など治療効果の高い心理療法技法が開発された。短時間で大きな効果が得られることが証明され、心理療法の主流となった。ＰＴＳＤに対しても、認知行動療法は治療効果のエビデンスがある。これまでおこなわれてきたデブリーフィング法は、自然回復を阻害するためむしろ有害であることがわかってきた。

大きな流れとして、「精神分析療法から認知行動療法」へのパラダイムシフトがおこっている。

５）外傷的ストレスから生活ストレスへ

ストレッサーの質が時代とともに変わってきたことも原因である。

外傷性ストレスの研究は、世界戦争や大虐殺など大量死に対する社会的な反応と言ってもよい。大戦後、時間がたつと大量死がなくなっていったので、こうした流れも弱くなった。世の中が平和を取り戻すにつれて、大量の人が極限状況のストレスに追い込まれることは少なくなった。

かわって、「日常ストレス daily　hassles」（対人関係や仕事や健康といった日常生活で誰でも経験するようなストレス）のほうが大きな問題となる。これにともなって、ストレス心理学や健康心理学の流れが強くなり、精神分析や力動的心理学はしだいに背景に退いていった。

６）病院治療から地域医療へ

心理的障害がおこってから治療するのはなく、問題がおこる前から援助する「予防的危機介入」が重要になった。例えば、自殺がおこなわれてからカウンセリングなどをおこなっても遅いわけであり，自殺をしようとしている人に，自殺を思いとどまらせなければ意味がない。また，アルコール依存の人のための断酒会に代表されるような「自助グループ」の活動などもある。こうした予防的危機介入がうまくいくためには，地域との密接な関係を保つことが重要となってくる。そのために「コミュニティ心理学」とか「地域精神医療」といった考え方が重視されるようになってきている。イギリスやアメリカでは、精神科医療は病院中心ではなくなり、地域医療が中心となっている。ここでは、フロイト型の個人療法のスタイルでは歯が立たなくなっている。

第５章　最後に

ミュンヘン・ベスト３

最後にミュンヘンのアカデミック・ツアーのベスト３を選んでみよう。

１．ダッハウ強制収容所跡
２．ケーニッヒ広場の周辺の学術施設と芸術施設
３．Ｕバーン６号線の南と北の終点であるグロスハデルン（ミュンヘン大学）とガーヒング（ミュンヘン工科大学）の未来志向のキャンパス

○使用した写真は、出典を示していないものは自分で撮影したものである。

●元に戻る
http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/